

こう どの
神殿遺跡 B・C 地区

みなみ ひら
南平第3遺跡

みなみ ひら
南平第4遺跡

なか の はら
中ノ原遺跡

国道218号高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書(2)

1999

こう どの
神殿遺跡 B・C 地区

みなみ ひら
南平第3遺跡

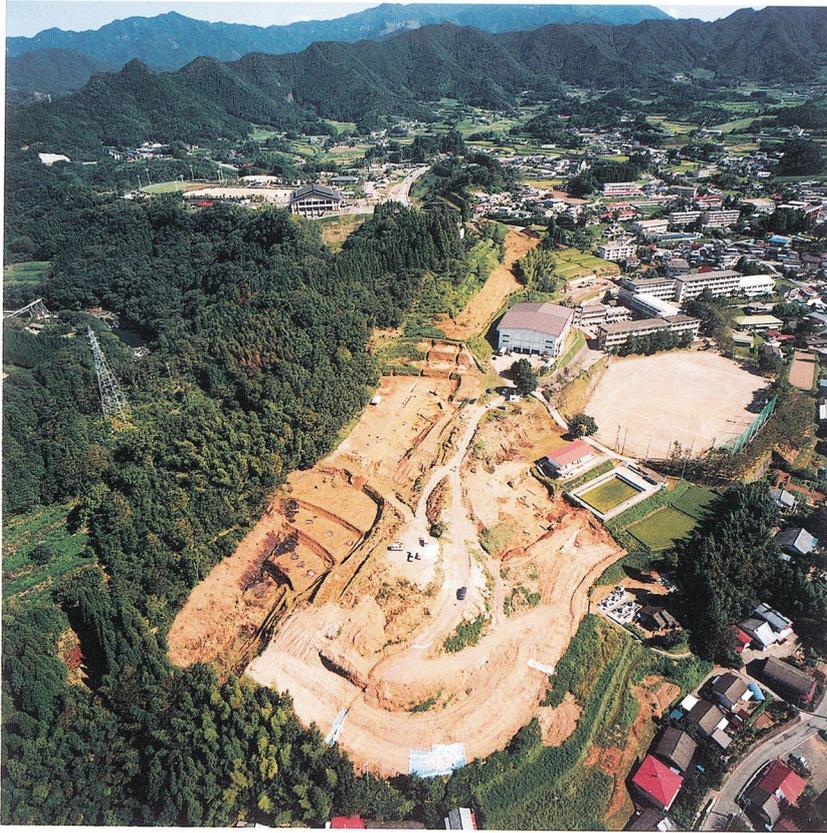
みなみ ひら
南平第4遺跡

なか の はら
中ノ原遺跡

国道218号高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書(2)

1999

宮崎県埋蔵文化財センター



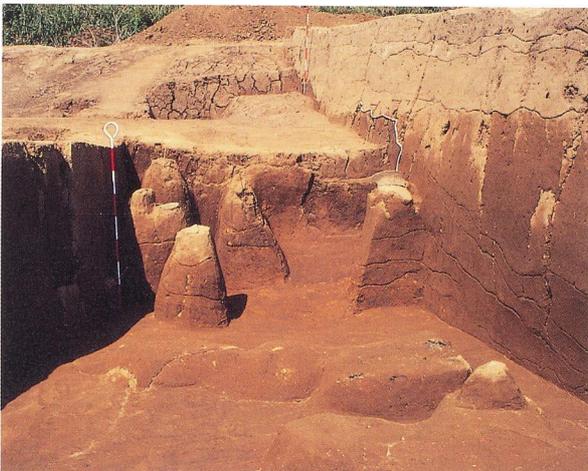
神殿遺跡A、B地区
航空写真（南から）



神殿遺跡 B地区
竪穴式住居(SA1)
左：完掘状況
（南から）

左下：東部遺物、焼土
検出状況
（南西から）

右下：土層断面の状況
（北東から）
〈第10図 断面B-B'〉





神殿遺跡C地区
遠景



南平第3遺跡
住居跡検出状況

序

日頃より本県の埋蔵文化財の保護・活用につきましては、ご協力をいただき感謝申し上げます。

この報告書は、宮崎県教育委員会が建設省延岡工事事務所の委託を受けて、平成6年から平成8年にかけて、国道218号線高千穂バイパス建設予定地内に確認された遺跡の発掘調査記録であります。

中ノ原遺跡では陥し穴状遺構が発見され、南平第4遺跡では縄文時代早期の遺物が見つかりました。特に、神殿遺跡や南平第3遺跡で検出された弥生時代後期から古墳時代の住居址群は、当時の人々の集落の立地や生活の様子を考える上で貴重な資料であり、出土遺物では瀬戸内や畿内地方の影響を受けた土器が出土するなど、肥後あるいは豊後地方だけでなく遠く離れた地域からの文化の流入も読み取ることができます。

最後となりましたが、発掘調査に際し、建設省および地元の方々をはじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表すとともに、本書が文化財理解の契機となり、広く活用されることを願っております。

平成11年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 田 中 守

例 言

1. 本書は、国道218号高千穂バイパス建設に伴い、建設省延岡工事事務所の委託を受けて県教育委員会が実施した4遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の期間および調査体制は第1章のとおりである。
3. 本書使用の遺構実測図は、岩永哲夫、米久田真二、戸高真知子、松林豊樹、谷口武範、飯田博之、日高広人が作成した。
4. 本書使用の遺物実測図は、戸高、松林、谷口のほか整理作業員の協力を得た。
5. 本書使用の写真は、米久田、戸高、松林、谷口が撮影した。
6. 本書使用の図面の製図は、戸高、松林、谷口のほか整理作業員の協力を得た。
7. 本書の執筆は、米久田、戸高、松林、谷口が分担してあたり、文責は目次に明記した。
8. 土層および土器の色調については「新版標準土色帖」による。
9. 本書使用の方位は磁北である。
10. 本書では、遺構に次の略号を使用している。
 竪穴住居跡・・・SA 土坑・・・SC 不明遺構・・・SZ
11. 本書の編集・構成は谷口が担当した。
12. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第I章 序説	1
1 調査にいたる経緯	1
2 調査の経過と調査の組織	1
第II章 遺跡の位置と環境	6
1 遺跡の位置と周辺の地形	6
2 遺跡の立地と歴史的環境	6
第III章 神殿遺跡B・C地区の調査	9
1 神殿遺跡B地区の調査	9
1) 遺跡の立地	9
2) 調査の概要	12
3) 縄文時代の遺物	15
4) 弥生～古墳時代の遺構と遺物	15
5) 歴史時代の遺構と遺物	20
6) 時期不明の遺構と遺物	27
7) まとめ	30
2 神殿遺跡C地区の調査	45
1) 遺跡の立地と調査の概要	45
2) 調査の経過	45
3) 遺跡の層序	48
4) 遺構と遺物	48
5) まとめ	63
第IV章 南平第3遺跡の調査	79
1) 遺跡の立地	79
2) 調査の概要	79
3) 層序	81
4) 縄文時代の遺構と遺物	82
5) 弥生時代の遺構と遺物	91
6) その他の遺構と遺物	141
7) まとめ	143
別篇 自然科学分析調査報告書	173
I 土器内埋土の植物珪酸体分析	173
II 放射性炭素年代測定結果	180
III 南平第3遺跡出土の赤色顔料について	182
第V章 南平第4遺跡の調査	185
1) 遺跡の環境と調査の概要	185
2) 遺跡の層序	185
3) 遺物	185
4) まとめ	189
第VI章 中ノ原遺跡の調査	195
1) 遺跡の立地と環境	195
2) 調査の経過	195
3) 遺跡の層序	195
4) 遺構と遺物	198
5) 宮崎県、中ノ原遺跡の自然科学分析	211
中ノ原遺跡の土層とテフラ	211
中ノ原遺跡出土炭化材の樹種同定	214
中ノ原遺跡の植物珪酸体分析	221
6) まとめ	221
報告書抄録	232

挿 図 目 次

第I章 序 説

第1図 遺跡位置図	5
-----------	---

第II章 遺跡の位置と環境

第1図 遺跡位置図	7
-----------	---

第III章 神殿遺跡B・C地区の調査

1 B地区の調査

第1図 神殿遺跡調査対象区域および調査区位置図 (1/5000)	9
第2図 神殿遺跡調査区周辺地形図 (1/1250)	10
第3図 神殿遺跡A・B地区 (I区) 遺構分布図 (1/300)	11
第4図 神殿遺跡B地区トレンチT2土層断面実測図 (1/40)	12
第5図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (1)	16
第6図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (2)	17
第7図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (3)	18
第8図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器 (4)	19
第9図 神殿遺跡B地区SA1および周辺の土層断面実測図 (1/50)	22
第10図 神殿遺跡B地区SA1実測図および土層断面実測図 (1/50)	23~24
第11図 神殿遺跡B地区出土弥生~古墳時代および時期不明の遺物実測図	25
第12図 神殿遺跡B地区土坑SC1~5実測図 (1/40)	26
第13図 神殿遺跡B地区出土古墳時代~古代の土器 (1/4)	28
第14図 神殿遺跡B地区出土遺物	29
第15図 神殿遺跡A地区出土遺物 (参考資料)	32

2 C地区の調査

第1図 神殿遺跡C地区土層断面図	46
第2図 神殿遺跡C地区遺構分布図	47
第3図 神殿遺跡C地区SA1遺構実測図	49~50
第4図 神殿遺跡C地区SA2遺構実測図	52
第5図 出土土器実測図 (1)	53
第6図 神殿遺跡C地区SA3遺構実測図	54
第7図 出土土器実測図 (2)	55
第8図 神殿遺跡C地区SC1遺構実測図及び出土土器実測図	56
第9図 出土土器実測図 (3)	59
第10図 出土石器実測図 (1)	60
第11図 出土石器実測図 (2)	61
第12図 出土石器実測図 (3)	62

第IV章 南平第3遺跡の調査

第1図 遺跡位置図および遺構分布図	80
第2図 土層図	81
第3図 柱穴状遺構および出土遺物実測図	83
第4図 縄文土器実測図 (1)	85
第5図 縄文土器実測図 (2)	86
第6図 石器実測図 (1)	89
第7図 石器実測図 (2)	90
第8図 1号住および出土遺物実測図	92
第9図 2号住および出土遺物実測図	93
第10図 3・5号住居実測図	94
第11図 3・5号住居出土遺物実測図	95
第12図 4号住居および出土遺物実測図	96
第13図 6号住居および出土遺物実測図	98
第14図 7号住居実測図	99

第15図	7号住居出土遺物実測図(1)	100
第16図	7号住居出土遺物実測図(2)	101
第17図	8号住居および出土遺物実測図	102
第18図	9号住居および出土遺物実測図	103
第19図	10号住居実測図	104
第20図	10号住居出土遺物実測図	105
第21図	11号住居実測図	106
第22図	11号住居出土遺物実測図	107
第23図	12号住居および出土遺物実測図	108
第24図	13号住居および出土遺物実測図	109
第25図	14号住居および出土遺物実測図	110
第26図	15号住居および出土遺物実測図	111
第27図	16号住居および出土遺物実測図	112
第28図	17号住居実測図	114
第29図	17号住居出土遺物実測図	115
第30図	18号住居実測図	116
第31図	18号住居出土遺物実測図(1)	117
第32図	18号住居出土遺物実測図(2)	118
第33図	19号住居実測図	119
第34図	20号住居実測図	120
第35図	19・21号住居出土遺物実測図	122
第36図	21号住居実測図	123
第37図	22号住居実測図	124
第38図	23号住居および21号住居出土遺物実測図	126
第39図	22・23号住居出土遺物実測図	127
第40図	24号住居および出土遺物実測図	128
第41図	25・26号住居実測図	129
第42図	25号住居出土遺物実測図	130
第43図	遺構外出土遺物実測図(1)	132
第44図	遺構外出土遺物実測図(2)	133
第45図	1・2号土坑実測図	141
第46図	須恵器・陶磁器・土錐実測図	142
第V章 南平第4遺跡の調査		
第1図	南平第4遺跡位置図	186
第2図	南平第4遺跡位置図	187
第3図	南平第4遺跡A地区土層断面図	187
第4図	出土土器実測図	188
第5図	出土石器実測図	188
第VI章 中ノ原遺跡の調査		
第1図	中ノ原遺跡位置図	196
第2図	中ノ原遺跡調査区	197
第3図	中ノ原遺跡基本土層柱状図及び土層断面図	197
第4図	中ノ原遺跡遺構分布図	200
第5図	SC1遺構分布図	202
第6図	SC2遺構分布図	203
第7図	SC3遺構分布図	204
第8図	SC4・5遺構実測図	205
第9図	出土土器実測図(1)	207
第10図	出土土器実測図(2)	208
第11図	出土石器実測図(1)	209
第12図	出土石器実測図(2)	210

表 目 次

第II章 神殿遺跡B・C地区の調査

1 B地区の調査

第1表 神殿遺跡I区 検出遺構・遺物…………… 13

第2～6表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(1)～(6)…………… 33～36

2 C地区の調査

第1～2表 神殿遺跡C地区出土土器観察表…………… 65～66

第3表 神殿遺跡C地区縄文土器観察表…………… 66

第4表 神殿遺跡C地区石器計測表…………… 67

第IV章 南平第3遺跡の調査

第1表 南平第3遺跡出土土器観察表…………… 87

第2表 石器観察表…………… 89

第3～8表 南平第3遺跡出土土器観察表(1)～(6)…………… 134～139

第9表 石器観察表…………… 140

第10表 住居址一覧表…………… 148

第VI章 南平第4遺跡の調査

第1表 南平第4遺跡出土土器観察表…………… 190

第2表 南平第4遺跡出土石器観察表…………… 190

第VII章 中ノ原遺跡の調査

第1～2表 中ノ原遺跡出土土器観察表(1)～(2)…………… 223～224

第3表 中ノ原遺跡出土石器計測表…………… 225

- 口絵カラー1 神殿遺跡A・B地区航空写真
神殿遺跡B地区竪穴住居跡(SA1)完掘状況
遺物出土状況 土層断面
- 口絵カラー2 神殿遺跡C地区航空写真
南平第3遺跡住居跡検出状況

第 I 章 序 説

1 調査にいたる経緯

一般国道 218 号は、延岡市を起点とし、高千穂町を経て熊本市にいたる宮崎県北部と熊本を結ぶ主要幹線として利用されているが、建設省九州地方建設局延岡工事事務所によって高千穂町内の交通渋滞の緩和と県北交通網整備の一環として、一般国道 218 号高千穂バイパス、延長約 4.7 km が計画された。

県文化課では、予定路線内の分布調査および試掘調査を実施し、5～6 箇所 of 遺跡および遺跡推定地を確認した。建設省との協議の結果、高千穂大橋西側から高千穂町武道館までを 1 期工事として竣工することとなり、昭和 63 年～平成 2 年の間に宮の前第 2 遺跡、吾平原第 2 遺跡、城ノ平遺跡の 3 遺跡が調査され、平成 5 年に調査報告書が刊行された。

今回は 2 期工事として、高千穂高校東側から終点押方地区までの約 5 km の工事が計画された。県文化課では工事計画に伴い、平成 5 年度から確認掘調査を実施しながら建設省と繰り返し協議を行い、平成 6 年度に神殿遺跡 B 地区、中ノ原遺跡を、平成 7 年度に南平第 3 遺跡、平成 8 年度に南平第 4 遺跡、神殿遺跡 C 地区の 4 遺跡 5 箇所の発掘調査を実施した。また、調査終了後、平成 9 年度は遺物整理、平成 10 年度に遺物整理および報告書作成を行うことになった。

2 調査の経過と調査組織

平成 6 年度の調査

工事の計画にあわせ、起点側の神殿遺跡 B 地区と、終点側の中ノ原遺跡の 2 遺跡の調査を行った。

高千穂高校西側バイパス工事は、隣接して施工される高千穂高校第 2 グランド造成工事の廃土を盛土に利用して行われるが、高千穂高校第 2 グランド造成区域内においても遺跡が確認されており、経費・期間等の節減の理由から、神殿遺跡 A・B 地区の調査を同時に実施した。

また、神殿遺跡調査中、平成 6 年 9 月 10 日に現地説明会も開催し、約 50 人の見学者が訪れた。

神殿遺跡 B 地区

所在地 西臼杵郡高千穂町大字三田井
調査期間 平成 6 年 5 月 23 日～平成 6 年 9 月 16 日
調査面積 3,000m²

中ノ原遺跡

所在地 西臼杵郡高千穂町大字押方
調査期間 平成 6 年 9 月 27 日～平成 7 年 2 月 17 日
調査面積 2,300m²

調査主体 宮崎県教育委員会
教育長 田原直廣
教育次長 中田 忠
八木 洋

調査総括	文化課長	江崎富治
	課長補佐	田中雅文
	庶務係長	高山惠元
事務担当	庶務係主査	宮越 尊
	主任主事	横山幸子
調査担当	主幹兼埋蔵文化財	
	第1係長	岩永哲夫
	主 査	谷口武範（調整および調査担当）
	主任主事	戸高真知子（調査担当）
	調査員	米久田真二（調査担当）

平成7年度の調査

平成6年10月の確認調査によって、多くの縄文後期～晩期の土器、弥生土器、石器、管玉等を出土し、比較的良好な状態で遺跡が残存していることが予想された。また、この調査によって、集落が丘陵部だけでなく、水の流れや防御に不利な谷部においても、遺跡が存在することが確認され、今後の遺跡の立地を考えるうえで貴重なものとなった。

南平第3遺跡

所在地 西臼杵郡高千穂町大字押方
 調査期間 平成7年4月26日～平成7年11月2日
 調査面積 1,280m²

調査主体	宮崎県教育委員会		
	教育長	田原直廣	
	教育次長	中田 忠	
		八木 洋	
調査総括	文化課長	江崎富治	
	課長補佐	田中雅文	
	主幹兼庶務係長	高山惠元	
事務担当	庶務係主査	宮越 尊	
	主任主事	横山幸子	
調整担当	埋蔵文化財第1係	主 査	菅付和樹
調査担当	主幹兼埋蔵文化財		
	第2係長	岩永哲夫	
	主 事	松林豊樹	
	調査員	米久田真二	

平成8年度の調査

平成7年11月に下記の2遺跡の試掘調査後、周辺の土地買収関係が完了したので、平成8年度に南平第4遺跡と神殿遺跡C地区の調査を実施した。この調査で昭和63年から行ってきた高千穂バイパス関連のすべての調査を終了することとなった。

南平第4遺跡

所在地 西臼杵郡高千穂町大字押方
調査期間 平成8年4月22日～平成8年6月11日
調査面積 500m²

神殿遺跡C地区

所在地 西臼杵郡高千穂町大字三田井
調査期間 平成8年6月5日～平成8年11月8日
調査面積 1,000m²

調査主体 宮崎県教育委員会
教育長 田原直廣
教育次長 中田 忠
八木 洋
調査総括 文化課長 江崎富治
庶務係長 高山恵元
埋蔵文化財係長 面高哲郎
主 査 菅付和樹（調整担当）

調査・整理

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 藤本健一
副所長兼調査
第1係長 岩永哲夫
庶務係長 三石泰博
主任主事 吉田秀子
主任主事 磯貝政伸
調査第2係長 北郷泰道
主 査 谷口武範（調整及び調査担当）
調査員 米久田真二（調査担当）

平成9・10年度の調査

平成9年度は4遺跡分の遺物整理、平成10年度は遺物整理および報告書作成を実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会
教育長 田原直廣
教育次長 中田 忠
八木 洋
調査総括 文化課長 江崎富治
庶務係長 高山恵元
埋蔵文化財係長 北郷泰道
調整担当 主 査 柳田宏一
報告書担当 主 事 松林豊樹

整理

宮崎県埋蔵文化財センター

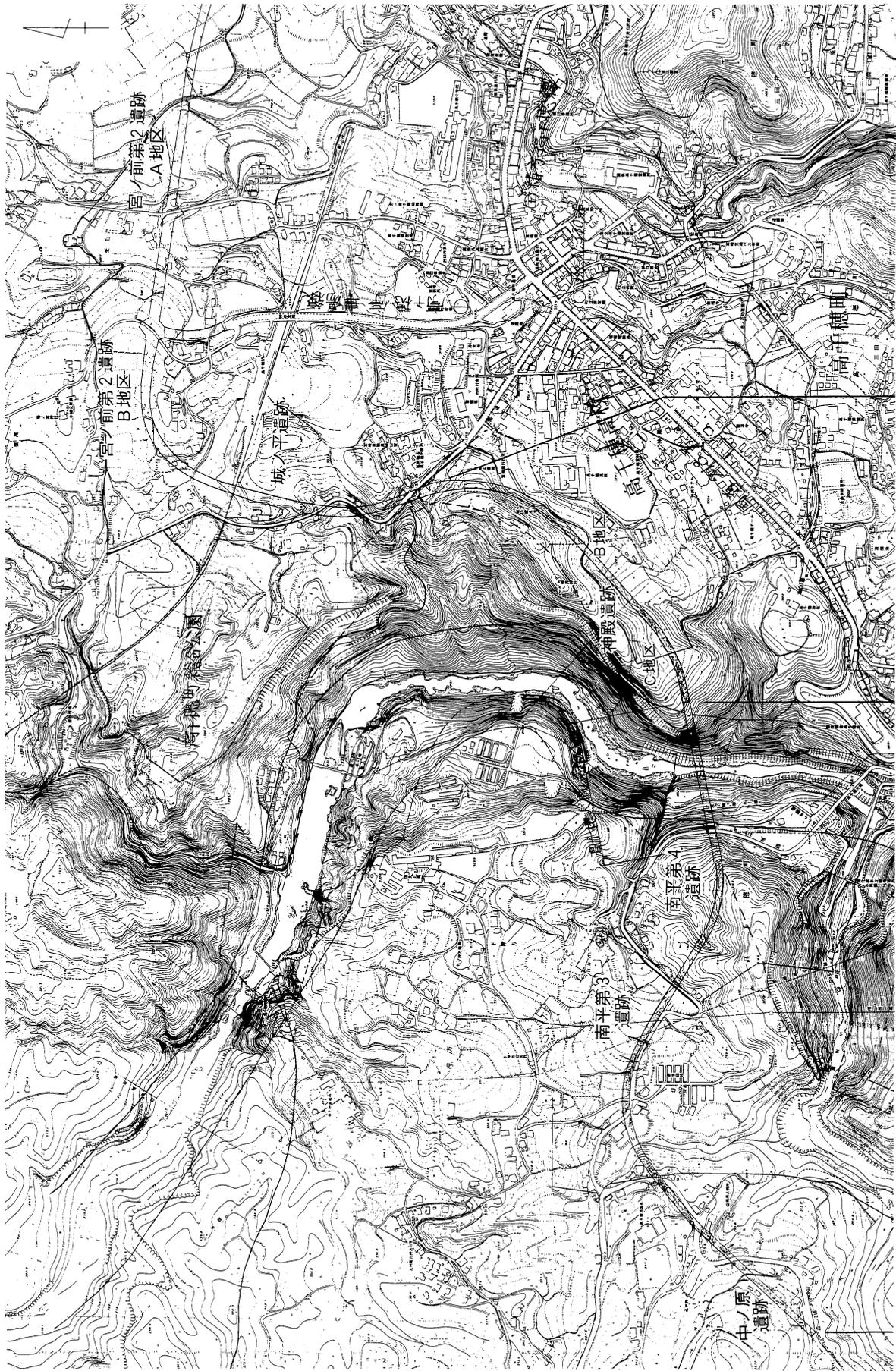
所 長 藤本健一（平成9年度）
田中 守（平成10年度）

副所長兼調査

第2係長 岩永哲夫（平成9年度）
庶務係長 三石泰博（平成9年度）
児玉和昭（平成10年度）
主任主事 吉田秀子
主任主事 磯貝政伸
調査第1係主任主事 戸高真知子
調査第2係長 青山尚友（平成10年度）
主 査 谷口武範（調整及び整理担当）
調査員 米久田真二（平成9年度）

調査指導および協力者

賀川光夫（別府大学名誉教授） 甲元真之（熊本大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授）
今津節生（檀原考古学研究所） 緒方俊輔（高千穂町教育委員会） 成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）



第1図 遺跡位置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と周辺の地形

神殿遺跡B・C地区、南平第3遺跡、南平第4遺跡、中ノ原遺跡は、宮崎県の北西端に位置する高千穂町内にあり、神殿遺跡B・C地区は、その三田井地区の北西端に、その他の遺跡は押方地区の南部に所在する。

高千穂町は、大分県・熊本県と県境を接しており、北には祖母・傾山系、西には阿蘇外輪山を臨む九州山地の懐の中にありながら、初めて訪れる人を驚嘆させるほど広大な盆地状の地形が拡がり、周囲に連なる鋸歯状とも言うべき山稜を持つ急峻な低山地と相まって、独特の景観を呈している。この地形の特異さを形成しているものは、西臼杵地方の旧河谷を埋没させた更新世の阿蘇火砕流、それによる途轍もなく厚く膨大な阿蘇溶結凝灰岩を再び浸食した五ヶ瀬川とその大小の支流、川の両岸に屏風様にそそり立つ急崖、さらに、阿蘇溶結凝灰岩層の上にあって、いくつもの支流の開析により小丘と斜面地が形成された台地状の地形、加えて、周囲の低山地の上層の、浸食されずに先鋒状に残ったチャート層、などである。

こうした平坦部の少ない地形の中にあって、遺跡の立地には、南に面した緩斜面地を選択している例が多く見られる。神殿遺跡B・C地区のある三田井地区は、現在も市街地となっているように、町内で最も居住地に適した緩斜面地が多く、全体的に起伏の少ない地形で、遺跡数も多い。

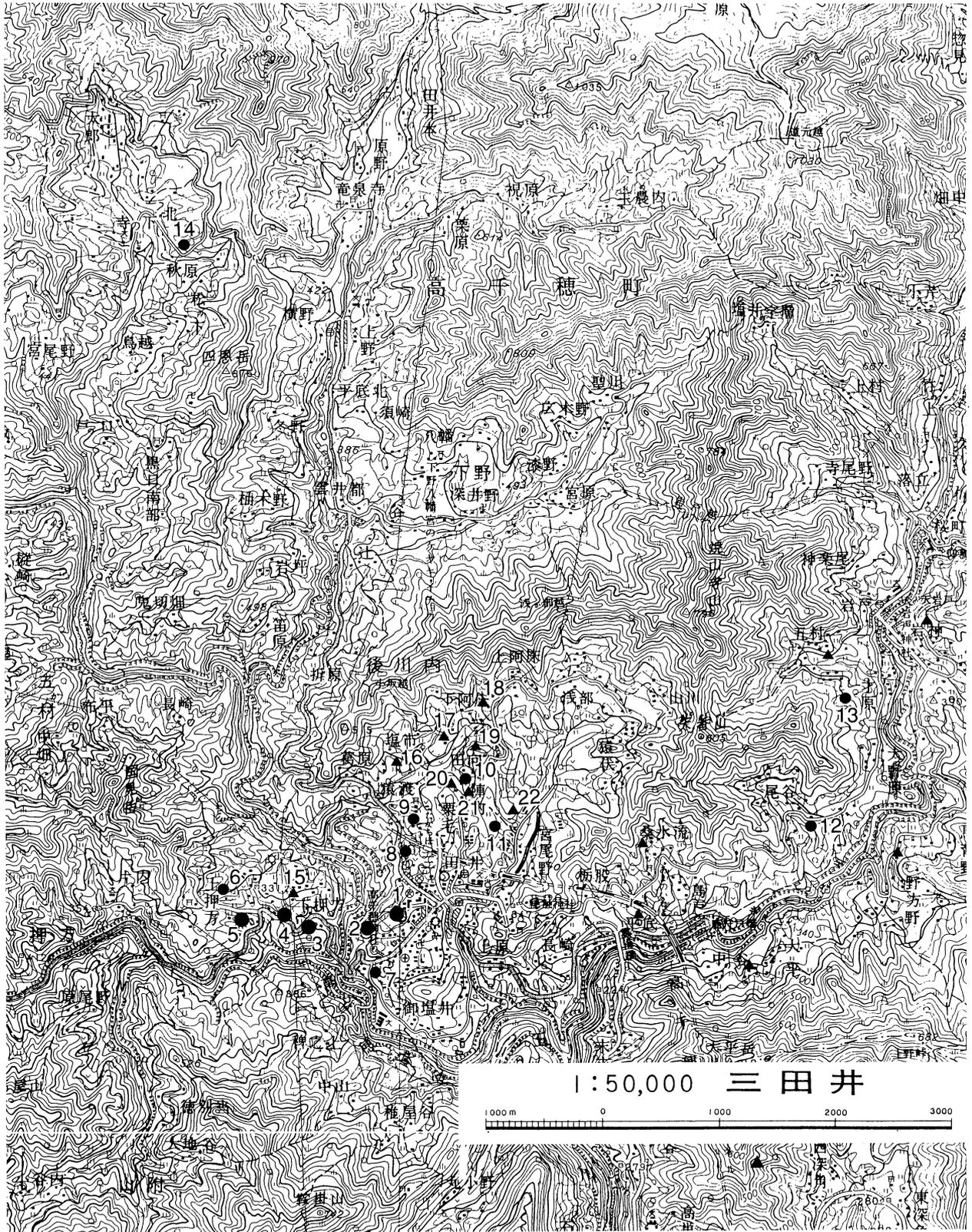
この三田井地区と、南平第3遺跡・南平第4遺跡・中ノ原遺跡が所在する押方地区、そして尾谷地区を合わせた三地区は、いずれも五ヶ瀬川の北岸に形成された比較的広い台地状の地形で、緩斜面地に恵まれており、遺跡の分布の中心となっている。

2. 遺跡の立地と歴史的環境

神殿遺跡B地区は、丘陵に挟まれた谷部に立地し、東側にA地区⁽¹⁾と接している。これらの地区は、縄文～弥生時代の散布地として周知の「高千穂高校遺跡」と一体の遺跡である。調査以前に採集されていた遺物の中には、工字突帯文を持つ弥生時代後期の甕が含まれている。A地区は、B地区と同時に調査されており、谷部のI区では弥生時代終末～古墳時代初頭の住居1軒など、その東側丘陵の南東斜面のII区では弥生時代後期～終末の住居6軒と奈良時代の住居2軒が検出された。出土遺物は、縄文時代晩期・弥生時代中期～古墳時代初頭の土器・石器、奈良～平安時代の須恵器・土師器・製塩土器・鉄器、近世の陶磁器などがある。

B地区のすぐ西側の比較的急峻な丘陵上には、中世の山城である「淡路城跡」が立地しているが、神殿遺跡C地区は、これと同じ丘陵の南側斜面に位置している。淡路城は三田井氏累代の居城で、この地は現在でも「城山」と呼ばれ、付近には、城との関連を思わせる「一祝子(いちのほうり)」という地名も残っている。また、近世に関しては、神殿遺跡A地区II区の東側隣接地にある高千穂高校プール敷地内において、建設工事中、この地に伝わる鬼神「鬼八」の伝承に基づいた「鬼八塚」の供養碑(享保年間建立)が発見されている。

神殿遺跡の南側丘陵上には、古代より高千穂地方の政治あるいは祭事を中心として鎮座してきた「高千穂神社」があることから、それに由来するであろう「神殿」地名を持つこの一帯は、古代から近世



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|------------|-------|
| 1 神殿遺跡A・B地区 | 7 セベット遺跡 | 13 岩戸五ヶ村遺跡 | 19 吾平横穴墓群 | ▲…横穴墓 |
| 2 神殿遺跡C地区 | 8 城ノ平遺跡 | 14 薄糸平遺跡 | 20 陣内横穴墓 | |
| 3 南平第4遺跡 | 9 宮ノ前第2遺跡 | 15 押方横穴墓群 | 21 車迫横穴墓群 | |
| 4 南平第3遺跡 | 10 陣内遺跡 | 16 塩市横穴墓群 | 22 吾平原横穴墓群 | |
| 5 中ノ原遺跡 | 11 吾平原第2遺跡 | 17 成木横穴墓群 | | |
| 6 押方神社周辺遺跡 | 12 梅木原遺跡 | 18 池ノ川横穴墓群 | | |

第1図 遺跡位置図

にかけて、人々の関心と行動の痕跡を多く残す地であろうと思われる。

南平第3遺跡・中ノ原遺跡は、押方神社周辺遺跡⁽²⁾などの周知の縄文～弥生時代の遺跡が分布する丘陵地帯の南側斜面に立地し、谷を隔てて約400m東西に離れた位置にある。南平第3遺跡の北側には古墳時代の押方横穴墓群が分布している。南平第4遺跡は、第3遺跡の南東約300mの比較的高い丘陵の先端部に位置している。

高千穂町内における古墳時代までの歴史的動向を概観すると、まず、最も古い時代の遺物は、旧石器時代のナイフ形石器1点で、神殿遺跡の約600m北に位置する宮ノ前第2遺跡⁽³⁾で出土している。続く縄文時代には、草創期の石槍が岩戸五ヶ村遺跡第二次調査⁽⁴⁾で出土しているのを始め、早期の遺跡には薄糸平⁽⁵⁾・岩戸五ヶ村⁽⁶⁾などの遺跡が確認されている。前期・中期は空白期に近く、後晩期になると遺跡数は一挙に増大する。代表的な陣内遺跡⁽⁷⁾では、西平式・三万田式・御領式などの土器・石器類とともに、県内でも希少な石棒・石刀・土偶など呪術的な遺物も見られ、この時期の人口や生活範囲の拡大、文化的な充実がうかがえる。しかし、住居跡等の遺構は、唯一セベット遺跡⁽⁸⁾において晩期前半の円形の竪穴住居跡が1軒発見されているのみである。晩期末から弥生時代にかけての時期の遺物は、セベット遺跡で刻目のある突帯文土器が出土している。本書で報告する南平第4遺跡は早期の、南平第3遺跡・中ノ原遺跡・神殿遺跡は、後晩期の遺跡に新たに加わる資料となった。弥生時代に入っても前期の遺物は未発見で、中期になって、北部九州に見られる須玖式土器や下城式土器・黒髪式土器などが押方神社周辺遺跡C地点⁽⁹⁾・薄糸平遺跡・吾平原第2遺跡⁽¹⁰⁾などでわずかに出土するのみであったが、報告する南平第3遺跡は、押方神社周辺遺跡の南東側約700mの同一丘陵の斜面にあり、初めて中期の集落が発見されている。後期から終末にかけての時期になると遺物・遺構とも増加し、土器には、大分県大野川流域に特徴的な工字突帯文甕や、熊本県を中心分布する免田式土器など交流範囲の広さを示すものが多く見られる。小規模ながら集落も各所で形成され、岩戸五ヶ村遺跡、梅木原遺跡⁽¹¹⁾、神殿遺跡A地区(6軒)、宮ノ前第2遺跡(7軒)で住居が調査されている。これらに、今回の南平第3遺跡や神殿遺跡B地区(～古墳時代初頭)の調査例もこれに加わる。古墳時代は、墳墓以外の集落や散布地については、宮ノ前第2遺跡で8軒の竪穴住居群が調査された以外、これまであまり知られていなかったが、神殿遺跡C地区では住居3軒が発見され、同B地区では若干の遺物が出土している。古墳には、少数の円墳・箱式石棺も見られるが、最も盛行したのは横穴墓で、三田井地区北部を中心に、押方地区や五ヶ瀬川支流の岩戸川流域にも分布している。

註

- (1) 「広木野遺跡・神殿遺跡A地区」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集』宮崎県埋蔵文化財センター 1997年
- (2) 沢 皇臣「宮崎県西臼杵郡高千穂町押方神社周辺の遺跡」『九州考古学』45号 九州考古学会 1972年
- (3) 「吾平原第2遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡」『国道218号線高千穂倍バイパス建設関係発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1993年
- (4) 岩戸五ヶ村遺跡第一次調査(1992年)調査区の近接地において、高千穂町教育委員会が1998年に発掘調査を実施した。
- (5) 「薄糸平遺跡」『国鉄高千穂線建設埋蔵文化財発掘調査報告書』高千穂町教育委員会 1978年
- (6) 岩戸五ヶ村遺跡第一次調査。1992年、高千穂町教育委員会が発掘調査を実施した。
戸高真知子「岩戸五ヶ村遺跡の調査」『宮崎考古学会第27回発表要旨』宮崎考古学会 1993年
- (7) 「陣内遺跡」『日向遺跡総合調査報告 第2輯』宮崎県教育委員会 1962年
「陣内第2遺跡」『埋蔵文化財調査報告 I』宮崎県総合博物館 1987年
- (8) 「セベット遺跡」『高千穂町文化財調査報告書 第3集』高千穂町教育委員会 1984年
- (9) (2)に同じ。
- (10) (3)に同じ。
- (11) 「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告書 第4集』高千穂町教育委員会 1985年

こう どの
神 殿 遺 跡 B ・ C 地 区

第三章 神殿遺跡B・C地区の調査

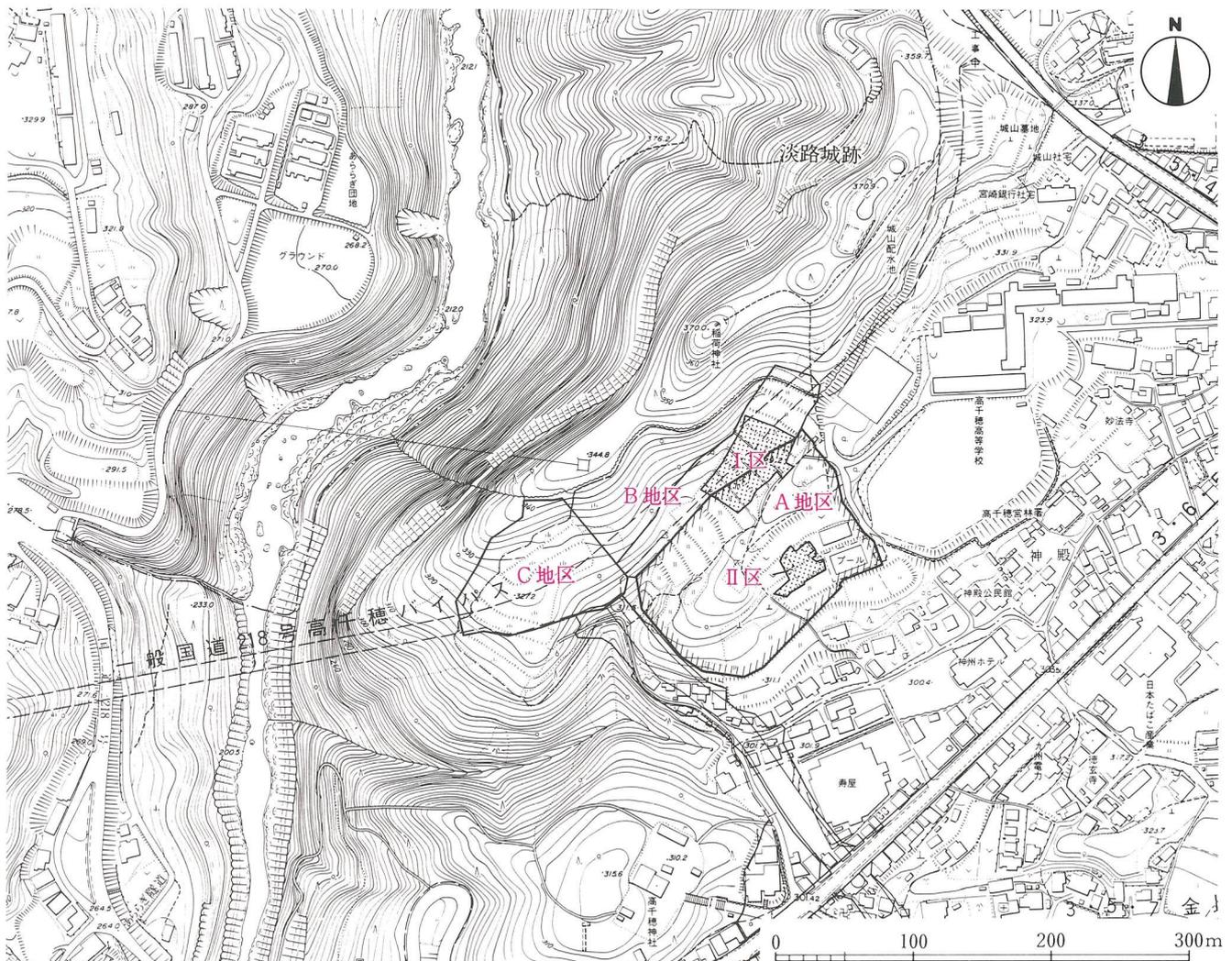
1 神殿遺跡B地区の調査

第1節 遺跡の立地 (第1・2図)

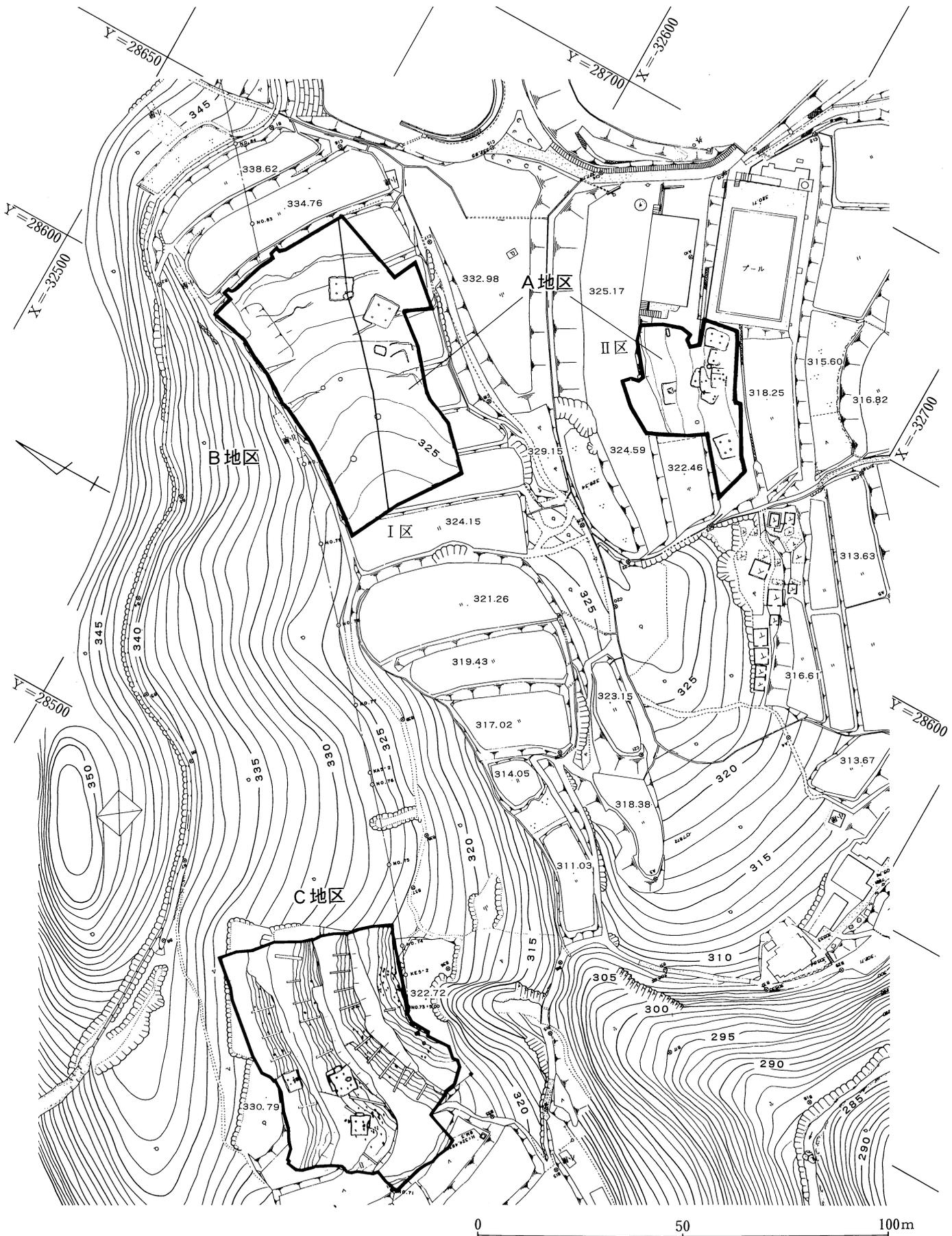
神殿遺跡は、南西に延びる比較的急峻な丘陵（以下、西側丘陵）と南南西に延びる丘陵（以下、東側丘陵）に位置する。これまでのA・B・C地区の調査によって、二丘陵およびその谷部の南面する緩斜面地（標高320～332 m）が、弥生時代中期から古墳時代初頭、奈良時代にかけて居住地に選択されていたことが確認されている。

ここで報告するB地区は、東西丘陵に挟まれた谷状の比較的緩やかな斜面部分にある。ここでは、調査原因の異なる「県立高千穂高校第二運動場建設用地」のA地区と調査区を接しており、両地区を合わせて「I区」としている。

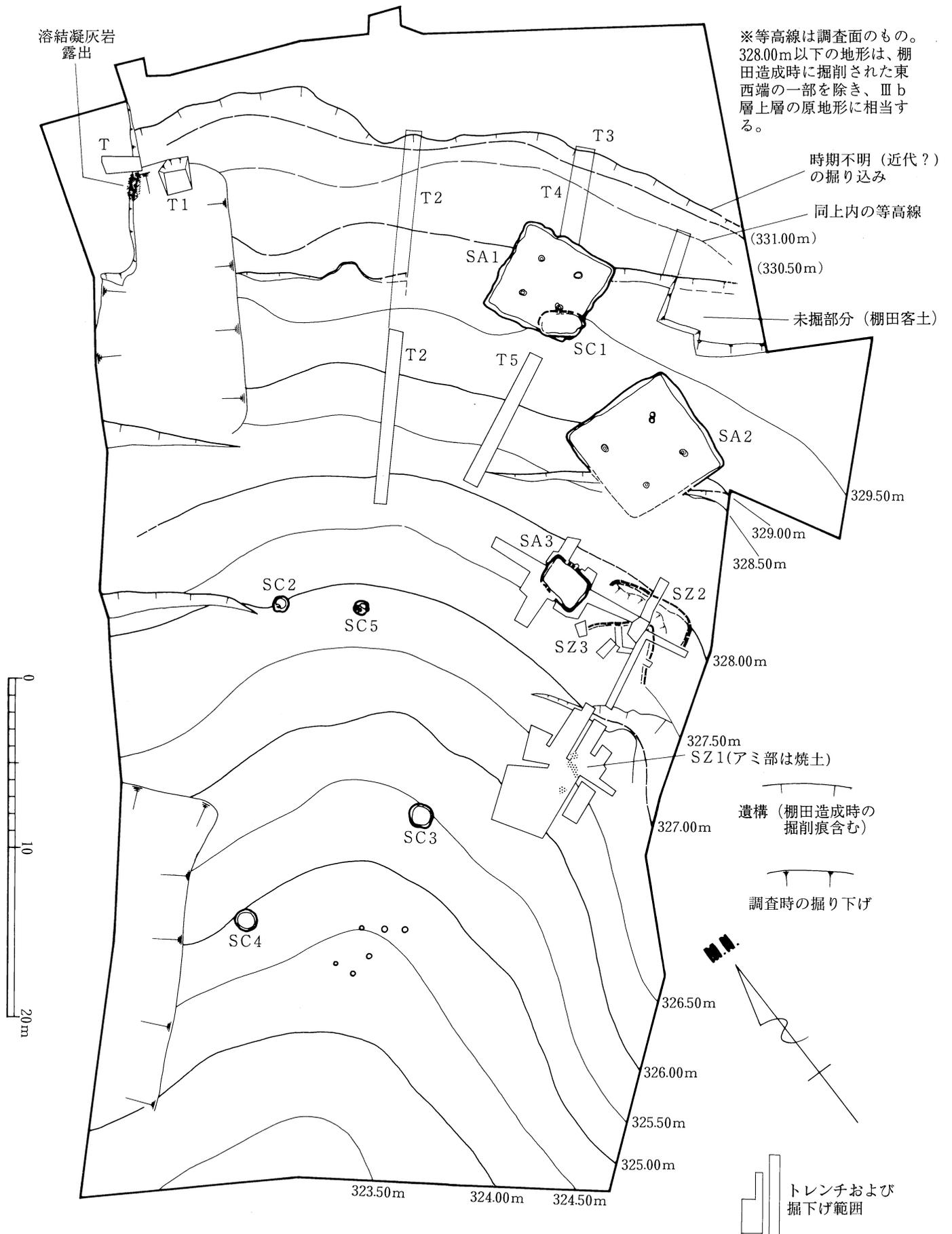
なお、西側丘陵上には中世の山城「淡路城」跡があり、県文化課と高千穂町教育委員会合同の縄張り調査によって構造の概要が知られている。すなわち、最頂部を主郭として周囲を削り込み、小口風の段



第1図 神殿遺跡調査対象区域および調査区位置図 (1:5000)



第2図 神殿遺跡調査区周辺地形図 (1:1250)



第3図 神殿遺跡A・B地区(I区)遺構分布図(1/300)

を設けており、丘陵傾斜方向の南西部には段差のある平坦部を造りだして曲輪としている。堀といえるほどの深い掘り込みはない。ただし、本格的な発掘調査を経ていないため、現在曲輪としている段差が確かに当初のものか、若干の疑問もあるようである。

ちなみに、この西側丘陵は、地質図によると上位にチャート層があり、事実、丘陵裾部や調査区内で、石器石材には不適と思われる、やや質の悪いチャート塊が採取されている。この硬いチャート層のために丘陵上部は浸食されにくかったため、周囲の丘陵に比してやや高く急峻な、まさに山城の立地に最適な景観を呈している。

B地区の調査は、東に隣接するA地区の調査と並行して実施している。A地区では、「Ⅰ区」の東南部と、東側丘陵南側斜面の最も包含層の残存度が高い部分を調査区とした「Ⅱ区」において、縄文時代晩期から古代にかけての遺構や遺物が検出されている。調査原因が異なる両地区の調査結果については個別に報告せざるを得ないが、遺跡としては一体のものである。そのため、神殿遺跡の全容を把握するには、B地区のみならず、次節で報告する西側丘陵南端斜面地のC地区およびA地区※それぞれの調査結果を合わせて検討すべきことを記しておく。

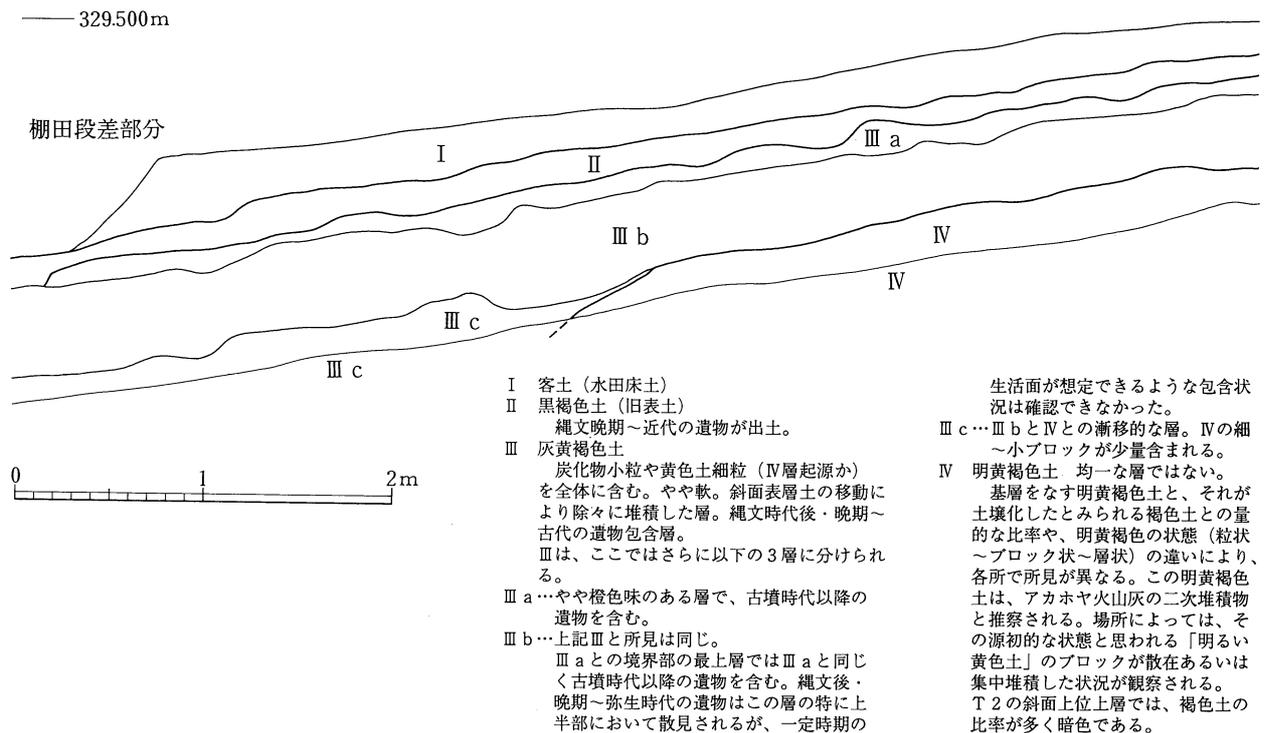
※ 報告書刊行済み。

「神殿遺跡A地区」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集』、宮崎県埋蔵文化財センター 1997年

第2節 調査の概要

調査区の設定と調査の経過

調査は、まず試掘調査の結果をもとに、調査対象区域のうち東西丘陵間の谷部の、遺構存在の可能性が最も高い「遺物を比較的多く包含するとともに原地形の最も緩やかな範囲」を優先的に選んで調査区



第4図 神殿遺跡B地区トレンチT2土層断面実測図(1/40)

「I区」を設定し、その調査結果の如何によって調査区の拡張を検討することにした。この「I区」は先述のとおり調査原因によりA・B両地区に分割されているが、調査は同時併行のため、B地区の調査の経過については、I区全体について報告する。

谷部以外の、同じく調査対象区域の西側丘陵東側斜面については、調査開始時に踏査して「淡路城」関連の遺構存在の可能性について検討した。その結果、人為的に改変されたと見られる箇所は確認され

第1表 神殿遺跡I区 検出遺構・遺物 (太字遺構はB地区。斜体字遺物はA地区で報告済みのもの)

時代	時期	出土位置	出土遺物 (破片の旨記のないものの数値は個体数相当の破片数、またはコンテナ (容量 約12ℓ、単位◎) 数)	
			↓ 土器、陶器・磁器 (中世～)	↓ 石器、鉄器
縄文	(後期?) 晩期～末	包含層 (Ⅲb～Ⅲa層)	土器：6◎ 精製浅鉢30+2◎ (胴部片主体) 粗製浅鉢6 } +2◎ (胴部片主体) 深鉢4 組織痕土器3 突帯文土器 (刻目無し) 7 突帯文土器 (刻目有り) 19 器種不明の土器8 丹塗り磨研土器小片 (弥生?) 約30 その他 円板1 (土器片利用)	石器：3.5◎ 石鏃12、石鏃未製品1、尖頭状石器2、石鏃2、スクレーパー10、挟入石器1、楔形石器? 1、石匙1 剥片石器未製品4、二次加工剥片6 剥片 約60 石核 (チャート13、黒曜石1) チャート原石2 打製石斧?、扁平打製石斧3、扁平打製石斧未製品? 1、磨製石斧1 未細分の剥片類1◎ (弥生以降の遺構内出土)
		包含層 (Ⅲb～Ⅲa層)	土器：5◎ 肥後系 (黒髮式・中期) 甕2 粗製甕3◎ 叩き調整甕、壺 (ナデ)、壺 (ハケ目) 複数突帯付胴部 (壺または甕) 小片4 } 1.5◎	石器：磨製石包丁 (未製品) 片1 磨製石鏃1、磨製石斧? 片1 磨石1 小型扁平打製石斧1 (石包丁未製品?) 鉄器：鉄鏃1
弥生	終末 古墳初頭	SA1 (竪穴住居)	土器：2.5◎ 粗製甕3 (うち1はほぼ完形)、粗製甕片1◎ 叩き調整甕2+α、壺 (ハケ目) 4	石器：打製石包丁? 1
		SA2 (竪穴住居)	土器：7◎ 粗製甕13、叩き調整甕2 複合口縁壺3、壺3、鉢3 高坏2、ミニチュア土器2 丹塗り高坏 (器台?) 1、丹塗り刻目突帯付土器1 (上記報告分以外に、粗製甕片3◎ほか、上記器種の破片2◎有り)	石器：磨製石包丁1、磨製石斧1 磨石1 扁平打製石斧2 (混入の縄文遺物?) 鉄器：鉄鏃1
古墳			布留式系? の小型壺? 片3 (包含層中にも破片約10有り)	鉄形金具? 2
奈良～平安		包含層 (Ⅲa層)	土師器：丹塗り坏蓋1、壺2 須恵器：坏蓋1、坏身1、腿1、壺1、甕	鉄器：鉄鏃2 鉄鏃茎部? 1
		SC1 (土坑)	土師器：甕口縁1 (土坑の年代：古墳～平安時代の範囲)	
中世		包含層 (Ⅱ層)	土師器：坏蓋1、坏底部? 1、高台付坏1、甕 須恵器：坏蓋2、坏身3、高台付坏3、壺5、甕 布痕土器片1 輸入陶磁：同安窯系青磁 碗片1 (12世紀)	
		SC2～5 (土坑)	SC4より須恵器? 片1 (土坑の年代：中世～近世の範囲内)	
近世		包含層 (Ⅱ層)	磁器：肥前系染付磁器 碗・鉢1、その他 産地不明の染付レンゲ1、人形1、その他 } 1◎ 陶器：唐津系白土象嵌 碗1・器種不明1 内野山窯 皿1 無釉 (妬器) 鉢1、その他	
不明	弥生?	SA3 (竪穴)	粗製甕 (土師器の可能性も)、弥生壺片1、ほか全部で1◎	石器：滑石製器種不明磨製石器1 板状磨製石器 (石版?) 1
		SZ1～3 (竪穴?)	SZ1…土器片0.5◎ SZ2・SZ3…弥生粗製甕4、壺? 1、ほか土器片1◎ (遺構の年代は、弥生～古墳の範囲内)	鉄器：板状鉄片1、塊状1、棒状1 鑄鉄? 板状小片1 (上記は弥生末～古墳の可能性もあり)
		包含層	無釉陶器 (妬器)：甕 (波状文様入) 1	釘? 1、短刀状1、楔状1

ず、地形が急斜面のうえ、斜面裾部では阿蘇熔結凝灰岩が露出するなど堆積土層の状態が悪いため、遺構存在の可能性は低く、掘り下げ調査も困難と判断し、発掘調査区からは除外した。

さらに、I区上部の棚田二面についても包含層の状態と遺構検出の可能性の有無を調べるため、棚田段差と垂直な方向に2本のトレンチを重機で掘削して断面を観察したが、原地形が極めて急斜面で土層の堆積状況が悪く、包含層や遺構も確認できなかつたので、この地点については調査を行わないことにした。対する調査区より下部の斜面地については、試掘時に少量ながら遺物が出土したものの、すでにI区調査区内においても、徐々に傾斜が急になる下半部には特筆すべき遺構や遺物の量が少ないと判明していたため、さらに下に向かって急斜面になる原地形と遺構検出の可能性、除去する膨大な土量と作業量などを考慮して、下方への調査区の延長は断念した。

基本層序と調査の経過

I区の基本層序は第4図・第9図・図版1を参照されたい。

I区の調査開始にあたっては、水田床土を重機で除去した後、まず随所に土層確認のトレンチを設定して土層の堆積状態を確認し、調査面の設定を行なった。

I区の遺構検出面は、概ねⅢa層下～Ⅲb層上層であるが、SA1とSA2（A地区）のある北東部の2面の棚田下の遺構検出面は、削平によりIV層が露出あるいは失われている箇所が多い。

縄文時代の遺物包含層（Ⅲb層）は、生活面に相当するような単一時期の文化層が形成されておらず、さらに、包含される遺物も、時間の経過とともに本来の位置を離れ、斜面上を流動して堆積したものであるため、縄文時代の本遺跡の内容を知る上で、遺物の出土地点や出土量の綿密な情報は必ずしも重要ではないとみなし、調査区内の包含層全面の掘り下げは行っていない。結果として、縄文時代の遺物は、遺構検出面までの掘り下げ土、トレンチ内や遺構の埋土中などから出土したものが中心となっている。包含層の内容は、遺物の時代から晩期を中心としたものであるが、この他、アカホヤ火山灰を含むとみられるIV層以下の「早期・草創期の遺物包含層の有無」については、IV層以下をかなり深く掘り下げているSA1・SA2の壁面の土層に遺物が発見されなかつたのをはじめ、それら遺構の埋土はもちろん、遺跡全体の掘り下げ土を見ても、早期・草創期と断定できる遺物が1点も出土していないことから、「包含層は無い」と判断した。ただし、石器については、出土石器中に早期のものが混入している可能性があるが、形態・石材等の属性に早期特有のものを認めがたいので、抽出は困難である。

なお、調査期間中、8月2日には高千穂高校の社会科の授業として、また、9月10日には一般住民を対象に、現地説明会を行なっている。

検出された遺構と遺物

神殿遺跡B地区で検出された遺構は第1表のとおりで、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての住居1軒（SA1）、古代以前と推定される土坑1基（SC1）、中世以降とみられる時期の限定できない土坑4基（SC2～5）がある。

この他、調査区南部でピット数基が検出されたが、性格は不明である。また、SA1の北側には、地形傾斜に直交する方向にのびる段差と平坦面が検出された（第3・9図、図版1左下）。この掘り込みの時期は不明だが、棚田の大規模な造成直前、すなわち近代の遺構の可能性が高い。

神殿遺跡で出土した遺物の時代と内容については第1表のとおりで、縄文時代後晩期から近世にかけてのものが出土した。淡路城に関連する可能性のあるものとしては、龍泉窯系の輸入青磁1点があるの

みである。A地区の報告書中で、B地区出土の鉄鏃2点を中世のものとして報告したが、再検討の結果、時期判定が困難なため、ここでは古墳時代から古代に至る時期のものとして扱い、報告は歴史時代の項で行う。

出土した土器は、全体に細かい破片状態のものが多く、時代や器種を細分しがたい。とくに、縄文後晩期の粗製土器・弥生時代の甕・奈良時代の土師器厚手甕の三者は胎土が近似していることから、調整や器形が明らかでない類似土器片については時期判定に迷うものも多く、厳密な時期分類はできない。

第3節 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、包含層（Ⅲb層）中より土器と石器が出土している。

土器（第5～8図、図版4～6）

土器は、晩期後半から終末にかけてのものを主体としており、精製の浅鉢、深鉢、突帯文土器、組織痕土器などの容器類の他、土器片を加工した円板が1点（第8図80）出土している。

ただし、小破片のものや、器面が風化しているものが多いため、図化可能な点数に限られるとともに、個々の器形の推定復元や器種の判定にも困難なものがある。ここでは、以下、主に口縁部をもとに大まかに分類したが、先のような理由で不確定な面もあることを断っておく。土器1点ごとの所見については土器観察表（第2表～）を参照されたい。

a. 精製浅鉢（第5・6図 1～30）

1～18は、屈曲する胴部・外反する頸部・屈曲して上方に延びる短い口縁部を持つ形態である。

13の内外面と14外面には赤色顔料が付着しており、県工業試験場に依頼した分析結果から顔料はベンガラと判明している。21～26は、内傾する口縁部または外傾し端部が外反する口縁部や胴部との境界に屈曲部をもつ精製の土器で、口縁部上方や屈曲部直上に沈線が施されている点共通している。これらは、胎土や色調も非常に近似している。

b. 粗製浅鉢（第6図 31～37）

精製浅鉢と異なり、粗い胎土・調整の浅鉢と思われるもの。31～34は、水平位に平行する沈線が数条入る。35は条痕調整の内湾しつつ外傾する口縁部で、下端には体部と境をなす屈曲部がある。36は、ミガキに近いヘラナデを粗雑に内外面に施している。37は小型のボウル状の鉢の口縁と考えてここに分類したが、小型深鉢の可能性もある。

c. 深鉢（第6図 30、38～40、第7図 44）

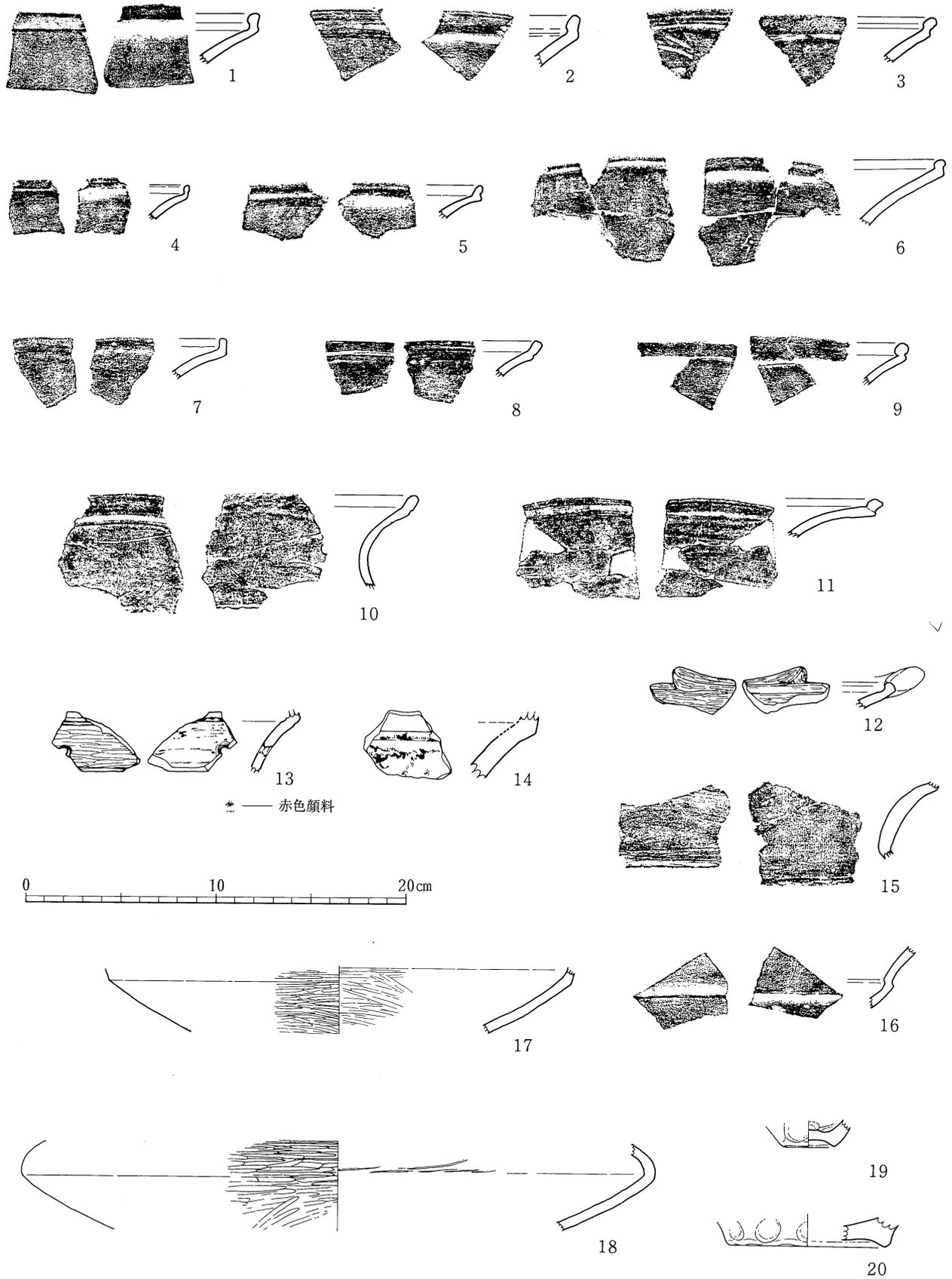
口縁部のみで器形がはっきりしないが、傾きや推定口径から深鉢とした。30のみ内外とも丁寧なナデ調整で、精製土器に近い感がある。38・39は粗い胎土・調整。40は外面に水平位2条と斜位1条の沈線文があるが、破片のため文様の全容は不明である。

d. 刻み目のない突帯文土器（第7図 44～47、50～53）

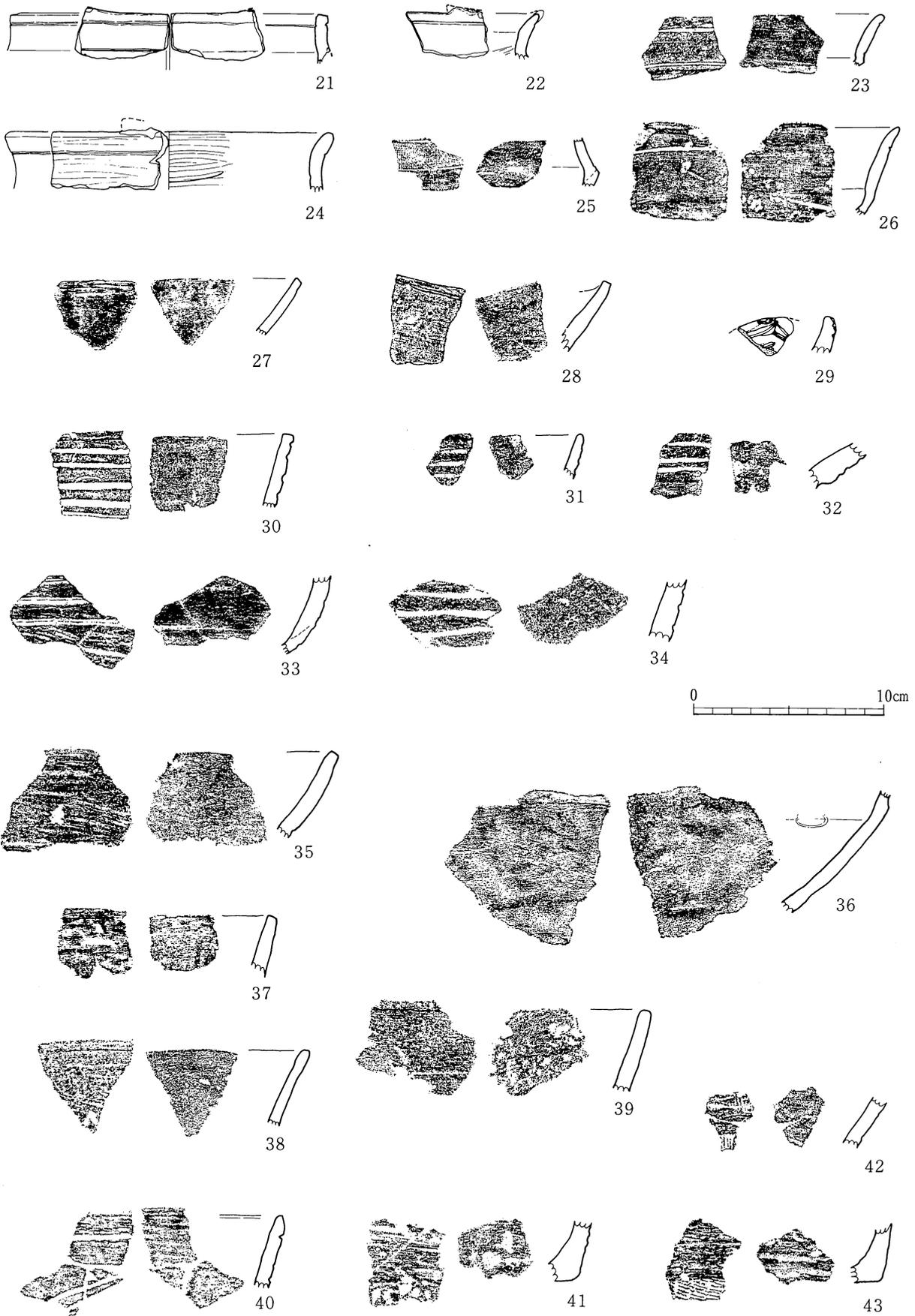
刻み目のない突帯を口縁部外面上方または口唇部直下に貼り付けた深鉢形土器。口縁部や突帯の大きさ・断面形は、各々異なっている。

e. 刻み目突帯文（第7図54～71）

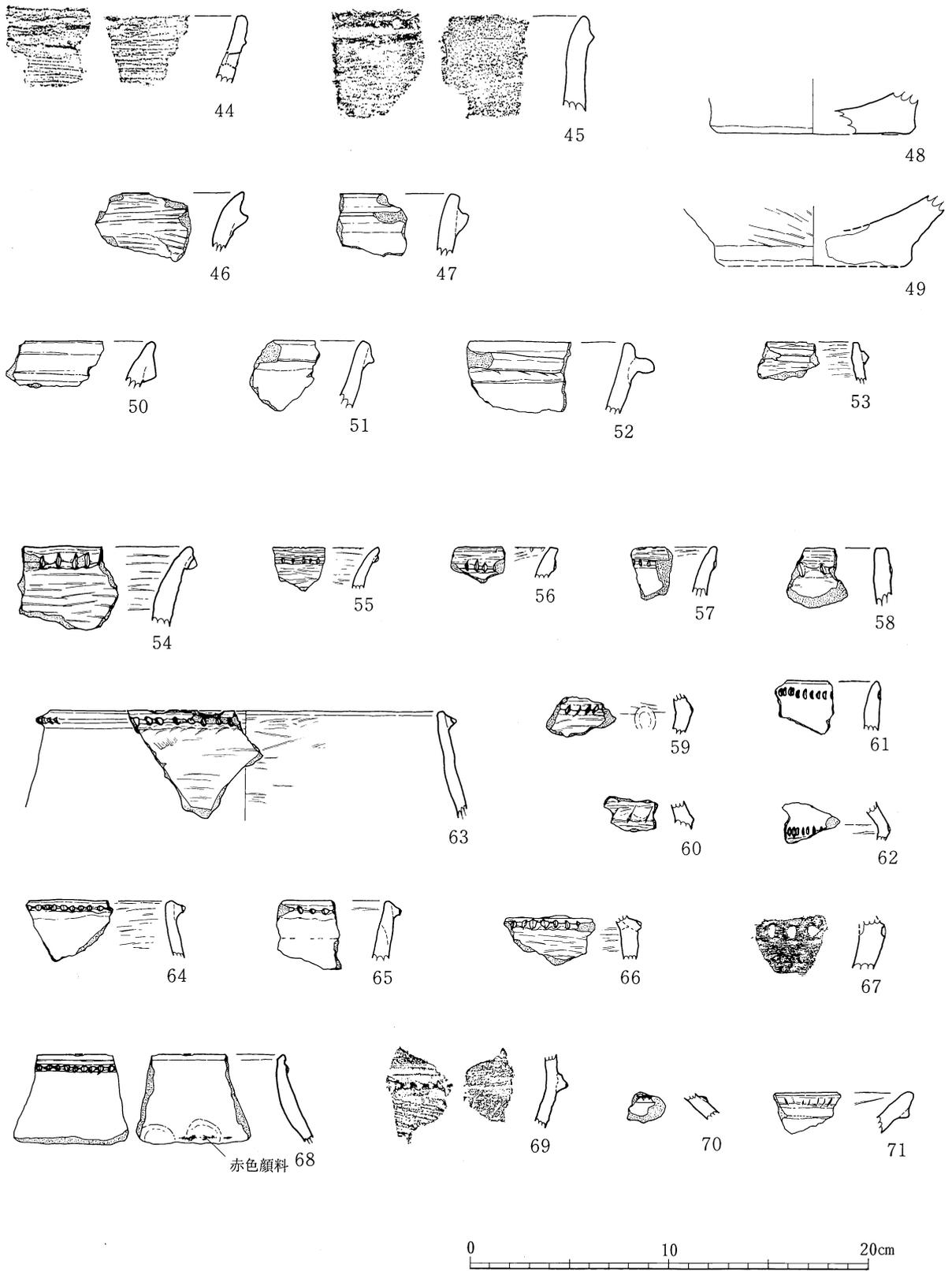
口縁部外面の口唇下や胴部の屈曲部に貼り付けた突帯に刻み目や連続刺突文を施文した土器。59～62のように、突帯を付けずに直接施文しているものもあるが、同じ様相を持つためこ



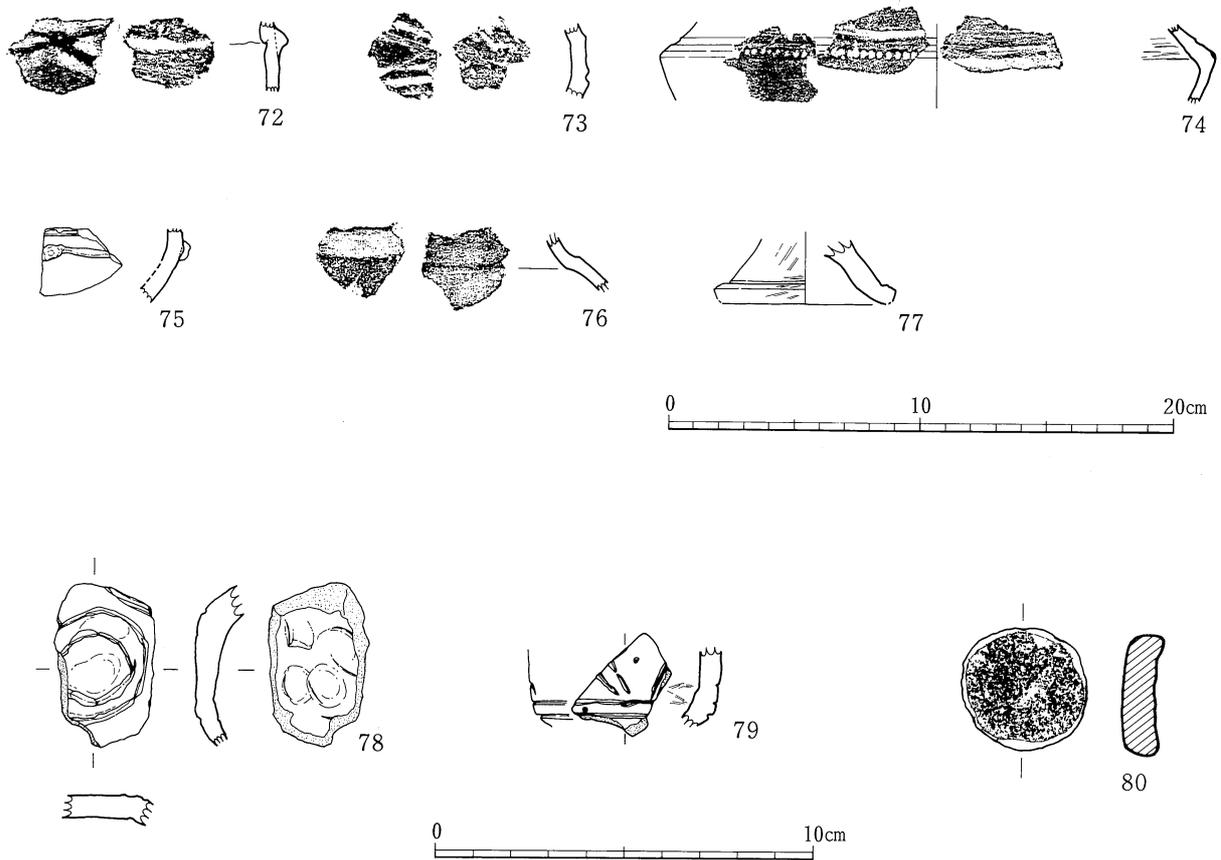
第5図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器(1)



第6図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器（2）



第7図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器（3）



第8図 神殿遺跡B地区出土縄文時代の土器（4）

に含める。深鉢形の器形が中心だが、68・70は壺形、71は鉢形とみられる。小型器種の55～57の口唇部には連続した浅い窪みが観察されるが、これが刻み目か欠損によるものかの判別は微小なため難しい（図版5）。65は丹塗り。68内面には赤色顔料の付着があるが、分析によりベンガラと判明している。

- f. 組織痕土器（第6図 41～43） 41・43は底部に、42は胴部下位に簾状の組織痕がみられる。
g. その他（第8図 72～79）

器種の不明なもの、特殊なものは「その他」として一括した。78・79は、沈線による文様が施された器種不明の土器である。また、図化できなかったが、器種不明の丹塗磨研土器の小片も出土している。

石器（図版6）

縄文時代の石器は、石鏃、スクレーパー、石匙、石核（チャート・黒曜石）、剥片、二次加工のある剥片、チャート原石、扁平打製石斧、磨製石斧、磨製石器片などが出土しているが、紙面等の都合上、実測図は掲載していない。

第4節 弥生～古墳時代の遺構と遺物

この時期の遺構は、竪穴住居跡1軒（SA1）が検出されている。

この他、SA1南部隅でSA1を切る土坑SC1（第12図、第6節時期不明の遺構の項参照）につ

いても、古墳時代の範囲に入る可能性がある。

弥生～古墳時代の遺物は、上記遺構内および包含層より弥生土器・石器・土師器・須恵器が出土している。土器類は、小破片で器種や器形がわかりにくく、時期が特定できないものが多い。

竪穴式住居跡 SA1 (第9～11図)

SA1は、I区北東部に位置し、ほぼ同時期とみられるSA2(A地区)と隣接する。この位置は、V字形につながる東西丘陵の分岐点の下で、丘陵からの堆積土により谷部が埋まり、上部からの傾斜が緩やかになり始める部分に当たる。

住居の規模および構造はSA2と類似しており、平面形はほぼ正方形で、柱は4本である。規模は、主軸長(東北東～西南西方向5.84m×最大幅5.92m、深さ1.19m(北東隅))を測る。

床面中央東寄りには、炭化材片と焼土が集中して検出された不整形の掘り込みがあるが、焼土は粒状～小塊状のものが多く混じるという程度で、しかも、焼土の混じる土は、床面上約10cmの位置まで拡散している状態であった。このような状況の中、継続使用する「炉」と直接結びつけられるような火熱を受けた「焼土面」は確認されなかった。

また、住居廃棄後の遺構埋没中途段階での焼土粒集積面が数箇所、住居北東端部の埋土②(第10図)の上面から埋土①下層にかけて観察された。

トレンチ断面では、貼床土のA～Cが確認されたが、貼り土前の掘り込みの検出作業ができなかったので、貼り床が地形の傾斜に沿うものか全面に及ぶものかは確認できなかった。

遺物は、床面直上で出土したものは、89の甕底部と土器小片があるのみであった。埋土中からは、粗製甕(88)と、石包丁とみられる打製石器1点(97)の他、叩き調整の甕片(81・82)、ハケ調整の壺片(83～85)、粗製甕片などが出土した。86の粗製の土器片も埋土中出土であるが、器形に類例が無く、また、調整や胎土に縄文時代の土器の可能性を否定できない様相があることから、ここでは、積極的にSA1に伴う遺物とすることができない。

88の粗製甕は、第10図に示したように、住居廃棄後、間もなく流入・堆積した埋土②の上方北東側から廃棄されたものである。これと、A地区SA2内出土の底部(A地区報告書第15図16)が接合したことから、同一個体の上半部のをSA1内に、底部をSA2内に廃棄したことが明らかになった。

遺物の接合状況・埋土の堆積状況から、住居は短期間のうちに埋没したと推察され、埋土中の遺物もSA2と大差ない時期のものであろう。

弥生時代から古墳時代の遺物は、先述のSA1内出土遺物の他、SC1内、SC5上層、Ⅲb層およびこれより上位の層から出土している。包含層出土の土器中、弥生時代と断定できるものは少ない。弥生土器の可能性のあるものとして、91の甕口縁、92の壺口縁、93の壺、94の口唇部に刻み目のある壺口縁があるが、91～93は古墳時代の可能性もある。特に92は、弥生時代の土器には通常見られないほど薄い作りで、古墳時代の布留式土器を連想させる。90は、SC5の遺構範囲内の検出面より上層から出土した土器であるが、やや縄文土器的な趣を持つものの、口唇部形態や調整、粗製甕に類似する胎土に弥生土器の可能性をより強く認め、ここに掲載した。

弥生時代の石器には、磨製石鏃(96)、磨製石包丁片と思われるもの(95)、97と類似形の板状石器片で、表裏を研磨したものの1点などがある。95は、緑灰色の頁岩製。図の上方が刃部で穿孔がある。現存長4.2cm、現存幅3.3cm、最大厚0.4cmである。96は、濃緑灰色の頁岩製で、基部の片側と先端

部を欠く。現存長3.7cm、現存幅1.3cm、最大厚0.35cmである。

古墳時代の遺物として報告できるものには、土師器と須恵器がある。土師器は、99の丹塗りの須恵器模倣の坏1点のみである。内外面とも丁寧へら磨きされている。蓋として掲載したが、坏身の可能性もある。須恵器には、102の坏蓋、103の坏身、104の肛口縁部があり、時期については、103は法量の小ささと受け部の丸さから6世紀末に、104は形状と文様から5世紀後半と推定される。また、113は下半に叩き調整のある小型球形の胴部で、接合しない2片を図上で復元しているが、胎土の近似や大きさから104と同一個体の可能性が高い。この他、古墳時代の可能性のあるものとして、115・117、甕119～132、さらに鉄器139～141があげられるが、時期が確定できないため、これらは次の「歴史時代」の項で報告する。

第5節 歴史時代の遺構と遺物

歴史時代の遺構には土坑があり、小型円形のSC2・SC5、円形のSC3・SC4の合計4基が検出されたが(第12図)、時期を確定できるものはない。しかし、いずれもⅢ層上面で検出し、埋土がⅡ層を基にしていることから、中世以降であろう。規模は、SC2の長さ0.80×幅0.77×深さ0.23(m)、同様に、SC3は1.32×1.26×0.37、SC4は1.21×1.14×0.51、SC5は0.73×0.68×0.24である。

土坑には、この他前節でふれたSC1があるが、埋土にⅡ層が全く含まれないことから、古代の遺構として歴史時代にまで下る可能性がある。

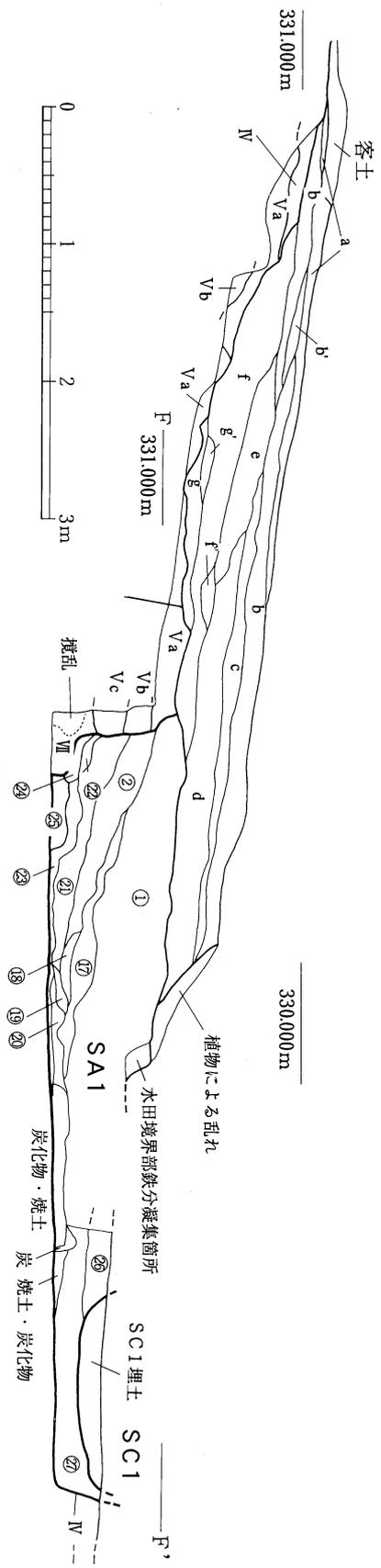
歴史時代の遺物は、Ⅲb層上層より上位で出土しているが、中世以降の陶磁器類などの遺物はⅡ層(旧表土)およびⅠ層(耕作土・現表土)から出土している。遺物の内容は、土師器、布痕土器、須恵器、陶磁器、鉄器であり、遺物の時期は、A地区Ⅱ区と同様、奈良時代(8世紀代)を中心とするものが多く見られる。

当初期待されていた中世の「淡路城跡」に関連する遺構は残念ながら検出できなかったが、当該時期の遺物として、龍泉窯系の青磁1点のみ(第14図142)を得ることができた。A地区報告時に中世の遺物として報告した鉄鏝2点(140・141)は、その後の形態等の検討から、時期は中世には至らなるとみられる。

以下、挿図(第13・14図)に沿い、遺物の種類・時期ごとに出土遺物について述べる。

土師器は、図化した坏蓋(100)・高台付坏(101)の他、甕と見られる内面に削り痕のある胴部片も若干出土している。100は、手持ちによるへら削り調整で、器形全体が不明だが、8世紀前半代もしくは7世紀代まで遡るものと思われる。101の時期は、高台の位置や形状から8世紀前半であろう。

須恵器は、坏蓋(105・106)、坏身(107～109)、高台付坏(110～112)、壺(117・118)、甕(119～134)が出土している。坏蓋は、やや丸みを帯びた三角形の口縁端部形状から8世紀後半～末、高台付坏も、高台の残る2点については、その形状から坏蓋とほぼ同一時期と思われる。壺118は、8世紀代の高台が付くタイプであろう。117は小型の壺の肩部であるが、小片のため器形が不明で、古墳時代の遺物の可能性もある。これらの他、壺の可能性のあるものとして、114の口縁部、115の肩部、116底部があるが、いずれも全体像がつかみにくく、114は摘みの付く蓋、115は丸底の壺底部、116は高坏坏部、などといった別の器種も想定される。報告者の関連資料の調査不足を反省するとともに、



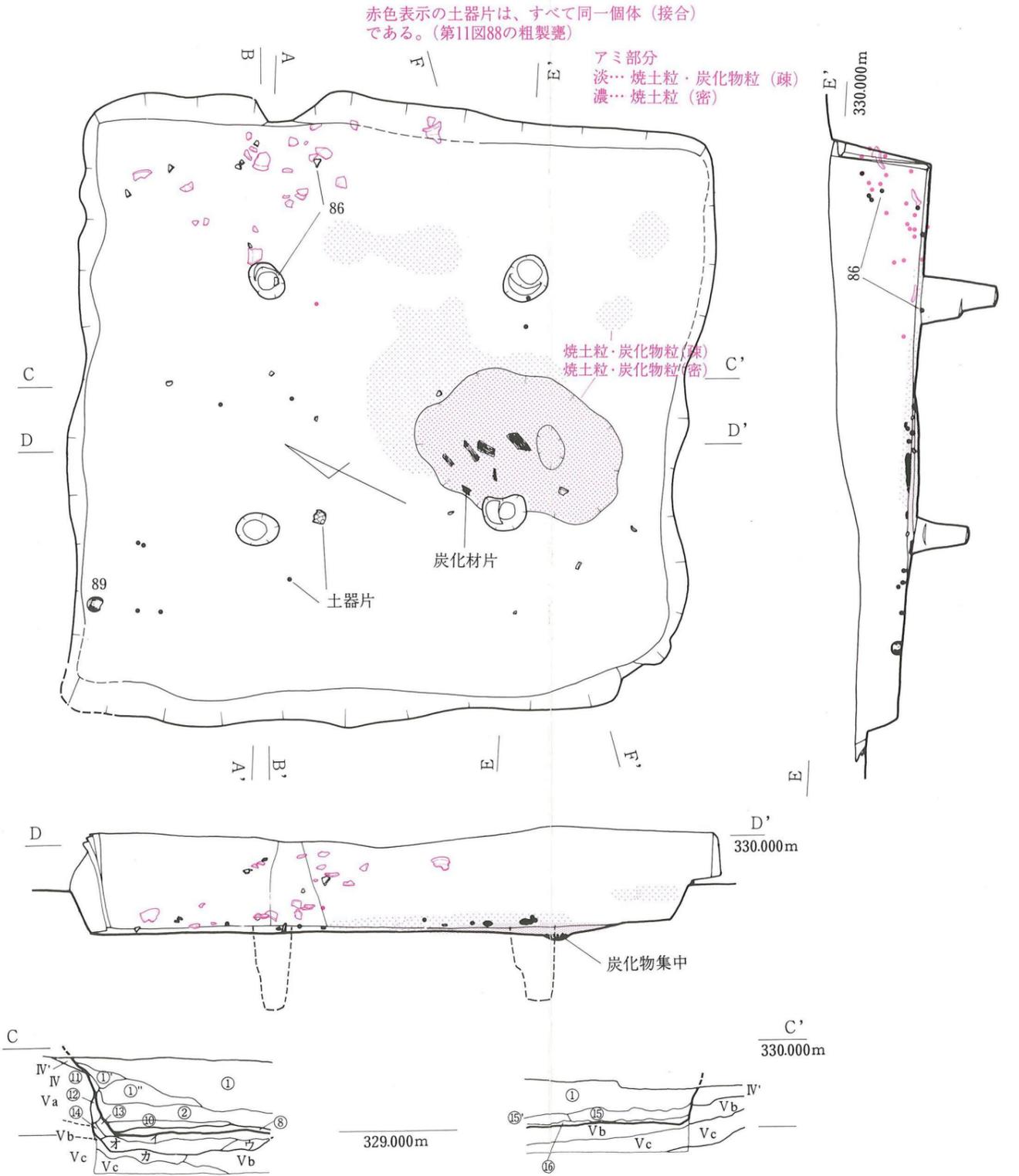
基本土層

- IV 明黄褐色土(10YR 7/6) フカホヤ火山灰が二次的に堆積し土壌化した層。やや軟。黄色のフカホヤ小粒を全体に含む。
- IV' IVと同じフカホヤの二次堆積層であるが、IVよりやや暗色の黄褐色土(Ⅲ層にやや近似)と、フロッツク状のフカホヤ(明黄色)が混在する層。IVほどフカホヤの風化・土壌化が進んでいないのか、ここでのフカホヤは明るい黄色で、フロッツクはやや硬く密である。フロッツクの大きさは、1~3cm大から長径が6~8cm大のものまで様々である。IV'はSA11南半からA地区SA2南西部に至る付近の遺構壁面や土層断面で見られ、地点によってフカホヤの割合やフロッツクの大きさが異なるため、色調の印象は黄褐色から明るいう黄色まで一定しない。
- Va やや明るい黒褐色(10YR 3/2) 非常に硬。緻密で小白斑粒含む。断面剥削時には、鎌刃部が滑るような感触があった。
- Vb 暗褐色(7.5YR 3/4) 硬。小白斑粒が少量入る。暗褐色土(7.5YR 4/4)が輪郭不明瞭な塊(1~4cm大)で疎状に含まれる。明黄褐色土粒(W層? 1~3mm前後)をごく少量含むが、自然攪乱によるものか。
- Vc 暗褐色(7.5YR 3/4) やや硬。弱粘質。炭化物粒(5mm前後)ごく少量含む。明黄褐色土粒(W層? 3~5mm前後)少量、灰黄褐色土小塊(V層? 1cm前後)少量を含むが、自然攪乱によるものか。
- VI 白色味の強い白黄褐色(10YR 5/3) 粘性やや強い。
- Ⅶ 黒褐色(10YR 3/1)の色票に紫色味を加えた色調 硬。淡黄色土(給良・丹沢火山灰起源?)フロッツクを含む。
※ A地区SA2壁面やトレンチの土層断面で確認されているが、B地区の調査部分では、同一の層が見られない。
- Ⅷ 灰褐色(7.5YR 4/2)の色票に紫色味を加えた印象 やや硬。水分多く、Vc層より粘性強い。黒褐色土の小塊(1cm前後)と、VI層によく似るに白黄褐色(10YR 6/3)色の小塊(1~2cm前後)を少量含むが、自然攪乱によるものか。
※ この層は、Ⅶ層に似るため「Ⅶ'層」としたが、上位にVI層がない。V層の一部分(例えばVd層)とすべきか。SA1の立地箇所が各部にあたるため、土層の堆積状況には、「乱れ」や分層の難しい曖昧さが看取される。なお、Ⅷ'層の左側の破線で囲んだ部分は、Ⅶ層の土、黒色土フロッツク、フカホヤ?黄色土粒ごく少量が混じるため、攪乱箇所(穴など)と判断した。

棚田造成時の客土下~SA1上部の土層(a~g')

- ここでは、基本土層のI~Ⅲ層およびⅣ層上部が棚田造成時に掘削され、失われている。
 a~b' ... b層がⅣ層を切っているため、棚田造成時に掘削・造成した土であろう。
 c~e ... a~b'と同様、棚田造成土か、あるいは自然に近い状態で堆積した層か判断しかねるが、混入物にはa~b'との共通点がある。
 f~g' ... 時期不明の掘り込み、面的には、底面に2~3条の細く深い溝が確認されたが、道路のような硬化面は無く、性格は不明である。近代の大規模な棚田造成工事が行われる直前の遺構と思われる。斜面下部の掘り込み境界は、fの南端か。あるいはdも、この掘り込みの覆土に当たるとも考えられない。
- a 黄褐色(10YR 4.5/4) やや軟。炭化物小粒、灰色岩粒(径1~5mm、溶結凝灰岩の小塊と思われ)、黄色土粒(フカホヤ?)、橙色小粒(焼土?土器小片?)含む。この層より上部は明らか客土。白黄褐色(10YR 3~4/3) aより濃色で硬。炭化物粒やや多。灰色各粒土層より大(8mm以下)で多。白黄褐色(10YR 6/3)の粘質土塊(径3~8mm)少量含む。
 - b よりやや軟。aより硬。
 - b' bとほぼ同質の上だが、bに含む白黄褐色粘質土の粒~フロッツク(1mm~1cm, 2.5~3.5cm大)多く含む。
 - c 黄褐色(10YR 4.5/4) 硬。炭化物粒含む。Ⅳ層粒~小塊(5mm大)含む。特に下半は多。a~c層に入るものと同じ白灰色岩の小塊(6~10mm角)少量含む。
 - d 暗褐色(10YR 3.5/3) やや軟。炭化物粒は少量含む。白灰色岩小角礫(径1~1.5cm大)少量含む。Ⅳ層粒~小塊(2cm以下, 3~5mm大最多)多く含む。
 - e 褐色(やや赤味のある黄褐色, 10YR 4/6, d・eの中間的な色) やや硬。炭化物粒ごく少量含む。Ⅳ層小塊(2mm~1.5cm, 3~5mm大最多)多く含む。
 - f fよりⅣ層土少ない。
 - f' 黄褐色(10YR 4/4, やや白っぽい) 軟。黄褐色土に明黄褐色土粒~小塊(1~1mm大)と暗褐色土粒混じる。
 - g よりやや硬く、暗色。
 - g' gよりやや硬く、暗色。
- SC1 埋土
 褐色(7.5YR 4/4) 硬。炭化物粒(3~5mm前後)少量、白灰色岩粒(1~3mm前後)ごく少量、明黄褐色土粒(1~5mm前後)を少量含む。土質が非常にきめ細かい。
 きめ細かいごく細かい砂質土が堆積しているような印象。削るとカリカリと音がし、よくしまっている。
 ※ 水が溜まった状態で埋没していったのであろうか。

第9図 神殿遺跡B地区SAIおよび周辺の土層断面実測図(1/50)



赤色表示の土器片は、すべて同一個体（接合）である。（第11図88の粗製甕）

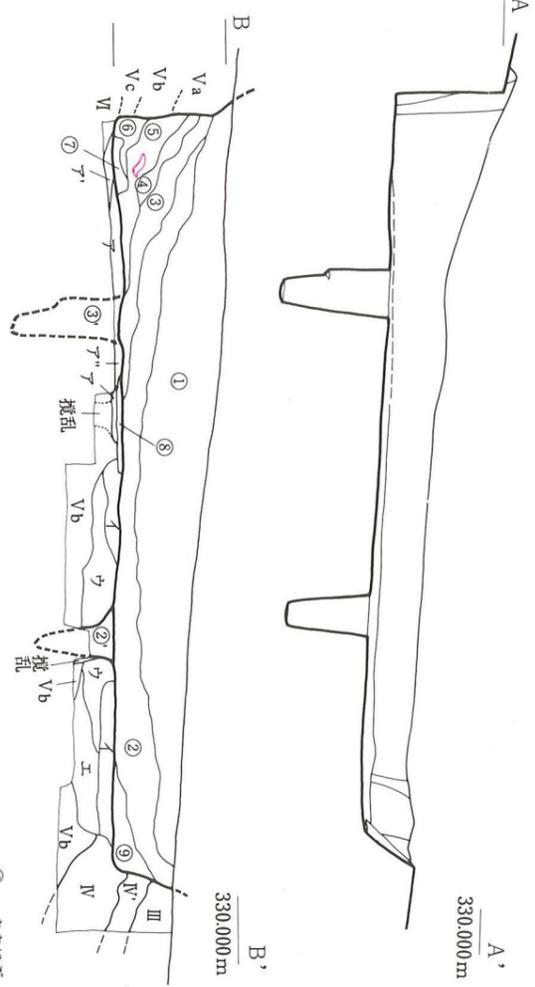
アミ部分
淡… 焼土粒・炭化物粒（疎）
濃… 焼土粒（密）

焼土粒・炭化物粒（疎）
焼土粒・炭化物粒（密）

炭化材片

土器片

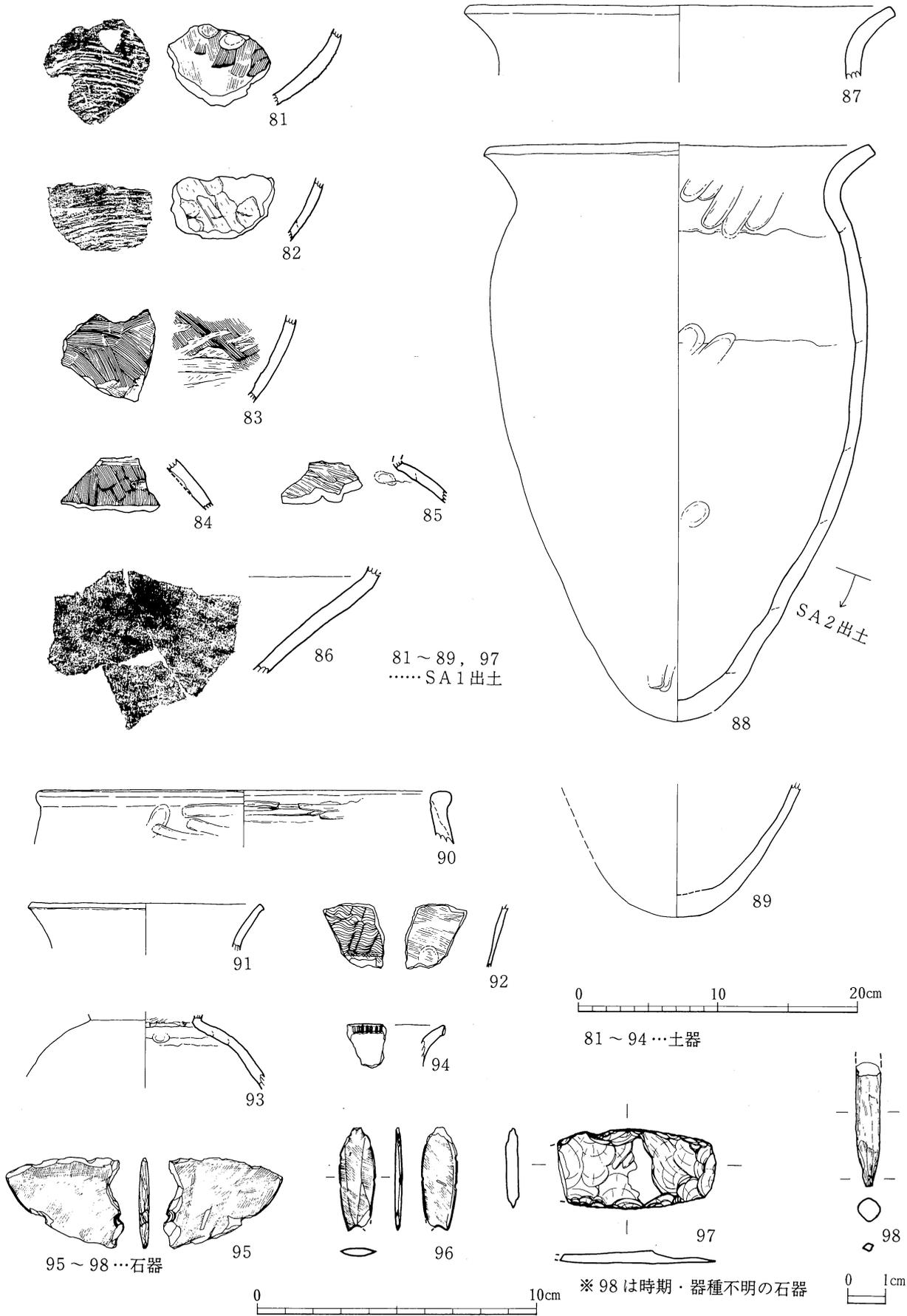
炭化物集中



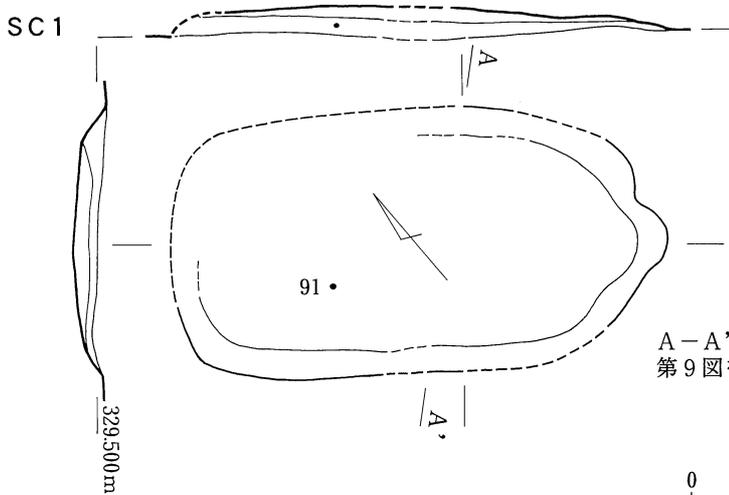
- SA1 埋土 ①-⑩ (第10図), ⑯-27 (第9図)
- ① 褐色硬土色褐色票番号 10YR 4/4, 以下同 やや硬。住居全体にわたる埋土である。焼土粒(1~2mm大)をごく少量含む。炭化物粒(2~5mm大)をごく少量含む。IV層粒(1~2mm大)と白灰色岩粒(1~3mm大)を少量含む。炭化物と白灰色岩粒は、住居北側ではやや多く、大きい(5mm前後)ものも有り。
 - ② 褐色(10YR 4/4) ①にIV層小ブロック(6mm程度)多く混じる。やや硬。焼土粒(10YR 4/3) アカホヤ粒、IV層ブロックをごく少量含む。褐色(10YR 4/4~6) ①よりやや軟。焼土粒を少量、炭化物粒(微細~3mm大)をごく少量含む。IV層粒(2mm前後)~小塊(5mm~1.5cm)を少量含むが、下方は比較的多い。V層との境界部分では、V層のブロック(5~8mm多。2~3mm大)を少量含む。白灰色岩粒(5mm前後)を少量含むが、住居北側ほど多く、径が大きくなる(3cmの礫も有り)。
 - ③ 暗褐色土(10YR 4/4) やや軟。焼土粒(5mm以下)、アカホヤ粒、IV層粒(1~6mm, 1mm前後がほとんど)含む。III層・V層各ブロック(1~2.5cm大)少量含む。柱穴の埋土。③より暗色。硬。②より暗色。よくしめる。炭化物粒(5mm以下)、アカホヤ粒、褐色(10YR 4/5) ③より暗色。色調が明るく、やや軟で、しりしりしい。水分多く、弾力性有り。IV層ブロック③より大(1.5~2cm, 4cm大も有り)。Va層ブロック(3~5mm大)含む。⑤のように、III~Vc各層の土粒が混在している可能性があるが、判別できない。
 - ④ 灰黄褐色土(10YR 4/2) III~Vc各層の粒~小塊が混在している。特に2~5mm大の小塊が多く入る。輪郭が不明瞭でレンズ状に潰れたような形状のものが多い。※水を伴う土砂流入による堆積の印象。各層土が混在するのは、本来、住居周囲の周堤のような施設の土だった可能性も考えられるのではない。
 - ⑤ 暗褐色土に、アカホヤのブロック(3mm~1.5cm)、IV層小ブロック(8mm~2.5cm)、V層小ブロック(1~2cm)混じる。やや軟。※ 壁面上部から崩落したものか。あるいは人為的に固めたものか。
 - ⑥ 明黄褐色(10YR 3/3) やや軟。⑤と同様。III~Vc各層の粒~小塊が混在しているが、⑤より暗色。暗黄褐色土に、アカホヤのブロック(3mm~1.5cm)、IV層小ブロック(8mm~2.5cm)、V層小ブロック(1~2cm)混じる。やや軟。※ この層の上面が床面に相当するが、本来は下面が床面で、後にこの層を貼り土して、新しい床面を設けた可能性がある。硬。よくしめる。IV層土粒は③より少ない。III層との判別が③とほぼ同じ。硬。よくしめる。IV層土粒は③より少ない。III層との判別が困難であった。
 - ⑦ ややにごった褐色(10YR 4/4~6) やや軟。炭化物粒(1~4mm)少量、白灰色岩粒(5mm大)を少量含む。⑧層に比べ、IV層粒は非常に少ない。
 - ⑧ 褐色(10YR 4/6) やや軟。炭化物粒・焼土粒(ともに2mm前後)、IV層粒(2~5mm大)を少量含む。

- ⑨ ややにごった褐色(10YR 4/6) やや軟。白灰色岩粒(5mm前後)をごく少量含む。IV層粒(2~3mm)を少量含む。
- ⑩ 灰黄褐色~褐色(10YR 4/3~4) 軟。焼土粒(1~5mm)少量、炭化物粒(2mm前後)を少量含む。褐色(10YR 4/4~6) やや軟。炭化物粒・焼土粒(ともに2mm前後)をごく少量、IV層粒(1~3mm)小塊(1cm前後)を少量含む。やや軟。IV層粒(5mm前後)をごく少量含む(Vc層に⑩層が混じっている)。
- ⑪ 灰黄褐色(10YR 4/2) やや硬。IV~Vc各層の小ブロック(1~3cm前後)を多量に含む。やや硬。Vc層とIII層のブロック(1~3cm前後)を多量に含む。
- ⑫ ややにごった黄褐色(10YR 4~5/6) やや硬。IV~V層、III層褐色土の各ブロック(1~2.5cm大)が混じる。IV層明黄褐色土は、2mm~1cmの粒~小塊も少量含む。※ 厚層の土が混在する状況が、自然な壁面の崩落と堆積によるものか、人為的に貼り土して北側の厚層に長く張り出し部を設けたものか、判別できなかった。
- ⑬ 褐色(7.5YR 4/4) やや硬。①とよく似る層だが、白灰色岩粒や焼土粒はあまり含まない。炭化物粒(1~3mm前後)少量、IV層粒(1mm前後)を少量含む。炭化物粒(1~3mm前後)含む。IV層粒(1~5mm前後)少量、焼土粒(1~2mm)をごく少量含む。
- ⑭ ややにごった褐色(10YR 4/6) やや硬。Vb層を主体とし、Va・Vc層ブロック(長さ5mm~2.5cm)とIV層小ブロック(長さ5mm~1cm, 2.5cm前後のものも有り)が混じる。IV層粒をごく少量含む。※ この層の上面は床面に相当するが、硬化面は確認できなかった。
- ⑮ ⑭と同質だが軟。
- ⑯ よりIV層ブロックを多く含む。やや硬。Vb層を主体とし、Va・Vc層ブロック(長さ5mm~2.5cm)とIV層小ブロック(長さ5mm~1cm, 2.5cm前後のものも有り)が混じる。IV層粒をごく少量含む。やや硬。下半はやや軟。主体はVb層であるが、ブロック状である。これに、IV層粒~ブロック(3~8mm, 1.5~3cm大)、Va層ブロック(7mm~2cm大)、V層小塊も少量含む。
- ⑰ Vc層と混ざる暗褐色土ブロック(5mm~1cm大)、IV層小塊(5mm~1.5cm大)が混じる。
- ⑱ Vc層・IV層は、大きめのブロック(2~3cm大)もごく少量入る。
- ⑲ Vb層にIV層粒~小ブロック(8mm)が混じる。ウのようにVa層ブロックは入らない。やや硬。Vc層に輪郭不明瞭なIV層小塊が入る。軟。IV層小塊が人為的な擾乱によるものか、判別不可であった。

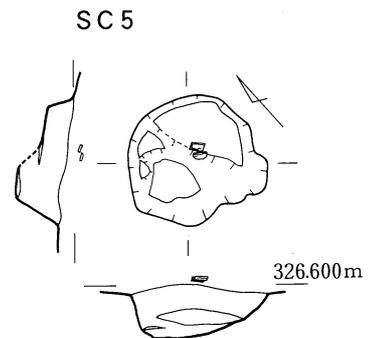
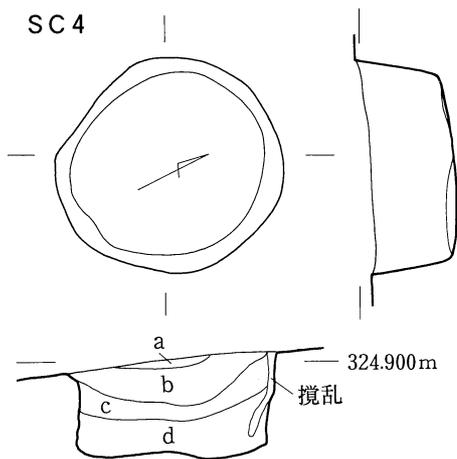
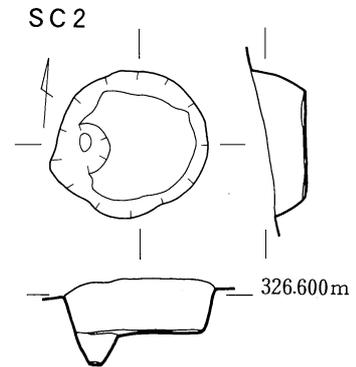
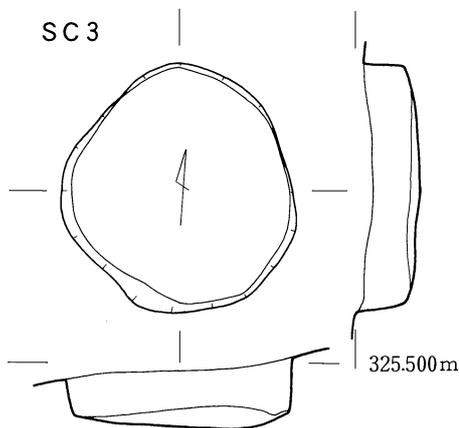
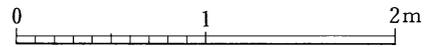
第10図 神殿遺跡B地区SA1実測図および土層断面図(1/50)



第 11 図 神殿遺跡 B 地区出土弥生～古墳時代および時期不明の遺物実測図



A-A'の土層断面図は
第9図を参照。



SC4 埋土

- a 黒褐色(標準土色帳色票番号 7.5 YR 3/2) 硬。
明褐色土粒(7.5 YR 5/6, 2mm前後)と灰白色岩粒(1cm前後)
をごく少量含む。
- b 黒褐色(7.5 YR 3/2) やや硬。
明褐色土粒~小塊(1mm~1cm)を少量含む。灰白色岩粒(5
mm前後)と炭化物粒(2mm~1cm)をごく少量含む。

- c 黒褐色(7.5 YR 3/2) やや軟。
明褐色土粒~小塊(1mm~1cm)を多量に含む。同じく明褐色
土のブロック(2~4cm)を少量、灰白色岩粒(5mm~1cm)
をごく少量含む。
 - d 黒褐色(7.5 YR 3/2) やや軟。
明褐色土の粒~小塊(1mm~1cm)・ブロック(2~4cm)を
非常に多量に含む。灰白色岩粒(5mm~1cm)をごく少量含む。
- ※ c・dは、一度に埋め戻した土か。

第12図 神殿遺跡B地区土坑 SC1~5実測図(1/40)

類例を待ちたい。

甕は、出土須恵器中の破片数が最多であるが、調整や器形に古墳時代との著しい差異が認められないため、ここでは一括して報告する。口縁部は図示した2点のみであるが、類例を探し出せず、時期の特定はできなかった。胴部片は、外面に平行叩きを施したものが多く、そのほとんどは、木目と直行する平行線を彫り込んだ叩き板を使用している。また、内面は、同心円の当て具痕を残すものと、ナデ消しているものがある。133・134は、平安時代の甕に特徴的な粗大な格子目の叩きを施している。135・136の赤褐色の甕片は、外面に叩き痕、内面に当て具痕が残る点など須恵器の系統を引くが、類例が無く、産地・時期ともに不明である。137はSC4出土の小片で時期不確定だが、古代の須恵質の鉢と推定される。

138は布痕土器片で、外面に光沢のある灰色付着物がある。

142～144は中国産の青磁である。142は龍泉窯系で14世紀、144は同安窯系で12世紀代の製品である。143は特定しがたい。

145～149・151は国産の磁器で、18世紀後半を中心とする肥前系の染付碗・鉢である。磁器には、152の型作りの人形や153のレンゲもあるが、これらは近代の遺物の可能性がある。

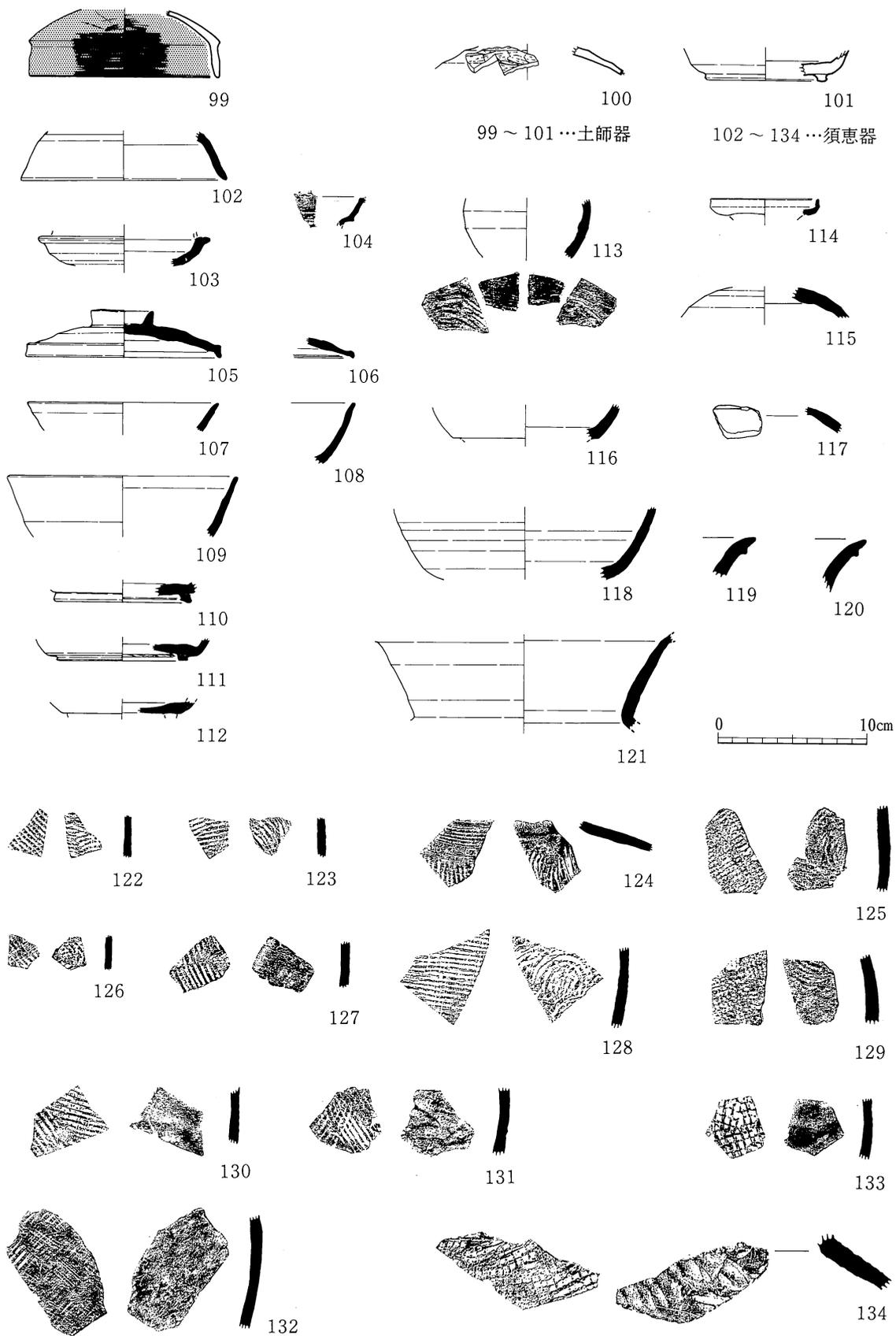
陶器には、150の唐津系の白土象嵌の碗の他、図示しなかったものに、18世紀後半の内野山窯（佐賀県嬉野町）製の皿などがある。

鉄器は3点出土している。139は器種不明で、基部先端は屈曲している。これが本来の形状か事故によるものかは不明である。140・141は鉄鏃で、140は方頭、141は鏃身頭部の上面が丸みを帯びた方頭である。140には茎先端部に巻いた繊維が、141には矢柄の木質と樹皮が一部残る。関の形状は、X線撮影を行っていないためわかりにくいだが、鏃身部と茎部の間に鈍角の段差が認められる。計測値は、139は現存長3.67cm・現存最大幅1.13cm・上端部推定厚0.15cm、140は身の長さ3.95cm・上端幅推定2.3cm・現存厚0.35cm、茎部最大幅0.50cm、最大厚0.35cm、141は全長11.75cmで、身の長さ推定5.9cm・上端部幅3.4cm・厚さ錆化著しく不明、茎部の長さ推定5.0cm・最大幅7.45cm・最大厚0.52cmである。

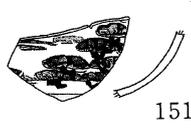
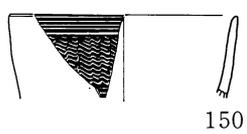
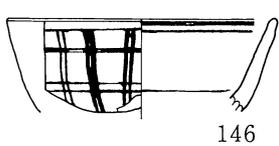
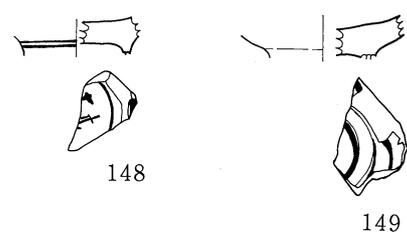
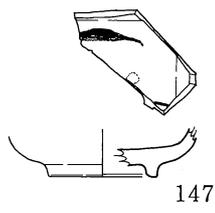
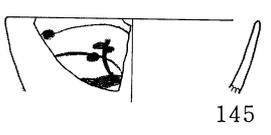
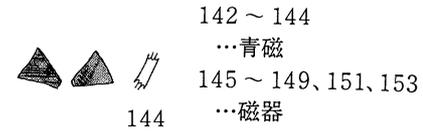
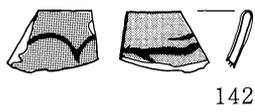
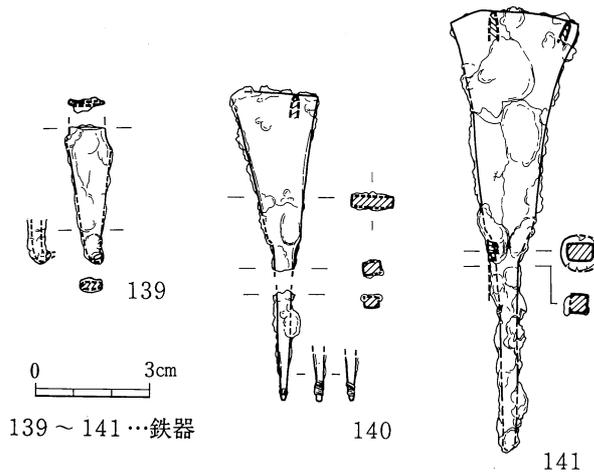
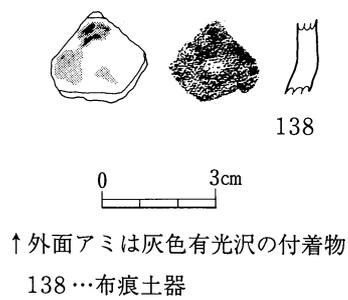
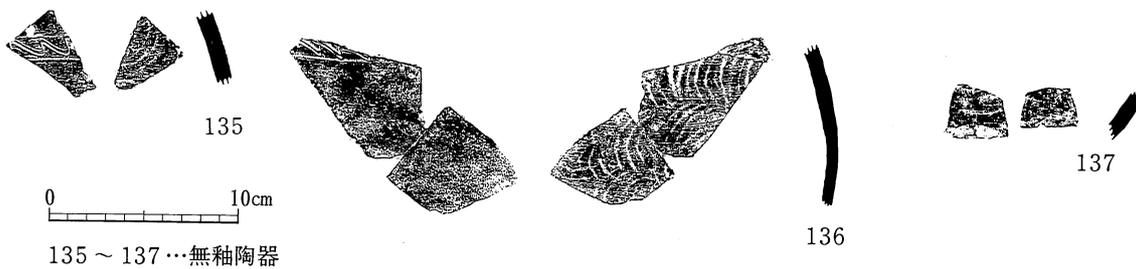
第6節 時期不明の遺構と遺物（第12図）

時期が限定できない遺構は、土坑のSC1である。形状は隅丸の長方形に近く、最大長2.62m、最大幅1.42m、最大深0.17mである。SC1は、SA1の南隅部を切るが、検出面のレベルから、SA1の埋土がSC1検出面以上まで堆積した時期以降の掘り込みと考えられる。埋土にⅡ層起源の土が全く認められないことから、SC1の時期は、SA1の時期から、Ⅱ層が堆積する以前の間ということになり、古墳時代初頭～古代の範囲内であろう。弥生～古墳時代の土器片が1点のみ（第11図91）出土している。

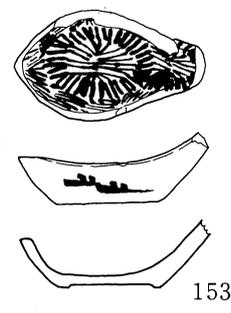
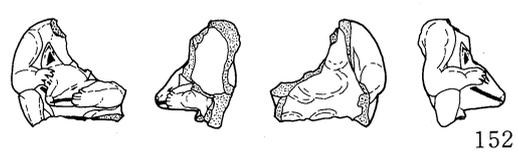
時期不明の遺物には、器種不明の石器（第11図98）がある。形態は磨製の石錐に似るが、使用石材が軟質の滑石であるため、錐の用途は考えにくい。基部は円柱状に丁寧に研磨され、先端部は、おそらく鉄製の小刀様の工具で鉛筆を削るように整形されている。これをさらに面取り状に研磨整形した際の擦痕が最先端部に観察されるが、連続する横方向の強い擦痕はなく、やはり錐としての使用の可能性は極めて低い。



第13図 神殿遺跡B地区出土古墳時代～古代の土器 (1/4)



150 ... 陶器
152 ... 磁器製人形



第14図 神殿遺跡B地区出土遺物

第7節 まとめ

神殿遺跡B地区では、調査の結果、縄文時代晩期から近世までの遺物が出土し、遺構は、弥生時代終末～古墳時代の竪穴式住居跡1軒と、それ以降の時代の土坑5基が検出された。

B地区とともに、隣接するA地区、次項で報告するC地区の状況とを合わせて見ると、神殿遺跡には、縄文時代後晩期より近世にいたるまで、やや断続的ながら生活の痕跡が認められる。その間、この地を生活の拠点として小規模ながら集落を形成していたのは、弥生時代後期前半から終末（A地区Ⅱ区 5軒）、弥生時代終末から古墳時代初頭？（A・B地区Ⅰ区 2軒）、古墳時代前半期（C地区 3軒）、間が空いて奈良時代（A地区Ⅱ区 2軒）においてである。中世には、西側丘陵の頂上部に淡路城が造営されたが、調査区内で城に直接関わる遺構は検出されていない。B地区では、中世の遺物として龍泉窯系青磁が1点のみ出土している。

B地区の調査による成果を見ると、まず、遺構については、検出数が少ない中、弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡SA1は良好な検出状況で、当該期の山間部斜面地の住居の形態や埋没状況を知ることのできる一資料となった。ただし、時期については、SA1に確実に伴う遺物が極めて少ないため、SA2の時期に準拠せざるを得ない。これは、SA1の住居廃絶後に間もなく堆積した埋土中より出土した粗製甕（88）が、近接するSA2（A地区）の埋土中出土のものと接合した事実から、2軒がほぼ同時期に廃絶されたことが理解されるからである。この甕片は、双方の住居とも北東側から中央に落ち込む形で出土し、まとまった部位に接合復元しているが、これは、土砂の流入など自然な原因よりも、人為的に投入された結果と想像される。これが単なる廃棄行動か、それ以外の意図によるかについては興味のあるところだが、行為以前の甕の状態が不明なので言及できない。

さて、SA1と同時期のSA2の時期であるが、A地区報告時に、埋土上層出土でSA2には伴わない古墳時代の布留式系の土器として捉えていた小型の甕または壺とみられる「外面に細かいハケ調整を施した、器壁が薄い土器片」約10点（第15図166～169、ほか）が、その後の出土状況の再検討によりSA2に伴うと判断できたため、時期判断に微妙に関わることになった。これらは、C地区で出土した布留式系土器と比較すると、その特徴としての「内面のケズリ調整」や驚異的な「器壁の薄さ」が認められないうえ、器形の全体像が不明で、胎土は精製されてはいるものの際だって異質というものではないため、布留式系土器とは認定しがたい。しかし、やはり他の出土土器と比べるとやや異質な印象があり、布留式土器の影響を受けている可能性が高いと思われる。その場合、SA2・SA1の時期は古墳時代前期にまで下ることになるだろうが、類例のない現段階においては躊躇せざるを得ないので、ここでは再検討の余地を残しつつ、A地区報告時と同じく、弥生時代終末～古墳時代初頭としておく。

次に、B地区の遺物について見ると、縄文時代後晩期の土器では、晩期末の突帯文土器が注目され、古墳時代から古代を経て、中世にかけての遺物は、少量ではあるが、この地域の当該期資料の乏しさを補うものである。また、近世の陶磁器類は、肥前系を中心とした製品の流通を示すものであった。ここでは、縄文時代の土器について若干述べておきたい。

縄文時代の土器は、時期細分できない斜面堆積の包含層に、晩期後半を中心に、後期後半に遡るものから晩期末の突帯文土器までの土器を一括して含んでいる。これらのうち、特に突帯文土器群は、小破片主体のうえ量的に決して多いとは言えないが、ある程度まとまった資料としては県内でも数少ないうちのひとつで、貴重である。

突帯文は、晩期後半後葉の刻目の無いものと、晩期末の刻み目のあるものに大別されるが、無刻目突帯文土器のうち、突帯文なのか、単なる粗製深鉢か、口縁形状からは判断しがたいものも存在する。44は、条痕調整時に残った微隆起部分が帯状に見えるものである。46・47は、粘土紐を貼り付けて肥厚させた口縁部の外面に深い凹線を入れることで結果的に端部が上を向く突帯が生じたとも見られるもので、同じ高千穂町の宮ノ前第2遺跡でも出土している。突帯文の出自を考えさせる資料である。

刻目のある突帯文には（後述のⅡ区出土資料をも合わせ）、突帯の位置・有無、施文方法や施文位置等にバリエーションが見られる。こうした多様性が、もともと刻目突帯文の様式に内包されているものなのか、あるいは地域性や時間差によるものかについては、周辺地域の今後の蓄積資料を分析していく際に留意しておかねばならない。

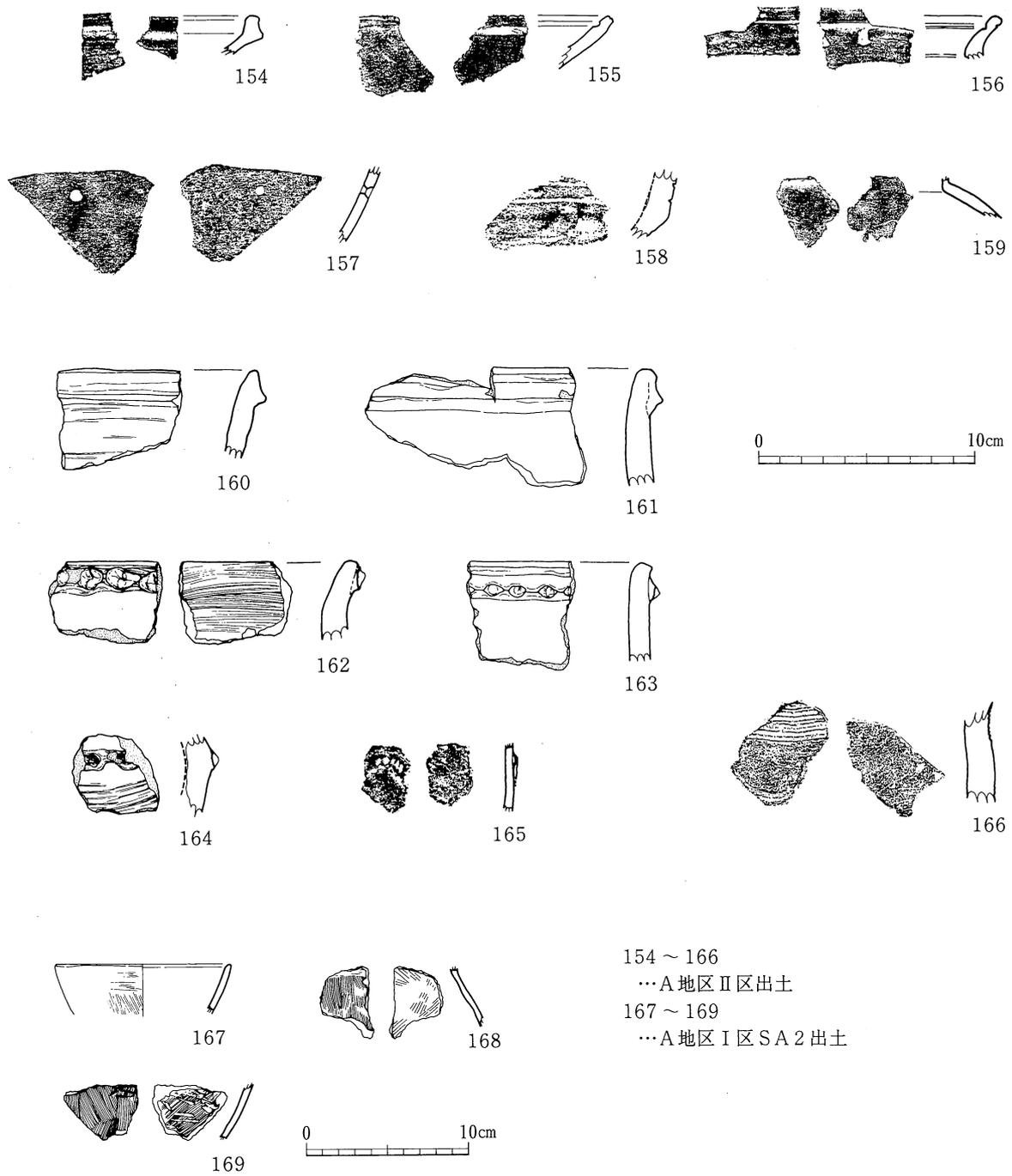
同じく包含層出土の、組織痕土器や、21～26の口縁部外面に1条ないし2条の沈線があり、やや内傾する口縁と胴部との境が屈曲する浅鉢、29の波頂部に沈線文のある波状口縁の浅鉢は、九州他地域での様相から刻目突帯文土器に伴うものと考えられるが、この他、その可能性があるものとして、小破片のため図化できなかった器種・時期不明の丹塗り磨研の土器片が出土していることも付記しておく。

本遺跡で出土した「刻目突帯文土器群」は、北部九州では「稲作農耕」の存在を語るものとして周知の「夜臼式土器」と併行するものであり、当地のような山間部における縄文時代から弥生時代に移行する時期の文化・生業のあり方やその変化、他地域との交流といった問題を探る上で重要である。しかし、こうした問題に言及するには、刻目突帯文土器のみに照準を合わせず、他の出土土器や石器との共伴の状況、さらには、周辺地域のこれからの発掘調査や自然科学分析の成果などを、包括的に捉えて検討していく必要がある。この点、本報告は、そのための出土土器や石器の報告・分類・分析・評価といった、基礎資料提示の任を十分に果たせなかった。ここで詳細を報告できなかった石器類を含め、本遺跡の縄文時代の遺物の内容については、他日に補足的な報告をしたい。

最後に、A地区Ⅱ区においても縄文時代の遺物が少量出土しているが、A地区報告書では詳細について報告していないため、参考資料として第15図に掲載した。Ⅱ区出土の縄文時代の土器は、Ⅰ区のものと同様の内容であり、晩期後半の精製浅鉢（154～157）、粗製浅鉢（158）、無刻目突帯文深鉢（160・161）、晩期末の刻目突帯文深鉢（162～164）が出土している。165は、突帯文か弥生土器か判別できなかったものである。166は、A地区報告時には時期不明で掲載しなかったもので、櫛描状文様のある弥生時代後期の粗製甕頸部である。

参考文献

- 「上菅生B遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡 XI』大分県竹田市教育委員会 1986年
「吾平原第2遺跡・宮ノ前第2遺跡・城ノ平遺跡」『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1993年
「黒土遺跡」『都城市文化財調査報告書 第28集』宮崎県都城市教育委員会 1994年
「貫川遺跡10」『北九州市埋蔵文化財調査報告書 第170集』北九州市教育文化事業団 1995年
泉拓良・山崎純男「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』第4巻 小学館 1991年
田崎博之「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会 1994年
堂込秀人「南九州縄文晩期土器の再検討」『鹿兒島考古』第31号 鹿兒島県考古学会 1997年
山本信夫「北部九州の7～9世紀中頃の土器」古代の土器研究会 第1回シンポジウム資料 1992年 ほか



第15图 神殿遺跡A地区出土遺物 (参考資料)

胎土の特徴について

個々の土器の胎土の特徴は欄内に記しているが、類似する胎土ごとにまとめて分類できるものは、下記のように略称を用いている。また、各分類ごとの特徴は、表中の初出あるいはそれに近い遺物番号の欄に略称をゴシック体で記し、〔 〕内に詳細を説明している。()内の記載は、分類したもの、しないものにかかわらず、個々の土器胎土の特記事項である。

〈胎土の各分類の略称〉

精良 A, A-1, A-2, A-3, B, C, ①, ②
 やや粗質 a, a', b

粗質 A, A', A'', B

※この他、「やや精良」もあるが、細分類は不可。

鉱物粒とは

胎土の記載の中で、「鉱物粒」とあるのは、特に限定していない限り、「無色透明の鉱物粒（石英であろう）」と「黒色で光沢ある鉱物粒」が混在している状態を指す。後者の黒色鉱物粒については、塊状と柱状のものがあがるが、輝石または角閃石とみられ、柱状粒子は角閃石の可能性が高い。塊状の粒には、一部、黒曜石に近似するものもある。

第2表 神殿遺跡B地区土土器観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
5	1	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ	にぶい黄橙	にぶい褐	精良B	精良土+微細でこくわずかな 鉱物粒、精製土器の中でも、 とりわけ精良な胎土
5	2	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ	ミガキ 凹線	にぶい黄橙	灰	精良A	精良土+微細~0.5mmの鉱物粒 と白色岩片(少)、1.2mm以下の 黒色柱状粒
5	3	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁:よこヘラナデ・凹線 頸部:よこミガキ	口縁:不明(風化)・凹線 頸部:よこミガキ	褐灰	褐灰	精良C	精良土+1mm以下(0.3~0.6mm 最多)のやや粗い鉱物粒・岩 片やや多。
5	4	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口縁:沈線	よこミガキ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	精良A	
5	5	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ 口縁:ヘラによる浅い凹線	ミガキ	褐	にぶい褐	精良C	(C)+1.5~2mmの粗い岩片、少)
5	6	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ? (表面風化) 口縁:凹線	よこミガキ 口縁:凹線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良A	
5	7	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁・頸部上半:よこミガキ 頸部下半:斜めミガキ	よこミガキ 頸部上端:強いよこナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	精良A-1	(A)より鉱物粒微細で、0.2~ 0.4mmの白色岩片を多く含む。
5	8	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口縁:浅い沈線	よこミガキ	灰黄褐	灰黄褐	精良A-1	
5	9	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口縁:沈線	よこミガキ	黒褐 灰黄褐	黒褐 灰黄褐	精良A-2	(A)より岩片ごく少。
5	10	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	沈線	よこミガキ	褐灰	褐灰	精良A-1	外面に意図的ではない と思われる沈線 (工具痕)有り。
5	11	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	丁寧なよこミガキ 口縁:凹線	丁寧なよこミガキ 口縁・頸部の境界:沈線	にぶい黄褐	灰黄褐	精良A	
5	12	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ ヒレ状突起	よこミガキ ヒレ状突起、凹線文	にぶい黄褐	褐	精良D	穿孔の一部が観察 される。
5	13	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 頸部上端および 下端:沈線	よこミガキ、丹塗り痕跡 頸部上端:沈線	にぶい橙 褐灰	褐灰 赤	精良A-2	焼成後穿孔。内面凹 部に赤色顔料残存
5	14	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナデ 丹塗り	丁寧なナデ 部分的に刻離	にぶい黄橙 明赤褐	褐灰	やや精良	鉱物粒・岩片とも微細だが、厚手 でやや多孔質。内面のみ精良D と近似の胎土で、無色透明微細粒 を多量に含む。
5	15	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ	黒褐~にぶい褐	黒褐	やや精良	精良D+0.5~1.5mmの粗い鉱 物粒と1~3mm大の粗い岩片
5	16	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこミガキ 内面屈曲部:凹線	にぶい褐	褐灰	精良A	
5	17	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ	よこ・斜めミガキ	黒褐~褐	褐灰	精良A-3	(A)+1mm大の粗い鉱物粒・ 岩片
5	18	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	肩部:よこミガキ 胴部:よこ・斜めミガキ	肩部:よこ工具ナデ 胴部:丁寧なナデ	暗赤褐	にぶい赤褐	精良①	赤い胎土色と、無色透明微細粒を多 量に含むのが特徴。胎土質感は精良 ながら緻密ではない。黒色透明微細粒 と1mm以下の岩片をごく少量含む。
5	19	I区 包含層	縄文土器	浅鉢 底部	ミガキ 上げ底面:丁寧なナデ	ナデ 指押さえ	暗褐	褐	やや粗質 a	断面やや多孔質の印象があるが、表面 比較的平滑。微細~1mmの鉱物小粒含 む。黒色岩片は2mm程度も、1.5~3mmの 岩片も入るが、やや少。
5	20	I区 包含層	縄文土器	浅鉢 底部	ナデ 指押さえ	上方向の強いナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	やや精良	精良Dに似る。厚手で粗な印象。 微細~0.3mmの鉱物粒と0.5~1.2mm の黒色鉱物粒少量を含む。
6	21	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナデ 細い沈線 ヒレ状突起貼付?	ナデ 沈線 ヒレ状突起貼付?	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良①	
6	22	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナデ 沈線 ヒレ状突起	よこナデ 下端部:よこ工具ナデ ヒレ状突起	にぶい赤褐	黒褐	精良①	内面のみ炭素吸着
6	23	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこミガキ 口唇部:丁寧なナデ 上下端:1条ずつの沈線	よこナデ	橙	にぶい黄橙	精良A	
6	24	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ 沈線 ヒレ状突起貼付?	よこミガキ	にぶい赤褐	暗褐	精良①	
6	25	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ 沈線	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良D	胎土色赤い。焼きは良。混入物は微 細な鉱物粒が主。黒色鉱物粒0.5~1mm大 少量と岩片1mm以下ごく少量含む。
6	26	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	口縁上半:よこナデ、沈線 口縁下半:丁寧なナデ	よこナデ	明褐	明赤褐	やや精良 (20と 類似)	内面部分的に炭素吸着
6	27	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ	ミガキ	にぶい褐 褐灰	黒褐	精良A-1	内面特に炭素吸着
6	28	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナデの上、部分 的によこミガキ	ミガキ	褐灰	にぶい黄橙	粗質A"	粗質Aより鉱物粒小 でやや少。岩片少。波状 粘土ややきめ細かい。波状 口縁
6	29	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナデ 沈線による文様	丁寧なナデ	黒褐	にぶい黄橙	粗質A"	波状口縁波頂部
6	30	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	丁寧なナデ 5条の沈線	ナデ、よこナデ	灰黄褐	黄褐	やや粗質 b	鉱物粒含有が0.5mm以下の細粒が主。黒 色岩片も1.5mm以下。岩片2mm以下含む がごく少。焼きはより良。表面平滑。

第3表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
6	31	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナデ 3条の沈線	ナデ	明褐	褐	やや粗質 a	
6	32	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	ナデ 3条の沈線	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗質 A (岩片やや小)	
6	33	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	上半:よこナデ,下半:条痕の上をナデ。4条の沈線	よこミガキ	黒褐 灰褐	にぶい褐	粗質 A'	
6	34	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこナデ 3条の沈線	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A	0.5~1.5mmの粗い鉱物粒と、1~5mmの白~淡褐・褐・灰色の岩片多く含む。黒色柱状の鉱物粒は2~3mm長のものも有。
6	35	SA1	縄文土器	浅鉢	よこナデ,よこ条痕 口唇部:よこナデ	よこ・斜め条痕の上をよこナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗質 A'	外面スス付着
6	36	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこ条痕の上をナデ,上半:斜め条痕の上をナデ,下半:斜め条痕の上をナデ	よこミガキ。屈曲部:弱い指押さえ	にぶい赤褐 にぶい黄褐	にぶい褐 灰褐	やや粗質 a	aに比して、粗い鉱物粒(12~25mm)・薄片(1~5mm長)が目立ち粗雑な印象だが、焼きしまりは良。
6	37	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	ナデ	粗いナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 b	
6	38	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	よこ・斜め条痕の上をよこナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A (岩片やや小、黒曜石?片含む)	
6	39	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	粗いよこナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	粗質 A	内面風化剥離著しい
6	40	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	よこナデ 沈線による文様	丁寧なよこナデ (下半は、表面風化)	にぶい黄褐	にぶい黄橙	粗質 A' (粗質 Aより岩片ごく少)	
6	41	I区 包含層	縄文土器	鉢	胴部:貝殻条痕 底部:組織痕	よこナデ	明赤褐	にぶい褐	粗質 B	底部ではなく、胴部屈曲部の可能性も有り。
6	42	I区 包含層	縄文土器	鉢	組織痕。組織痕の上を一部ミガキ	丁寧なナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	粗質 B	粗質 Aと違い、鉱物粒・岩片は小さく少ない。表面は比較的平滑で、胎土色は赤褐色系統である。
6	43	I区 包含層	縄文土器	鉢	条痕の上をナデ 底面:組織痕	工具ナデ	にぶい赤褐 にぶい橙	にぶい褐	粗質 B	
7	44	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ条痕 口唇部:よこナデ	よこ条痕	明赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 b	外面、突帯状の微隆起部分有り。穿孔有り。
7	45	I区 包含層	縄文土器	深鉢	口唇・突帯:よこナデ 突帯下:よこ条痕	ナデ?(表面風化)	にぶい橙	にぶい黄橙	粗質 A (岩片やや少)	
7	46	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ条痕、貼付突帯 (突帯部ナデ)	ナデ?(表面風化)	にぶい褐 黒褐	にぶい黄褐	粗質 A	
7	47	I区 包含層	縄文土器	深鉢	ナデ(表面風化) 貼付突帯	ナデ	にぶい褐	橙	粗質 A	
7	48	I区 包含層	縄文土器	深鉢	丁寧なナデ	ナデ	にぶい赤褐 にぶい黄褐	黒	粗質 B	内面炭化物付着
7	49	I区 包含層	縄文土器	深鉢 底部	斜め条痕 ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗質 A	底面、風化・剥離の 為調整不明
7	50	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナデ 貼付突帯	よこナデ	にぶい褐	にぶい褐	やや粗質 b	
7	51	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナデ 貼付突帯	よこナデ	にぶい橙 にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 a	
7	52	I区 包含層	縄文土器	深鉢	貼付突帯。突帯下部: 工具による押さえ	よこナデ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A	
7	53	I区 包含層	縄文土器	深鉢?	よこ条痕の上をナデ 貼付突帯(突帯部ナデ)	よこ条痕の上を 一部ナデ	橙 にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや粗質 a(粘土)+0.2~0.6mm の丸味ある砂粒や多。	
7	54	I区 包含層	縄文土器	深鉢	刻み目突帯。よこ 条痕の上をナデ	よこ条痕の上を ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	やや粗質 a (焼きしまり良)	内面色調は、 一部黒色
7	55	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	よこ条痕の上をナデ。刻み目 突帯。口唇部にも刻み目か?	よこナデ	暗灰黄	にぶい黄褐	やや粗質 b	
7	56	I区 包含層	縄文土器	浅鉢	よこ条痕。口唇部:ナデ。刻 み目突帯(突帯部ナデ)	よこナデ。口唇 端部:刻み目か?	にぶい黄橙	橙	やや粗質 a(粘土)+微細~3mm (0.4mm以下最多)の白色岩片多。	
7	57	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	胴部突帯。口唇上:よこ条痕又、 刻み目。口唇下:ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	やや粗質 a (焼きしまりやや悪い)	
7	58	I区 包含層	縄文土器	深鉢	刻み目突帯 よこナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	やや粗質 a (焼きしまり良)	外内面共剥離 箇所有り
7	59	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ条痕 屈曲部:刻み目	よこ条痕 屈曲部:指押さえ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや粗質 a (焼きしまりやや悪い)	
7	60	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ条痕 屈曲部:刻み目	ナデ	明赤褐	にぶい橙	やや粗質 a (焼きしまり やや悪い)	
7	61	I区 包含層	縄文土器	深鉢	ナデ 口縁上部:連続刺突文	ナデ	灰褐	灰褐	やや粗質 b	62と同一個体か?
7	62	I区 包含層	縄文土器	深鉢	上半:よこナデ 下半:粗いナデ 屈曲部:連続刺突文	粗いナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや粗質 b	61と同一個体か?
7	63	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ工具(ハケ状)ナデ 口唇直下:刻み目突帯 (突帯下部工具による押さえ)	よこ工具(ハケ状)ナデ	明黄褐	明黄褐	やや粗質 a(粘土)+0.5~1.2mm の丸味ある砂粒や多。0.3mm 以下の砂・鉱物粒少。	

第4表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
7	64	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ条痕の上をナデ 口唇直下：刻み目突帯(ナデ)	よこ条痕 口唇部：ナデ	橙	橙	〈やや精良な粘土〉+0.4~1.2mmの鉱物粒、丸味ある砂粒	
7	65	I区 包含層	縄文土器	鉢?	ナデ 口唇直下：刻み目突帯 口唇部：縦線と見られる連続短沈線	ナデ	橙	橙	〈やや精良な粘土〉+0.2~1mmの丸味ある砂粒、0.5mm以下の鉱物粒やや少、3mm前後の岩片ごく少。	外内：丹塗り
7	66	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこ条痕 屈曲部：刻み目突帯	よこ条痕	橙	橙	やや粗質 a	
7	67	I区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナデ 屈曲部：貼付突帯に連続刺突文	ナデ	橙	橙	粗質 A (岩片小)	
7	68	I区 包含層	縄文土器	壺	よこナデ 口唇直下：一条の凹線とその下に刻み目突帯	よこナデ 頸部：指押さえ	にぶい赤褐 褐灰	橙	やや粗質 a (岩片少なく、黒色柱状鉱物粒多)	頸部内面に赤色顔料付着。推定口径約13cm
7	69	I区 包含層	縄文土器	深鉢	上半：よこ条痕 屈曲部：刻み目突帯(ナデ)	上半：斜め条痕 下半：よこ条痕の上をナデ	淡黄	淡黄	〈やや精良な粘土〉+0.5~1mmの丸味ある砂粒やや多。2.5~6mmの岩片少。	
7	70	I区 包含層	縄文土器	壺?	ナデ 刻み目突帯	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	やや粗質 a	壺肩部か?
7	71	I区 包含層	縄文土器	鉢	よこナデ 口唇直下：爪による刻み目突帯：刻み目有り(刻離箇所多)	ナデ 一部工具痕	にぶい赤褐	明赤褐	やや粗質 b	
8	72	I区 包含層	縄文土器	不明	丁寧なナデ X字状貼付突帯	よこ・やや粗いナデ	にぶい橙	にぶい橙 暗灰黄	精良Ⓐ	内面に粘土ひも接ぎ目。73と同一個体か?
8	73	I区 包含層	縄文土器	不明	丁寧なナデ 貼付突帯 貼付突帯にそった沈線	ナデ	にぶい橙	にぶい褐	精良Ⓐ	72と同一個体か?
8	74	I区 包含層	縄文土器	浅鉢?	よこナデ 沈線 屈曲部：刻み目	工具によるよこナデ 下半：不明(表面風化)	灰黄	灰黄	精良Ⓐ +0.5~1mmの黒色鉱物粗粒少。	
8	75	I区 包含層	縄文土器	鉢?	丁寧なナデ 沈線(上端) 貼付突帯、瘤状貼付文	ナデ	にぶい褐	オリーブ褐	やや精良 (微細な鉱物粒多く含む、やや粗い印象、ごく少量ながら、0.5~1.5mmの粗い黒色鉱物粒・岩片含む。)	
8	76	I区 包含層	縄文土器	壺?	ミガキ	丁寧なナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	精良Ⓐ	
8	77	I区 包含層	縄文土器	台付 浅鉢	粗いナデ 裾下端：突帯(上部に沈線)	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	やや精良 (0.2~0.5mmの鉱物粒少と1~2mmの岩片ごく少含む)	脚台部だが、上部がどの様な形態の器種か不明。突帯上部の沈線は、突帯貼付のための工具痕か?
8	78	I区 包含層	縄文土器	不明	ナデ 同心円状の沈線文	ナデ 指押さえ(押さえ時の爪圧痕も有り)	にぶい黄褐	にぶい褐	やや精良 (75と類似。2mmの粗い黒色鉱物粒も含む。)	上下左右方向不明
8	79	I区 包含層	縄文土器	不明	丁寧なナデ 沈線文	ナデ(一部工具痕)	にぶい黄褐	にぶい褐	やや精良 (75と類似)	小円形の凹部があるが、文様か、何かの痕跡か不明
8	80	I区 包含層	縄文土器	円板	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	黄灰	やや粗質 a	土器片利用の円板
11	81	SA1	弥生土器	甕	平行線タタキ	たて・斜めハケ 指押さえ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〈やや精良粘土〉+1~2.5mmの丸味ある砂粒多。	外面上端および内面下半スス付着
11	82	SA1	弥生土器	甕	平行線タタキ	上方向の強いナデ 指押さえ	にぶい黄褐 黒褐	暗灰黄	〈やや精良粘土〉+1~2mmの砂粒多、3~4mmの岩片少。焼きしまり良。	外面スス付着
11	83	SA1	弥生土器	壺	ハケ	上半：斜めハケの上を、斜めへらナデ 下半：まき、および斜めの強いナデ	黒褐	にぶい黄褐	やや粗質だが焼きしまり良。0.3~1mmの砂粒含む。	外面スス付着
11	84	SA1	弥生土器	壺	上端：よこナデ たて・斜めのハケ	ナデ(刻離ケ所多)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや粗質。白~黄橙~黒の色ムラ有。0.2~0.5mmの砂・鉱物粒、12mm前後の粗赤粘土粒含む。	
11	85	SA1	弥生土器	壺	斜めハケ (幅の小さいハケ)	指押さえ ナデ	浅黄橙	浅黄橙	〈精良粘土〉+1~2mmの丸い砂粒多、4~5mmの細円礫少。	
11	86	SA1	弥生土器	不明	粗いナデ	ナデ?(表面風化)	褐灰 にぶい黄橙	にぶい黄橙 褐灰	粗質 A (黒色柱状の大きいものやや多)	
11	87	SA1	弥生土器	甕	よこナデ	ナデ	黄灰	橙	粗質 A (混入物若干少)	外面スス付着
11	88	SA1 SA2	弥生土器	甕	口縁~頸部：よこナデ 胴部：ナデ 底面：ミガキ様の丁寧なナデ	ナデ、粘土抜き目付近指押さえ 口縁部：よこナデ	にぶい褐	にぶい褐	粗質 A' (岩片小さくごく少)	外面：スス付着(色調黒) 内面：炭化物付着(色調黒) 特に胴部中央。表面剥落部も多。
11	89	SA1	弥生土器	甕	ナデ	ナデ	にぶい橙 黒褐	黄灰	粗質 A' (岩片小さくごく少)	外面：スス付着 内面：全体に炭化物付着
11	90	SC5	弥生土器	甕?	ナデ(一部指による強いナデ) 口唇：へらナデによるよこナデ	へら状工具による粗いよこナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	粗質 B	外面：スス付着 層状の割れが見られる。
11	91	SC1	弥生土器	甕	よこ工具ナデ(ハケ状)の上をナデ	ナデ 頸部付近：斜め工具ナデ(ハケ状)	浅黄	浅黄	〈やや精良粘土〉+微細~0.4mmの砂粒少、2~6mmの細円礫少。	
11	92	I区 包含層	弥生土器?	壺	櫛描波状文 頸部：よこナデ	斜めハケの上を一部ナデ 頸部付近：指押さえ	橙	橙	〈精良粘土〉+微細~0.5mmの鉱物粒。	
11	93	I区 III層上	弥生土器	壺	ナデ	頸部：ハケナデ 上半部：粘土ひも連続自残る(一部指押さえ)	にぶい黄橙	浅黄	〈やや精良な粘土〉+1~3mmの丸味ある粗砂	外面：ススわずかに付着
11	94	I区 II層	弥生土器	壺?	口唇部：刻み よこナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〈やや精良な粘土〉+0.2~1.5mmの粗砂多	
13	99	I区 包含層	土師器	坏・蓋	よこミガキ	よこミガキ	橙	橙	〈精良粘土〉+0.5~1.5mmの砂粒ごく少	外内面共、丹塗り
13	100	I区 II層	土師器	坏・蓋	ヘラケズリ	ナデ	にぶい褐	橙	〈精良粘土〉+1~1.5mmの砂粒	

第5表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(4)

挿図 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
13	101	I区	土師器	高台付 坏	ナデ	ナデ	灰白	灰白	<精良粘土>+微細~ 0.5mm次の砂粒	
13	102	I区 包含層	須恵器	坏・蓋	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒	灰	精良	外面:内面口縁端部 自然釉
13	103	I区 包含層	須恵器	坏・身	体部下半:ケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰	灰白	精良	
13	104	I区 II層	須恵器	甗	よこナデ 柳描波状文	よこナデ	灰白	灰白	精良	内面:自然釉 (釉調、暗オリーブ)
13	105	I区 III層上面	須恵器	坏・蓋	回転ケズリ 回転ナデ つまみ部:ナデ	回転ナデ	灰白 灰	灰黄	精良	外面:自然釉 (一部、繊維状の融 着物有り)
13	106	I区 包含層	須恵器	坏・蓋	ナデ	よこナデ 口縁:沈線	黄灰	暗灰黄	精良	
13	107	I区 包含層	須恵器	坏・身	よこナデ	回転ナデ	暗灰黄	黄灰	精良	
13	108	I区 II層	須恵器	坏・身	よこナデ 体部下部:ケズリ の上をよこナデ	回転ナデの上をナデ	黄灰	暗灰黄	精良	外面:口縁部に一部 自然釉
13	109	I区 II層	須恵器	坏・身	回転ナデ 体部下部ケズリ	回転ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	精良	
13	110	I区 II層	須恵器	高台付 坏	よこナデ 高台付部:ヘラ切り	ナデ	灰黄	灰黄	精良	
13	111	I区 包含層	須恵器	高台付 坏	体部:回転ナデ 高台付部:よこナデ 接合部:土質による押しえ	よこナデ	灰	灰	精良	
13	112	I区 II層	須恵器	高台付 坏	ナデ	よこナデ ナデ	灰黄	灰黄	精良	高台部剥離
13	113	I区 II層	須恵器	小型壺 (甗)?	上半:回転ナデ 下半:平行タタキ	上半:よこナデ 下半:同心円当て具痕	灰黄	黄灰	精良	
13	114	I区 包含層	須恵器	壺?	よこナデ	よこナデ	灰	灰	精良	外面屈曲部以下に自 然釉。屈曲部以下形 状いびつ
13	115	I区 II層	須恵器	壺?	回転ナデ	回転ナデ	暗灰黄	灰黄	精良	丸底壺の底部の可能 性も有り
13	116	I区 II層	須恵器	壺	よこナデ	よこナデ	暗灰黄	暗灰黄	精良	外面:自然釉 底面外面の中央寄り がやや下がるので高 台が付く形骸か?
13	117	I区 II層	須恵器	壺	回転ナデ?(全面に 自然釉) 沈線	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	精良	外面:茶色の自然釉
13	118	I区 II層	須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	灰 (やや黒色味)	灰	精良	
13	119	I区 II層	須恵器	甗	よこナデ 凹線、突帯	よこナデ	灰黄	灰黄	精良	
13	120	I区 II層	須恵器	甗	よこナデ 凹線、突帯	よこナデ	灰黄	灰	精良	
13	121	I区 II層	須恵器	甗	よこナデ	よこナデ	灰	黄灰	精良	
13	122	I区 II層	須恵器	甗	平行タタキ	同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	123	I区 II層	須恵器	甗	平行タタキ	同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	124	I区 II層	須恵器	甗	頸部側:よこハケ 平行タタキ	頸部側:よこナデ 同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	125	I区 II層	須恵器	甗	格子目タタキの 後一部ナデ	同心円当て具痕 の後一部ナデ	灰	灰	精良	
13	126	I区 II層	須恵器	甗	平行タタキの後 ハケナデ	同心円当て具痕	灰	灰	精良	
13	127	I区 II層	須恵器	甗	平行タタキ	凹凸のない同心円状 の当て具痕、ナデ	黄灰	にぶい黄	精良	焼きしまり不良
13	128	I区 III層上層	須恵器	甗	平行タタキの上にハケ	同心円の当て具痕	灰	灰	精良	
13	129	I区 II層	須恵器	甗	格子目タタキの上を ナデ	同心円の当て具痕 の上をナデ	灰	灰	精良	外面に炭火物様の黒 色物付着
13	130	I区 II層	須恵器	甗	平行タタキの上を 一部ナデ	ナデ 円形の当て具痕?	灰黄褐	灰黄褐	精良	
13	131	I区 II層	須恵器	甗	平行タタキの上 から一部ナデ	ナデ 円形の当て具痕?の 上をナデ	褐灰	褐灰	精良	
13	132	I区 III層上層	須恵器	甗	平行タタキの上 にハケ	円形?の当て具 痕の上をナデ	褐灰	褐灰	精良	
13	133	I区 II層	須恵器	甗	格子目タタキ	強いナデ	黄灰	黄灰	精良	

第6表 神殿遺跡B地区出土土器観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	出土位置 層位	種別	器種	調整・文様の特徴		色調		胎土の特徴	備考
					外面	内面	外面	内面		
13	134	I 区 III 層	須恵器	甕	頸部：よこナデ 格子目タタキ	ナデ、ヘラ状工具による強いナデ上げ 強いナデ	灰	灰	精良	
14	135	I 区 包含層	無釉陶器 (須恵器?)	甕	ナデ 2条の浅い細沈線 間に櫛描波状文	同心円の当て具痕 の上をよこナデ	暗灰黄	暗灰黄	精良	136と同一個体
14	136	I 区 II 層	無釉陶器 (須恵器?)	甕	斜めの格子目タタキの 上をナデ消し、1条の浅 い沈線に櫛描波状文	同心円の当て具痕 の上をよこナデ	暗灰黄	暗灰黄	精良	135と同一個体
14	137	SC 4	須恵質土器	鉢?	よこ、斜めナデ	よこナデの上、 たてナデ	にぶい黄 黄褐	浅黄 黄褐	精良	
14	138	I 区 II 層	土師器	布痕 土器	ナデ	布目痕	灰黄 淡黄	明黄褐	<精良粘土>+0.5mm 前後の砂粒やや多	外面に光沢のある灰色 の付着物有り
14	142	I 区 II 層	磁器 (青磁)	碗	ヘラ描きによる 文様の上を施釉	ヘラ描きによる 文様の上を施釉	釉調：オリ ーブ灰	釉調：オリ ーブ灰	精良 胎土色調：灰白	釉の厚さ最大0.8mm 龍泉窯系
14	143	I 区 II 層	磁器 (青磁)	碗	施釉(貫入)	施釉(貫入)	釉調：淡青	釉調：淡青	精良 胎土色調：灰	釉の厚さ最大0.4mm 龍泉窯系?
14	144	I 区 II 層	磁器 (青磁)	碗	櫛状工具による回転 ナデの上を施釉	櫛状工具端部による 文様の上を施釉	釉調：灰 オリーブ	釉調：灰 オリーブ	精良 胎土色調：灰	釉の厚さ最大0.3mm 同安窯系
14	145	I 区 II 層	磁器 (染付)	碗	染付施釉	施釉	灰白	灰白	精良	須恵色調 (外面：オリーブ灰 内面：暗緑灰) 肥前系
14	146	I 区 II 層	磁器 (染付)	碗	染付施釉	染付施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
14	147	I 区 II 層	磁器 (染付)	角形鉢	施釉 (焼成不良)	染付施釉 ハマ痕有り	灰白	灰白	精良 胎土色調：灰	肥前系
14	148	I 区 II 層	磁器 (染付)	碗	染付施釉	施釉	白	白	精良	「大明年製」銘 肥前系
14	149	I 区 II 層	磁器 (染付)	碗	染付施釉	施釉	灰白	灰白	精良	肥前系
14	150	I 区 包含層	陶器	碗	櫛状工具による文様を白 土象嵌、その上に施釉	施釉	オリーブ黒	オリーブ黒	精良 胎土色調：黄灰	唐津焼
14	151	I 区 II 層	磁器 (染付)	碗	染付施釉 (焼成やや不良、貫入)	施釉(焼成や や不良、貫入)	灰白	灰白	精良	肥前系
14	152	I 区 II 層	磁器	人形	施釉の上に捺付け(赤・金・緑・ 黒使用。赤以外は残存無し。)	指押さえ	灰白	灰白	精良	型作り。裏面を持つ童子又は、 狐に乗る童子。生産地不明。
14	153	I 区 II 層	磁器 (染付)	レンゲ	染付施釉	染付施釉	灰白	灰白	精良	型作り。須恵色調は、非常に 明るい濃青色。生産地不明。
15	154	II 区	縄文土器	浅鉢	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	褐灰	精良⑧	
15	155	II 区 SA 5	縄文土器	浅鉢	ミガキ	浅い凹線 ナデ(凹線以上) よこミガキ(凹線以下)	にぶい褐	にぶい褐 灰褐	精良⑨	
15	156	II 区 SA 6	縄文土器	浅鉢	ミガキ 浅い沈線	ミガキ 凹線	黒褐	黒	精良⑩	
15	157	II 区 包含層	縄文土器	浅鉢	ミガキ 穿孔	不明(表面風化)	灰黄	灰	精良⑪	焼成後穿孔
15	158	II 区 SA 6	縄文土器	浅鉢	ナデ 2条の沈線	不明(表面風化)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗質 A	
15	159	II 区 SA 4	縄文土器	壺?	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	精良⑫	
15	160	II 区 SA 7	縄文土器	深鉢	よこナデ 突帯	口唇付近：よこナデ 工具ナデの上をナデ	灰黄褐	褐	粗質 B	
15	161	II 区 SA 4	縄文土器	深鉢	よこナデ 突帯	口縁端部： 弱い指押さえ	にぶい黄橙 黒褐	にぶい黄褐 黒褐	粗質 A	
15	162	II 区 包含層	縄文土器	深鉢	よこナデ 刻み目突帯 (備考欄参照)	よこハケ	黒褐 褐	褐	粗質 B	刻み部は、指先により上方 と下方2ヶ所を左から右へ 深く押圧したものか? 外面：スス付着
15	163	II 区 SA 4	縄文土器	深鉢	ナデ 刻み目突帯	よこナデ	褐	黒褐	やや粗質 b	外面わずかに炭化物付着
15	164	II 区 包含層	縄文土器	深鉢	上半：ナデ 下半：条痕 屈曲部：刻み目突帯 (刻み目に布状押痕)	不明(剝離)	にぶい黄褐	——	粗質 A	
15	165	II 区 SA 7	縄文土器?	不明	ナデ 刻み目突帯(刻み目は 貝殻磨き又は、ハケ端部 によるものか?)	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	<やや精良な粘土>+0.5mm 前後の砂粒少、微細~0.4 mmの砂・鉱物粒やや多	
15	166	II 区 SA 11	弥生土器	甕	ナデ 櫛状工具による文様	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	粗質 A	弥生時代後期の粗製 甕頸部
15	167	I 区 SA 2	土師器?	小型壺	口縁上半：よこナデ、 ヘラナデ 口縁下半：たてハケ	よこナデ	暗赤褐	にぶい褐	<やや精良な粘土>+微細 ~0.4mmの白色粒多、1.5mm 前後の丸味ある砂粒ごく少	布留式模倣か? 外面：スス付着
15	168	I 区 SA 2	土師器?	甕	頸部：よこナデ たてハケ	斜めハケの上を、 ヘラナデ	黒	にぶい黄褐	167と同一胎土	布留式模倣か? 外面全面にスス付着
15	169	I 区 SA 2	土師器?	甕?	たて、斜めハケ	斜めハケの上部斜め よこのヘラナデ	黄褐	にぶい黄褐	167と同一胎土	布留式模倣か? 外面全面にスス付着



調査開始時 南より淡路城方向を望む



調査区遠景 (北から)



B地区 SA1 (中央) 検出状況 (東から)



I区全景 (北東より)



左上：調査面検出作業

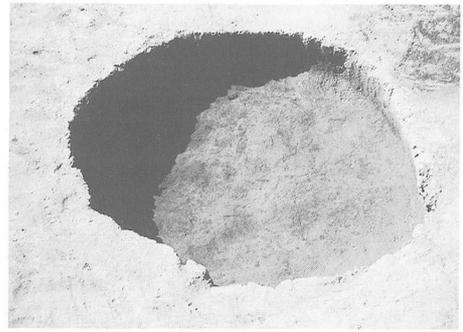
右上：T2トレンチ南部
土層堆積状況

左：T2トレンチ北部
土層堆積状況
(時期不明の掘り込み)

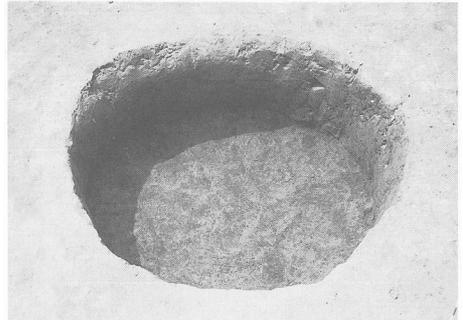




I区 全景 (上空から)



SC3 完掘状況



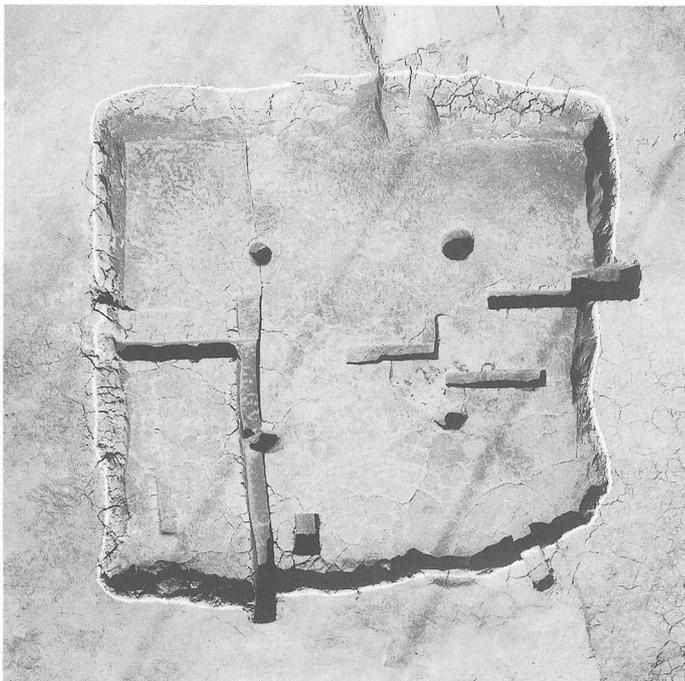
SC4 完掘状況 下:同 埋土断面



右: SC1 検出状況および
埋土土層断面

下: SA1 (上空より)

右下: SC1 完掘状況





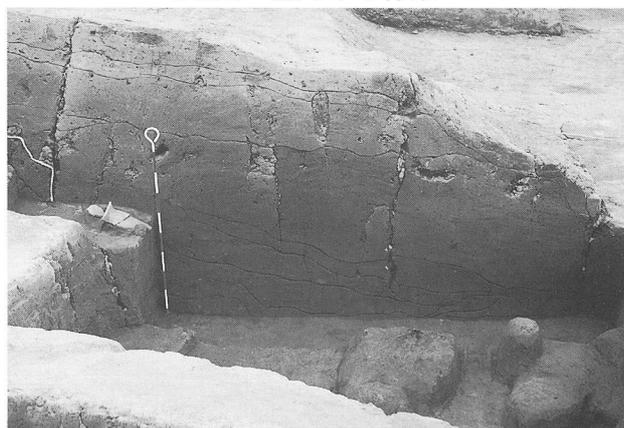
SA 1 完掘状況 (西から)



SA 1 掘り下げ作業



SA 1 東部 土器 (88 ほか) 出土状況 (西南から)



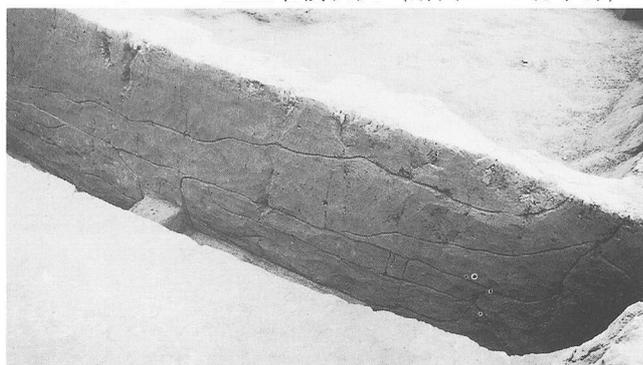
SA 1 埋土堆積状況 (断面F-F'北半部)



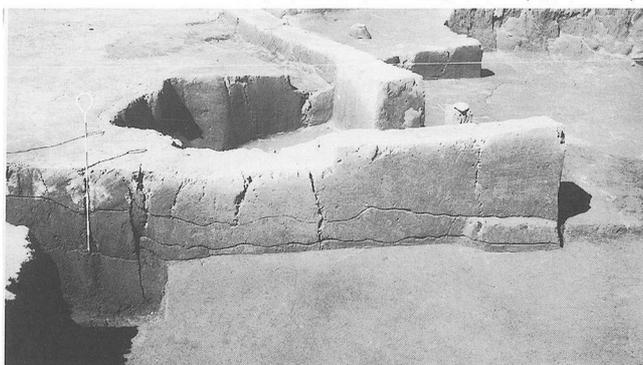
SA 1 埋土堆積状況 (断面C-C'北半部)



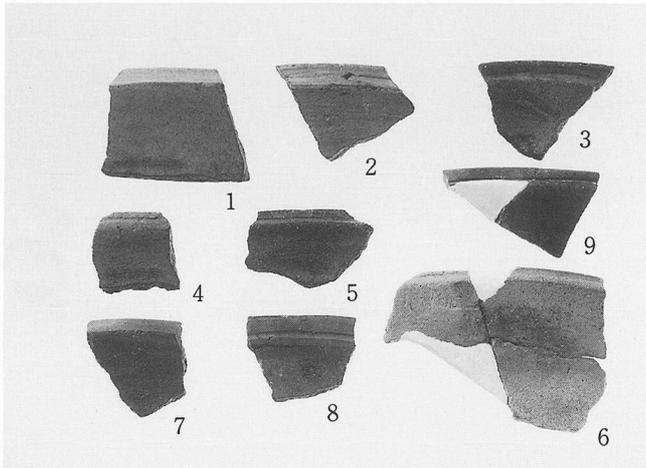
SA 1 北東部壁面周辺の土層状況 (断面F-F')



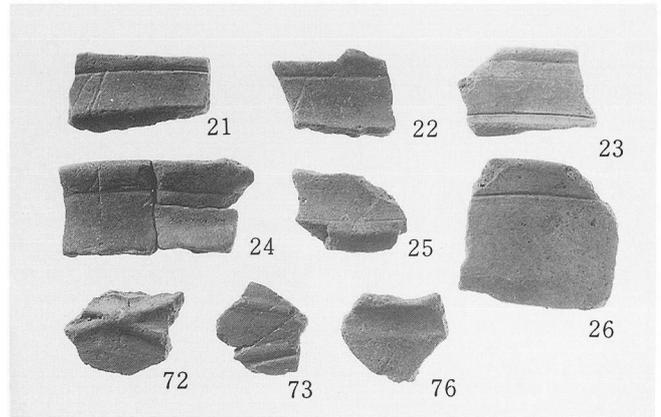
SA 1 西壁付近土層断面 (断面B-B'西端部)



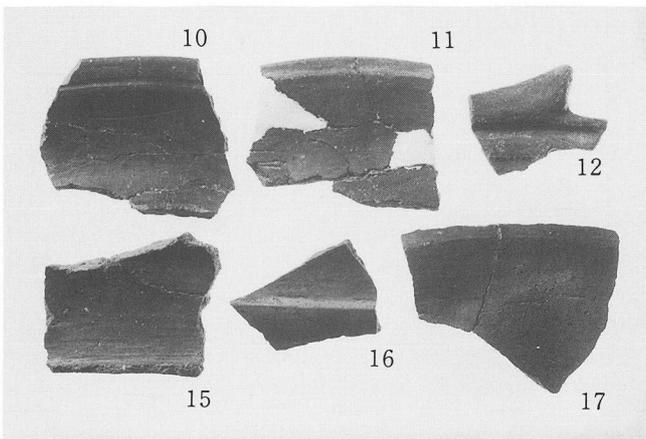
SA 1 南東部壁面周辺の土層状況 (断面C-C'南半部、北東から)



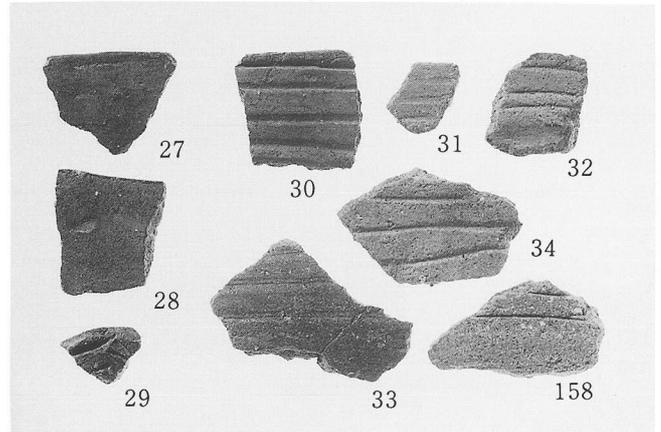
縄文時代の土器 <精製浅鉢>



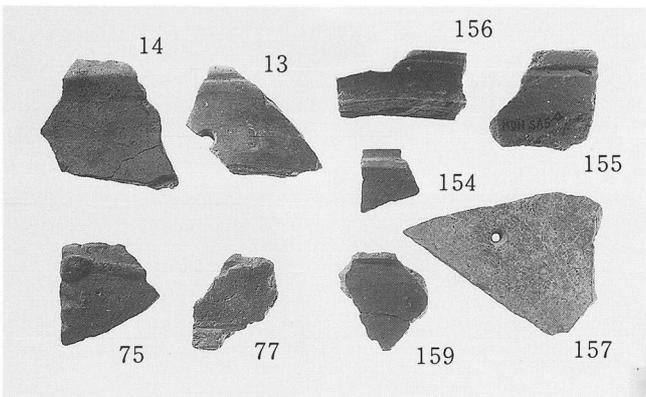
<精製浅鉢ほか>



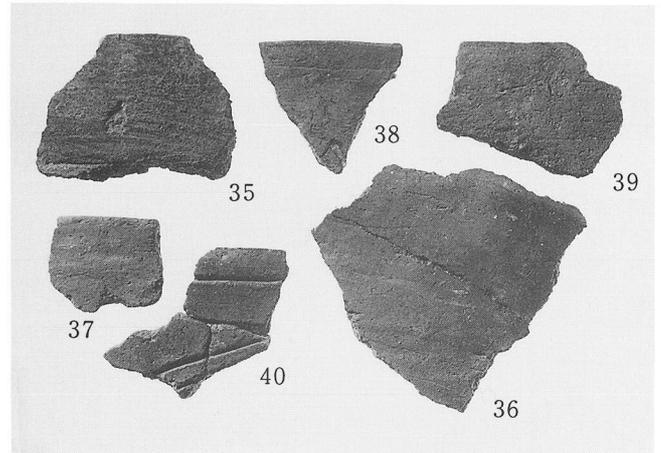
<精製浅鉢>



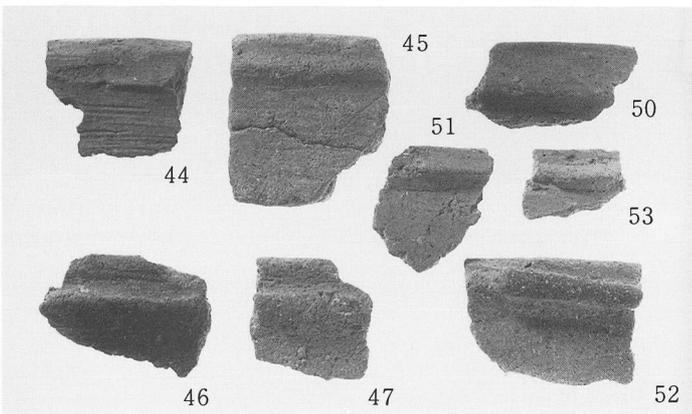
<沈線文のある土器ほか>



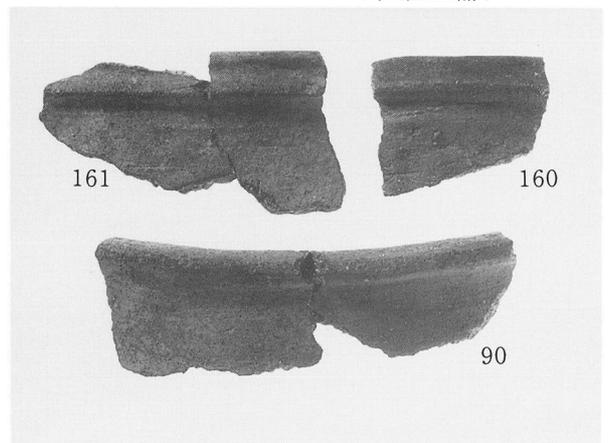
<精製浅鉢ほか>



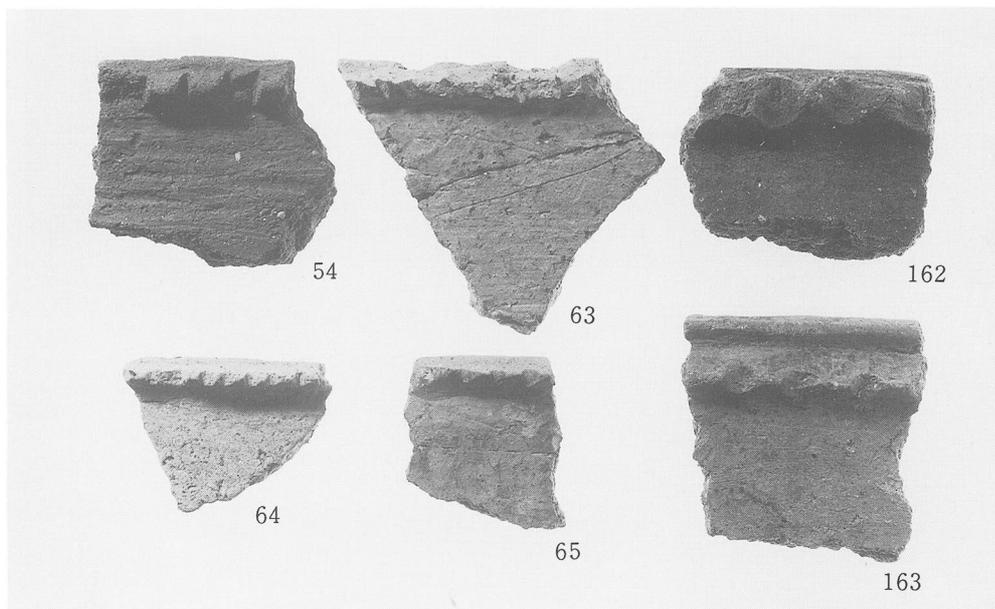
<粗製土器>



<突帯文土器>

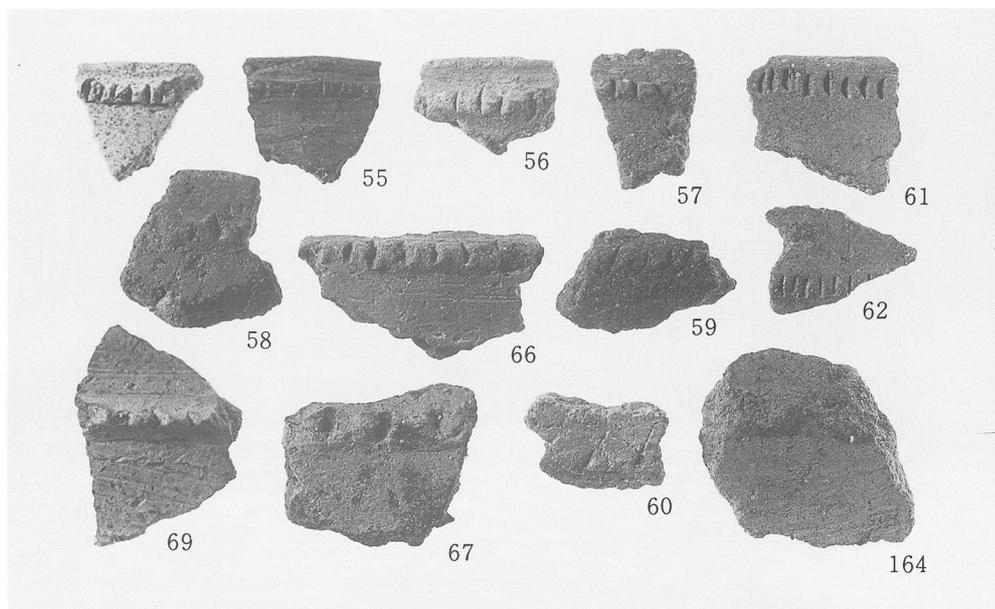


160・161 <突帯文土器> 90…弥生土器?



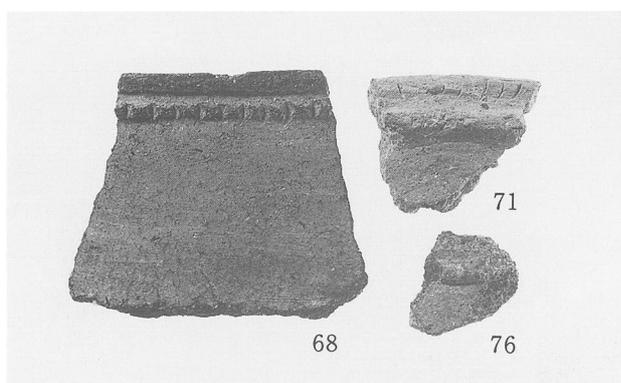
縄文時代 晩期

刻目突帯文土器
(口縁部)

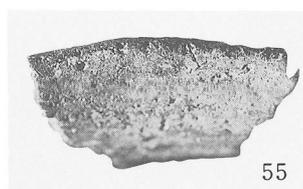


刻目突帯文土器
(小型口縁部)

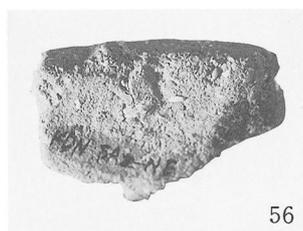
および胴部屈曲部



刻目突帯文土器
(甕以外の器種)



55

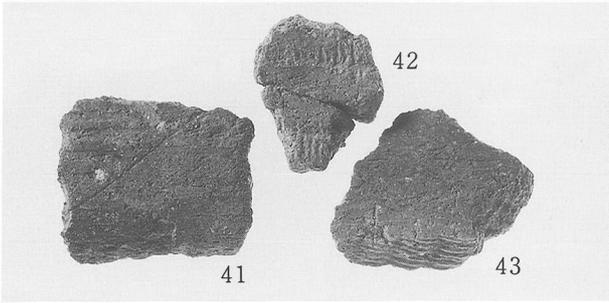


56

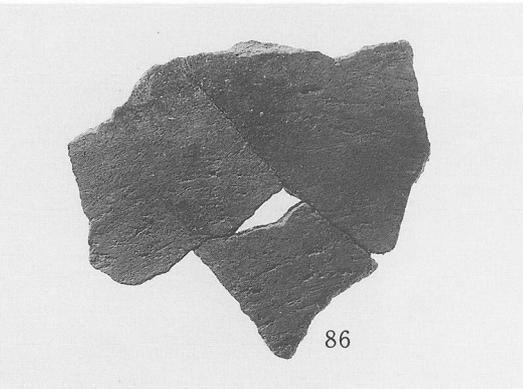
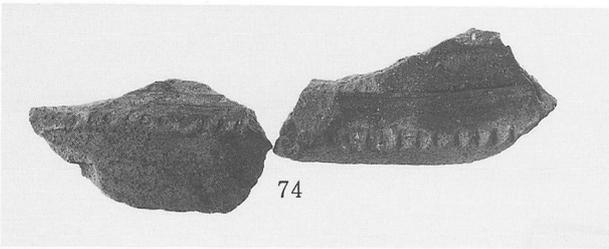
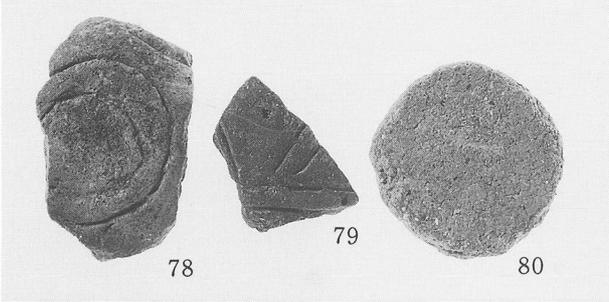


57

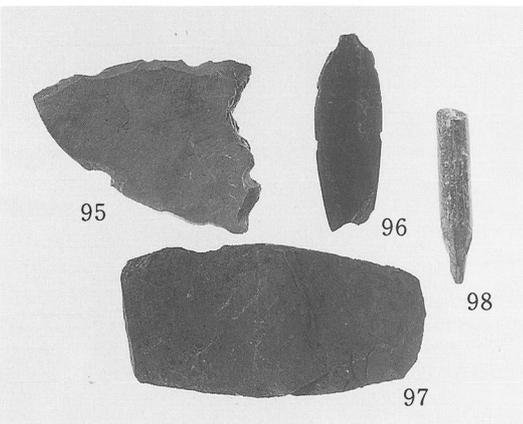
55 ~ 57 口唇部 刻み 拡大写真



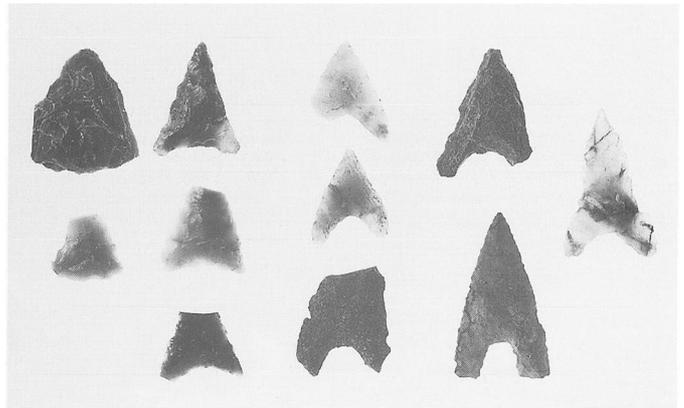
↓ ↑ 縄文時代の土器 ↑ 組織痕土器



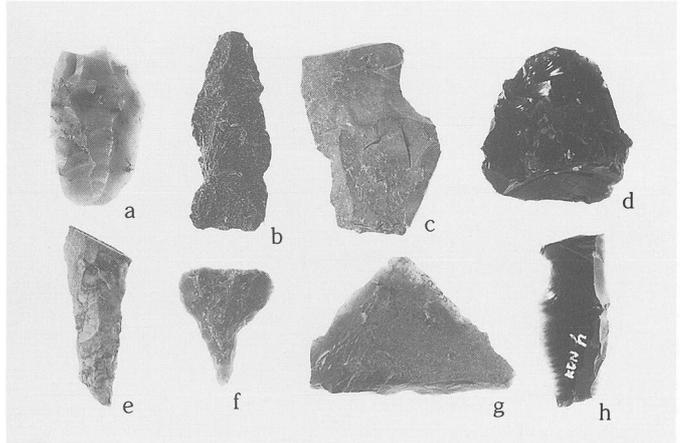
弥生時代?の土器



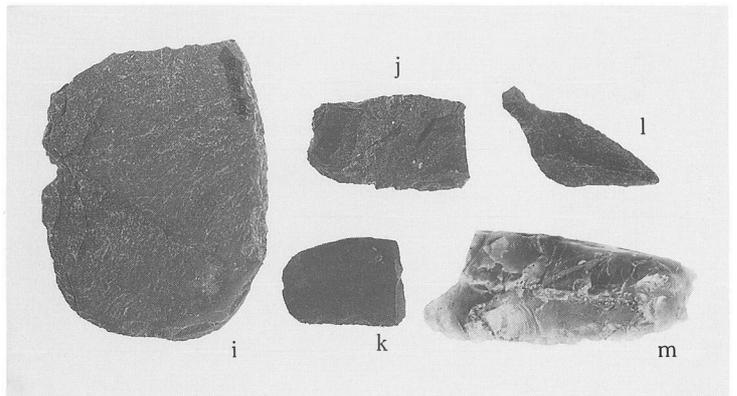
弥生時代および時期不明の石器



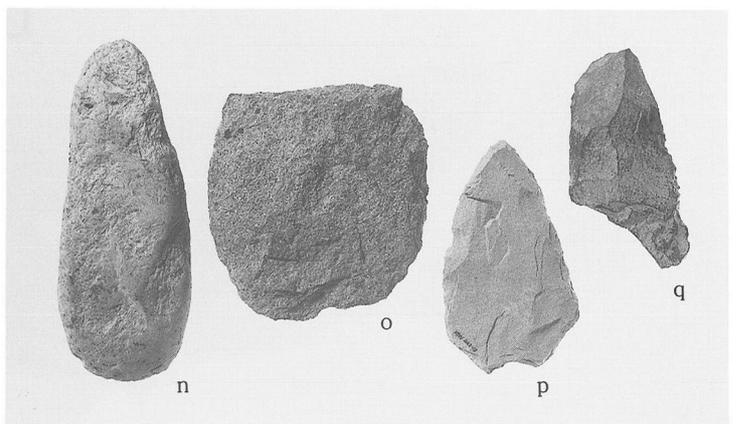
↓ ↑ 縄文時代の石器 ↑ 石鏃



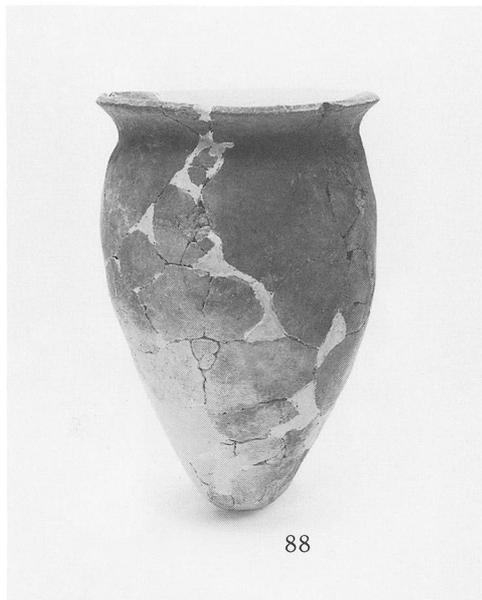
a…楔形石器? b・d…尖頭状石器 e・f…石錐 c・g・h…スクレーパー



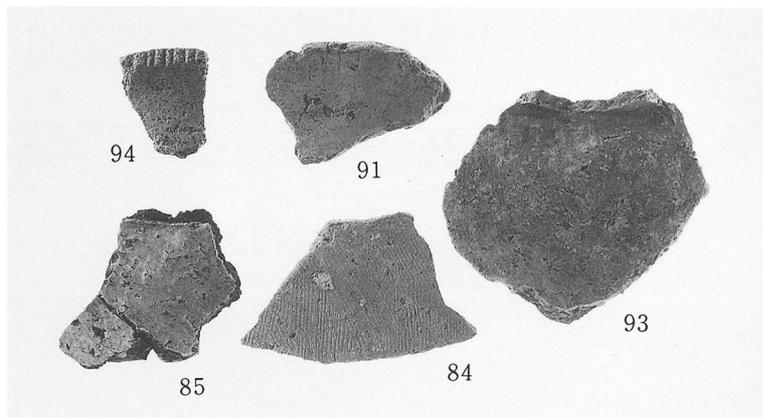
i・k…磨製石器未製品? j・m…スクレーパー l…石匙



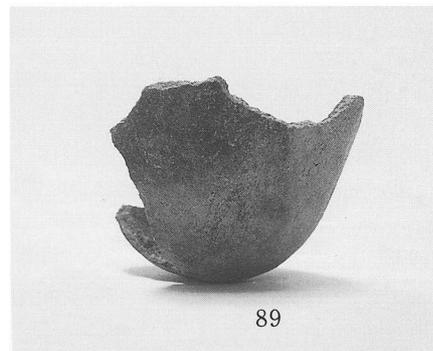
n…磨製石斧 o~q…偏平打製石斧



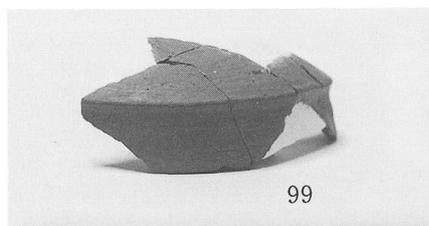
88



上・右 弥生時代の土器

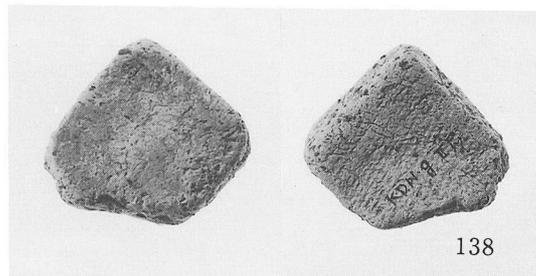
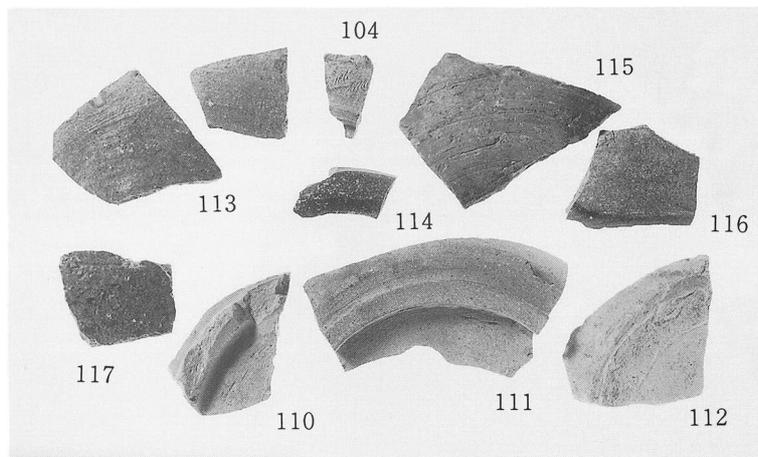


89



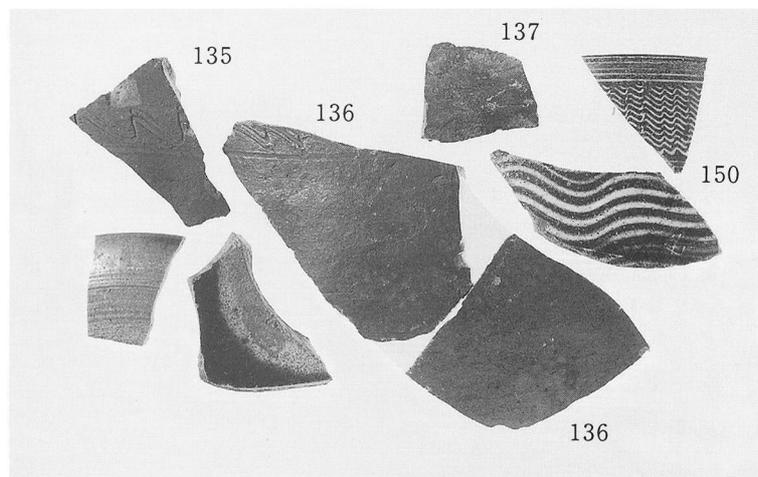
99

左・下 古墳時代以降の遺物

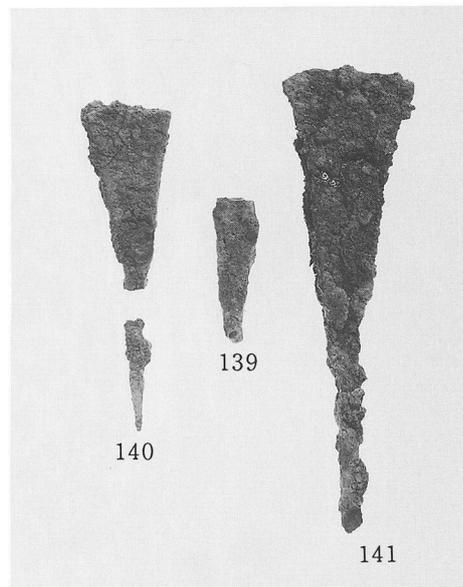


138

製塩（布痕）土器



左下 2 点は内野山窯の製品、150 およびその下は唐津焼



鉄鏃

2. 神殿遺跡C地区の調査

第1節 遺跡の立地と調査の概要

神殿遺跡C地区は、高千穂町大字三田井字神殿にし、高千穂峡を挟んだ東側、高千穂大橋（仮称）の起点部にあたる。

遺跡は、淡路城とされる標高約370mの丘陵から南東に延びた尾根筋、標高323～332m南向き斜面に立地する。丘陵先端部（南西部）は高千穂峡が形成されており、遺跡との比高差は約100mを測る。

神殿遺跡では弥生後期～古墳時代の住居跡が検出されているが、それら集落の立地についてみると、宮ノ前第2遺跡⁽¹⁾や南平第3遺跡、神殿遺跡A地区のI区⁽²⁾のような丘陵と丘陵との間の南向き凹地状の斜面部につくられるもの、あるいは当遺跡やA地区II区のような尾根筋の南向き緩斜面に形成されるものに分れる。このことは地理的環境のほかには風などの気象条件等が集落立地の大きな要因であったと考えられる。

高千穂地方のこの時期の集落の様相としては、南平第3遺跡のように住居が密な状態で発見される場合もわずかにあるものの、大部分は重複することなくつくられ、瀬戸内系の高坏や壺、須玖式土器の甕、布留系の甕などの遺物の流入をみても、宮崎平野部のそれと非常に類似する面もみられる。

註

(1) 長津宗重 他「吾平原第2遺跡 宮ノ前第2遺跡 城ノ平遺跡」『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』宮崎県教育委員会 1993

(2) 戸高真知子 他「広木野遺跡 神殿遺跡A地区」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第7集』宮崎県埋蔵文化財センター 1997

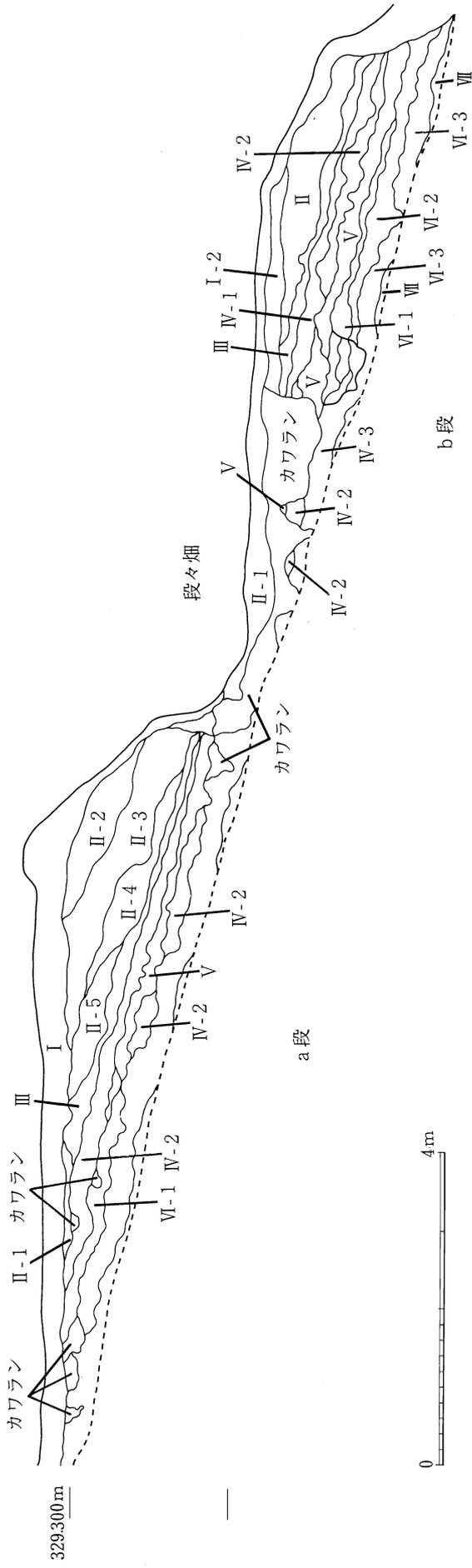
第2節 調査の経過

平成5年に神殿遺跡A・B地区の調査が実施され、緩やかとは言えない斜面部から弥生時代～奈良時代の竪穴住居跡が、中ノ原遺跡では斜面部に陥し穴状遺構が発見された。これらをうけ、県文化課では、高千穂大橋（仮称）の東側起点部の工事範囲についても、何等かの遺構が存在する可能性を想定し、平成7年11月に試掘調査を行った。結果、縄文土器や土師器が出土し遺跡の所在が確認され、神殿遺跡C地区とした。調査は、平成8年6月5日から平成8年11月8日まで実施した。

調査はまず、調査対象地が段々畑であることから再度重機および作業員によりトレンチを入れ、各段の土層や遺構遺物の状況の確認を行った。調査対象地は、四つの段に分かれ、北側（山側）では、Ⅷ層やⅦ層が表土下直に露出し旧地形を残していない。一方、各段の端部（法面）では客土および耕作土が厚く堆積し、その下部にⅢ層以下が残存していた。そこで、まず表土および客土を重機によって除去し、遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層を作業員で掘り進め、Ⅴ層で遺構確認を行った。

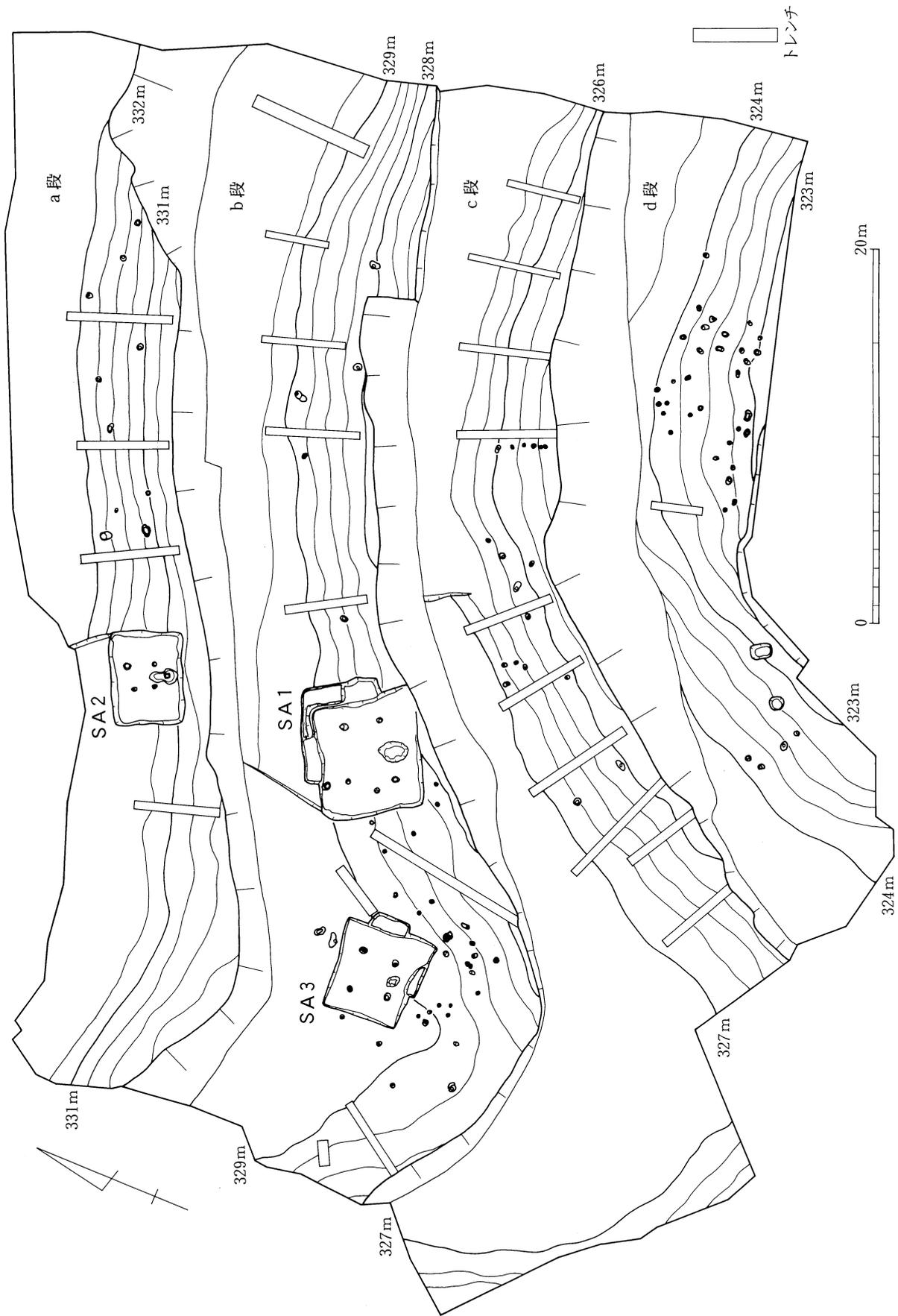
7月上旬、Ⅴ層上面でSA1を検出した。当初、遺構の輪郭から2軒の住居の切りあいと推定されたが、調査の結果、北東部を拡張した1軒の住居として認定した。また、SA1からガラス小玉1点が発見されたため、以後SA1～3の住居床面の埋土をフルイにかけたが、以後、玉類、炭化物などは検出されなかった。

Ⅴ層上面での調査終了後、客土および住居埋土より押型土器が出土していたことから、縄文早期の遺構遺物を確認するためのトレンチを数本入れたが、遺構遺物は検出されなかった。



第I層：現在の耕作土。
 第II層：客土。色調の違いで五つに分れる。
 第III層：黒褐色土(Hue10YR2/2) 遺物を含む。軟質で炭化物少量含む。
 第IV-1層：黄褐色土(Hue10YR5/6) やや軟質できめ細かい。暗褐色土ブロックを含む。
 第IV-2層：黄褐色土(Hue10YR5/6) やや軟質できめ細かい。暗褐色土ブロックを少量含む。きめ細かい。
 第V層：黄褐色土(Hue10YR5/8) やや硬質、少量の暗褐色土 (IV層) のブロックやアカホヤブロックを含む。アカホヤの二次堆積層か。
 第VI-1層：暗褐色土(Hue10YR3/3) やや粘性をもち、黄褐色土 (V層) ブロックを含む。
 第VI-2層：黒褐色土(Hue10YR2/3) 1より粘性のある黒褐色土、にぶい黄褐色土 (IV層) ブロックを含む。
 第VI-3層：黒褐色土(Hue10YR2/3) 2層に比べにぶい黄褐色土 (IV層) ブロックの大きさが小さく量が少ない。
 第VII層：にぶい黄褐色土(Hue10YR5/4) 粘性あり。きめこまか。
 第VIII層：灰白色粘質土。

第1図 神殿遺跡C地区土層断面図



第2図 神殿遺跡C地区遺構分布図

調査の結果、遺構としては古墳時代前半の竪穴住居跡3軒、土坑1基、ピット、遺物は縄文時代後期から晩期の土器類、布留系土器の甕や土師器、石器として打製石鏃、打製石斧、スクレーパー、玉類、鉄鏃などが発見された。

第3節 遺跡の層序

神殿遺跡C地区の基本的な層序は、第1図のとおりである。このうち第Ⅲ層およびⅣ層が遺物包含層であるが、両者に縄文後晩期や土師器が混じることから、遺物の多くは流れ込みと考えられる。遺構検出面の第Ⅴ層は均一の層ではなく暗褐色土のブロックを部分的に含んだアカホヤの二次堆積層に想定され、神殿遺跡A地区のⅠ区の第Ⅳ層に相当する。客土やSA2の埋土中から押型文土器が出土していることから、縄文早期の遺跡の存在の可能性のあるものの、今回の調査では確認できなかった。第Ⅵ・Ⅶ層が当該期にあたるものと考えられる。一方、Ⅱ区で認められたATと推定される黄色のブロックを含んだ黒褐色土はC地区ではみられず、Ⅵ層、Ⅶ層の下が地山と考えられる灰白色粘質土となる。

第4節 遺構と遺物

遺構としては、竪穴住居跡3軒、土坑1基、ピット群を検出した。住居跡は斜面の上から二段目までに作られている。土坑はSA2の東に位置し、ピットは各段まばらに分布するが、建物については復元できなかった。

遺物は住居跡から出土した古墳時代前半の遺物の以外に、Ⅰ～Ⅳ層および住居埋土中からは、縄文土器や弥生土器、布留系の土器、石鏃、スクレーパーなどが発見されている。以下、遺構および遺構内出土遺物、遺構以外の遺物の順に述べ、住居内出土の縄文時代遺物については後でまとめて記述している。遺物の詳細は遺物観察表を参考にされたい。なお、住居跡の面積は、床面積を計測した。

SA1 (第3図)

SA1は、上から二段目の中央よりやや西よりの標高約329mに位置する。住居は完掘の結果、長軸約6.8m、短軸約5.6mの方形プランを基調とし、主軸N-38°-W、面積38.36m²を測る。北壁と東壁の中央に方形の張り出しをもち、この二つの張り出し部の上面を結ぶように鍵状に北東部が拡張されている。遺構はⅤ層で検出し、床面までの深さは、北側で0.98m、南側で0.10mを測る。

遺構の検出面での段階では、当初2軒の方形の住居の重複と考えたが、埋土の堆積や遺構状況から北東部分が張り出す1軒の住居跡と認定した。この北東部拡張部の深さは検出面から約0.2m、床面からだ約0.85mの高さとなる。拡張部の床面は東壁で幅約0.75m、北壁では約20cmと狭くなり、面積は1.9m²。また、北壁の張り出し部は、床面で幅約2.2m、長さ約0.8m、床面からの高さ約0.75m、広さ1.66m²。一方、東壁の張り出し部は、床面で幅約1.8m、長さ約1.1m、床面からの高さ約0.16m、広さ1.89m²を測る。さらに、張り出し部の床面が延び、細長いテラスを呈し、拡張部と合せると、住居北側コーナー部は二段の平坦面が形成されていたことになる。

主柱穴は4本で、2柱穴間に長軸1.65m、短軸1.17m、深さ約0.13mの土坑が設けられている。土坑の埋土は軟質の黒褐色土で少量の炭化物が混入している。また、床面はⅤ層～Ⅶ層ブロックの混合土で貼床が作られている。貼床は四壁周辺以外の床面に施され、深さ約20～40cmを測る。南側には浅く凹む落込みがあり、少量の炭化物が出土したが、焼土は確認できなかった。

床面および土坑から出土した炭化物の年代測定を行ったところ、B.P 1760 ± 60 および B.P 1760 ± 40 の測定結果を得、古墳時代初頭から前半の時期に相当する。(分析結果については南平第3遺跡の自然科学分析の中に記載されている。)

遺物 (第5図1～11)

遺物の量は他の住居跡よりも多いが、床面からは非常に少なく、小片が多い。1は甕で口縁部、胴部、底部の破片を図上復元したものである。2～4は1と同一個体と考えられ、頸部外面に推定で約5cmの高さになる鋸歯状の線刻が描かれている。5～8は壺で、5は小片であるが外面に右下がりのタタキが施される。6は小型の壺で口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。7は小型丸底埴の系譜のもので胎土はきめ細かく、ていねいな作りである。外面胴部にタタキあるいは工具の調整痕が残る。8は胴部がやや扁球状を呈し丸底となる直口壺である。外面にスス付着。9は本遺跡唯一の高坏で、口径18.1cmを測る。坏部の屈曲はやや不明瞭となり口縁部は大きく外方に開く。脚部の形態は不明だが、短く裾部が外方に開くと推定される。坏部と脚部の接合は、脚部挿入する技法を用いている。外面は細かなヘラミガキ、内面は横ナデ調整。10・11は布留系甕の胴部片で、外面は細かなハケメ、外面がヘラケズリ。石器(第12図)としては、敲石(14)、砥石(16)、磨石(17)が出土している。14は敲石だが、両面に磨痕がみられる。17の砥石は全面を使用しており、中央付近はかなり薄くなっている。そのほか埋土中からガラス小玉1点が見つかった。床面の土をすべてフルイにかけたが、この1点のみであった。

SA2 (第4図)

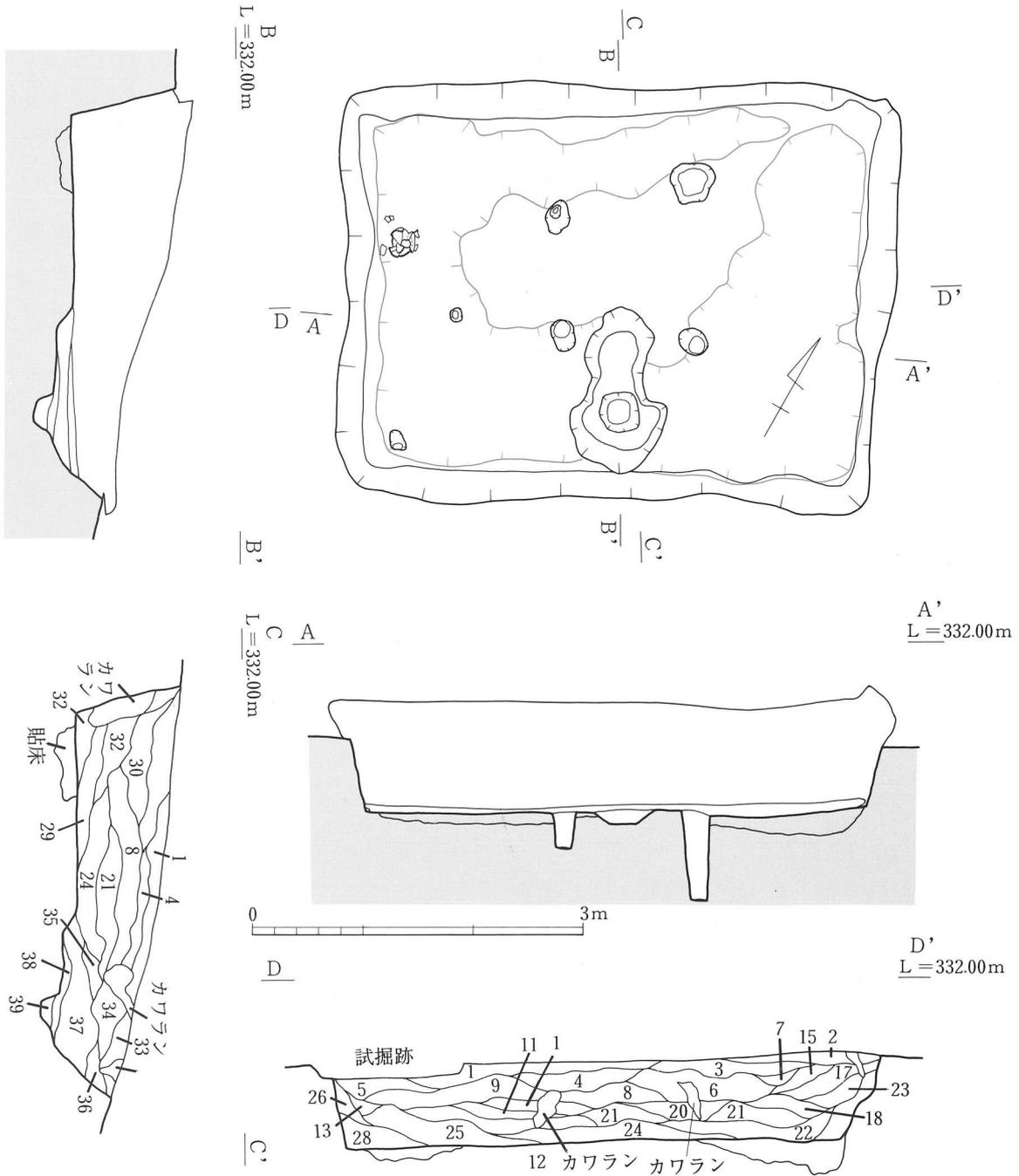
SA2は、上から一段目の中央よりやや西よりの標高約331mの最も高いところに位置する。北壁上部を削平の影響で若干欠くが、長軸5.0m、短軸3.78mの方形プランの住居跡である。V層およびVI層で検出し、傾斜地に作られていることから床面までの深さは、北側で1.06m、南側で0.32m、主軸N-25°-W、面積14.85㎡を測る。

支柱穴は2本で柱穴間の距離は約1.2m。2柱穴間に長軸1.51m、短軸0.88m、深さ約0.1mの土坑が設けられている。土坑内の南側には浅く凹む落込みがあり、少量の炭化物が出土したが、焼土は確認できなかった。床面は住居中央部を除いた箇所に貼床され、埋土はSA1と同様V層およびVI層の混合土で、約10～30cmの深さに掘られ、一定ではない。

遺物 (第5・6図12～21・23)

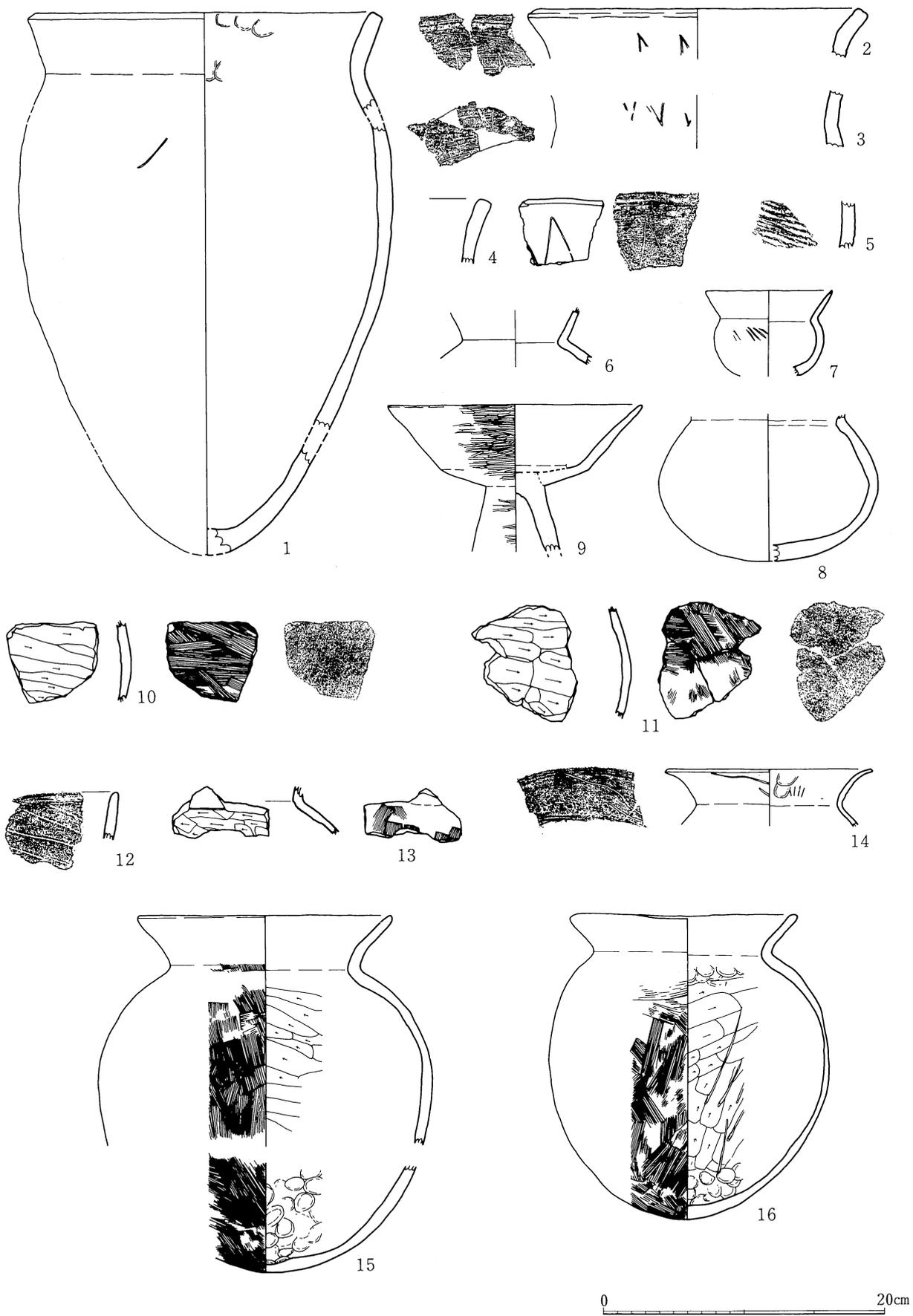
遺物の多くは床面より15～20cmの高さから出土している。ほぼ完形に復元できる16も床面より10cm程度浮いた状況で出土している。

12は甕の口縁部で内面に斜方向に4本+αの沈線(線刻)が施される。13～16は布留系の甕である。15・16の口縁部はやや厚手で端部の調整も丸みをおびる。共通した調整は、口縁部が指オサエの後横ナデ、頸部は外面指オサエ後ナデ、内面は指オサエで1～2cm下からヘラケズリが行われる。13のみ頸部内面屈曲部からヘラケズリされている。胴部外面細かなハケメ調整、内面が横あるいは斜のヘラケズリ、下半部には指オサエがみられる。16の胴部内面には縦方向に近いヘラケズリが施される。色調は明黄褐色系を呈し、胎土はきめ細かく灰白や黒色粒子を含む。外面にはススが、内面胴部下半には炭化物が付着している。14は15・16と比較し薄手で焼成もしっかりしていて、外面に斜方向の線刻がある。17～23は大型の壺で外面に線刻が施されている。線刻の内容は不明で、単なる線刻なのかあ

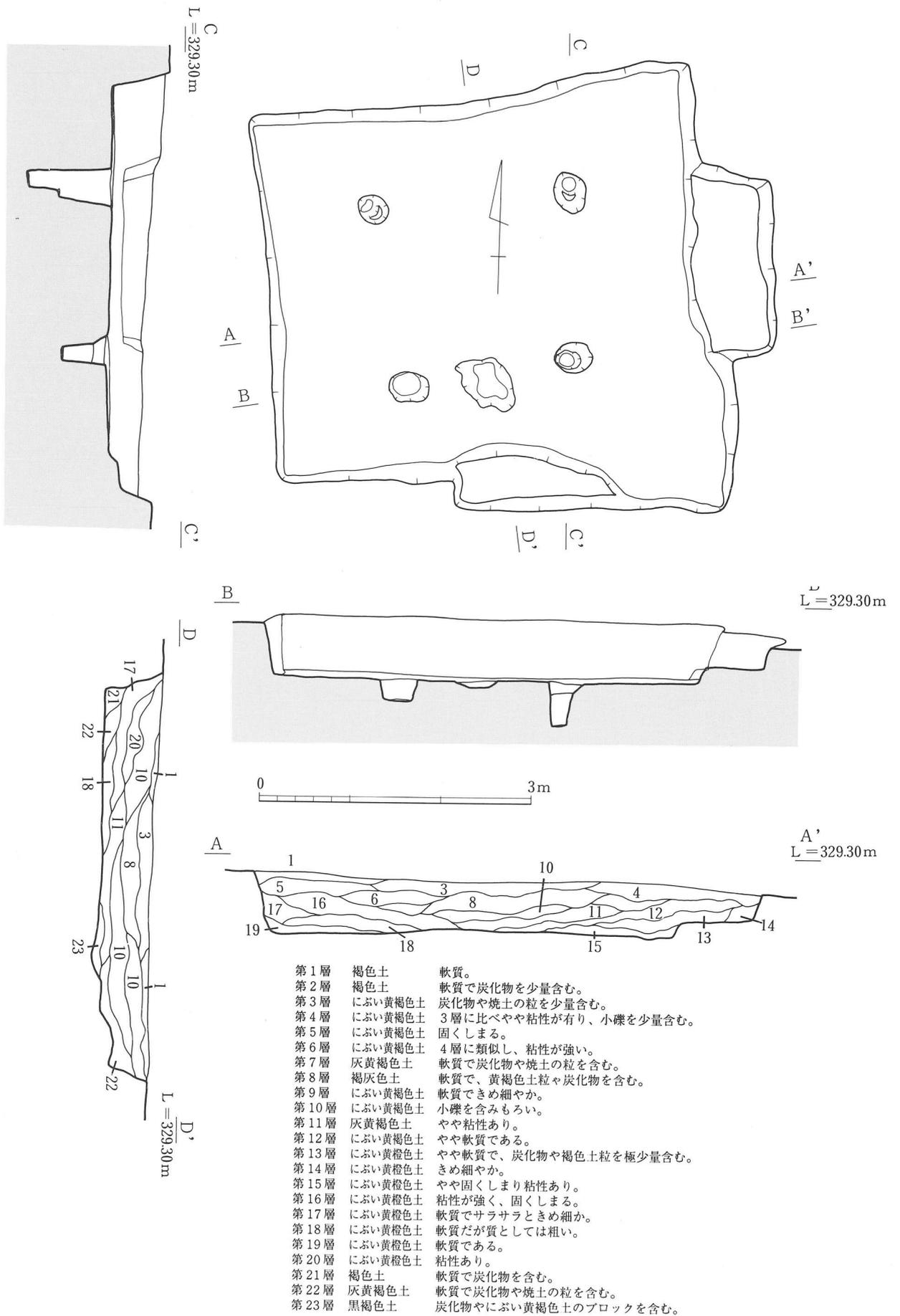


第1層	にぶい褐色土	やや軟質で炭化物を少量含む。	第18層	褐色土	やや硬質でIV・V層のブロックを含む。
第2層	暗褐色土	サラサラし、やわらかい。	第19層	暗褐色土	やや軟質でIV・VII層の粒を含む。
第3層	暗褐色土	2層よりしる。炭化物極少量含む。	第20層	暗褐色土	やや軟質で炭化物やVII層ブロックを含む。
第4層	暗褐色土	やや硬質でV層のブロックを含む。	第21層	暗褐色土	やや硬質で炭化物やV・VII層の粒を含む。
第5層	暗オリーブ褐色土	しまりがあり、炭化物や焼土を少量含む。	第22層	暗褐色土	やや軟質でVII層の粒を多量に含む。
第6層	暗褐色土	やや硬質で褐色土粒や炭化物を少量含む。	第23層	暗褐色土	軟質でVII層の粒やブロックを多量に含む。
第7層	暗褐色土	軟質である。	第24層	暗褐色土	23層に類似し、炭化物を多く含む。
第8層	暗褐色土	やや軟質で、比較的大きい炭化物やV層ブロックを含む。	第25層	褐色土	硬質でしる。V・VII層ブロックや粒を含む。
第9層	暗褐色土	硬質でしまりがある。炭化物や焼土を極少量含む。	第26層	極暗褐色土	軟質である。
第10層	暗褐色土	やや硬質でV層ブロックや炭化物や焼土を少量含む。	第27層	暗褐色土	軟質でV層粒を少量含む。
第11層	暗褐色土	やや硬質で粘性有り。V層ブロックや炭化物や量含む。	第28層	暗褐色土	硬質で炭化物やVII層粒を少量含む。
第12層	オリーブ褐色土	やや硬質で、VII層ブロックを含む。	第29層	暗オリーブ褐色土	硬質で、IV-2層に類似する。
第13層	暗褐色土	やや軟質で炭化物を少量含む。	第30層	暗褐色土	IV・V層ブロックを少量含む。
第14層	暗褐色土	やや軟質でVII層粒を少量含む。	第31層	黄褐色土	IV層粒を少量含む。
第15層	極暗褐色土	VI層ブロックや炭化物を含む。	第32層	黄褐色土	ややしまりがある。
第16層	暗褐色土	V層粒を含む。	第33層	暗褐色土	アカホヤ粒を少量含む。
第17層	暗褐色土	やや軟質で炭化物微量に含む。	第34層	にぶい褐色土	アカホヤ粒を少量含む。
			第35層	暗褐色土	軟質でVII層粒を少量含む。
			第36層	暗褐色土	軟質でVII層粒を少量含む。
			第37層	暗褐色土	やや硬質でVII層の粒を含む。
			第39層	褐色土	やや硬質で暗褐色土粒を含む。

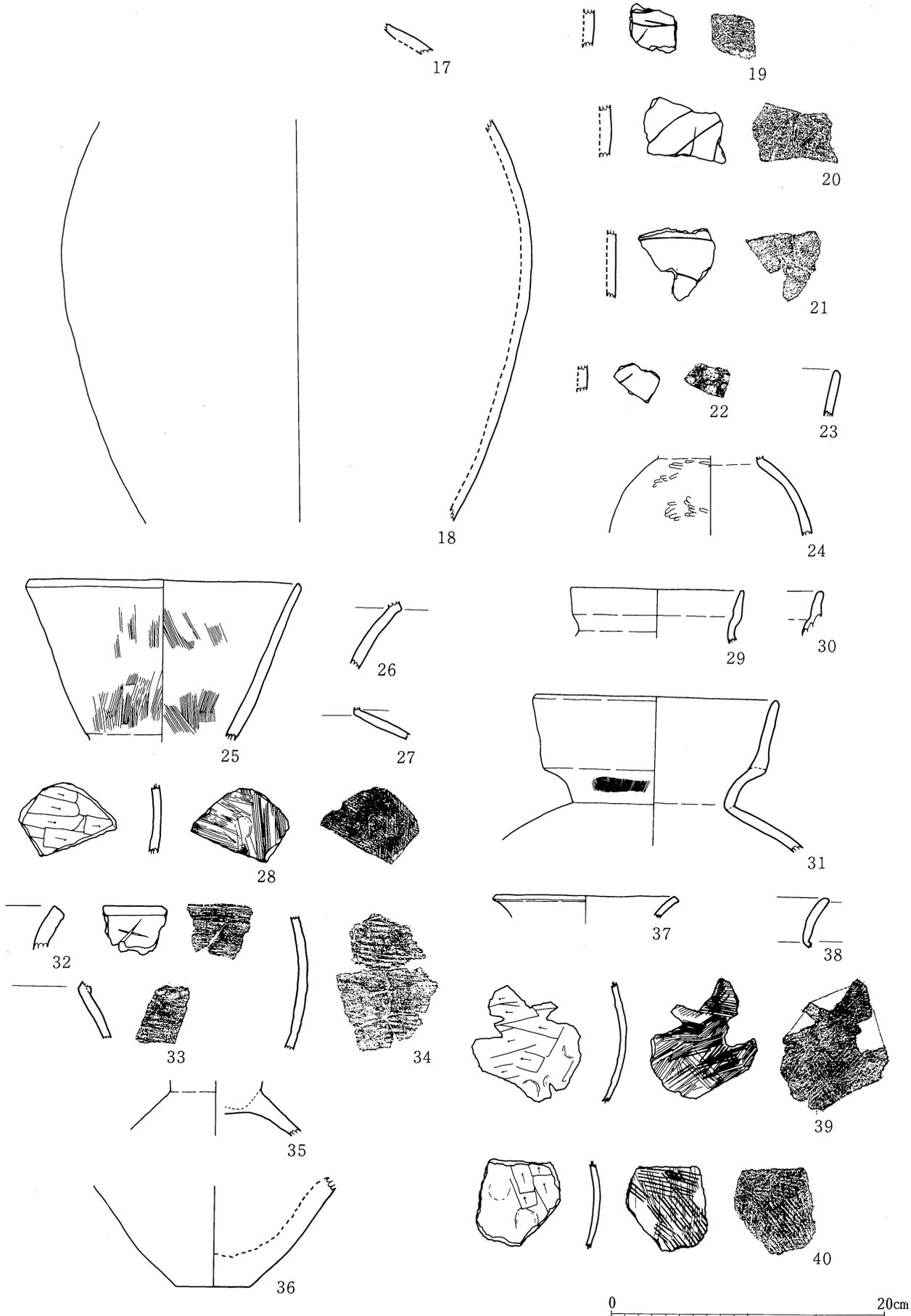
第4図 神殿遺跡C地区SA2遺構実測図



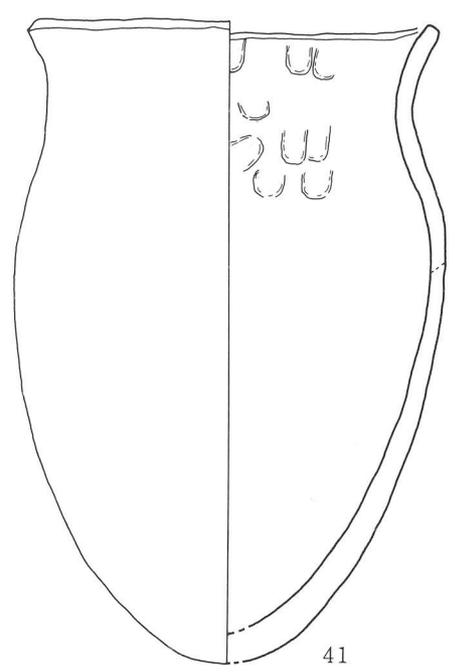
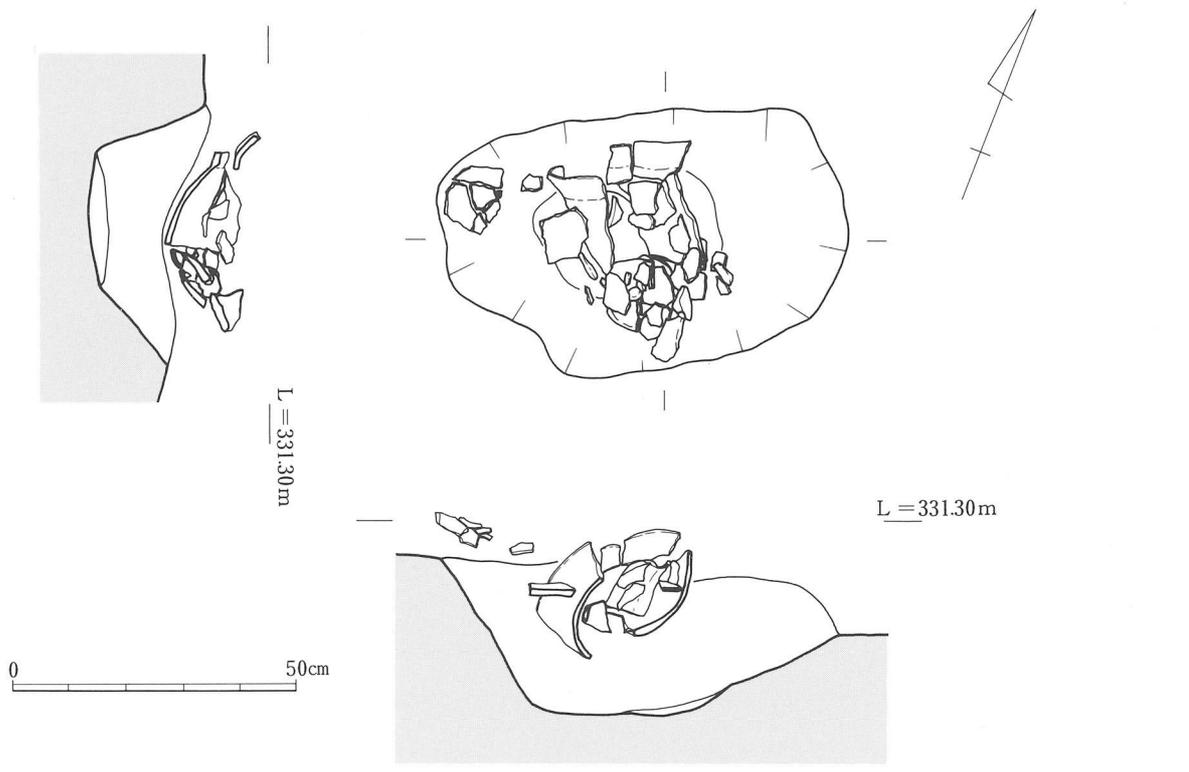
第5图 出土土器实测图(1)



第6図 神殿遺跡C地区SA3遺構実測図



第7图 出土土器实测图(2)



第8図 神殿遺跡C地区SA1遺構実測図及び出土土器実測図

かあるいは19や20にみるような細長い胴体?をもった動物あるいは舟の可能性もある。24は小型の壺で外面はヘラミガキ。石器は15の砥石のみである。緑色岩片で検出時には三つに割れていた。

(第12図)

SA3 (第6図)

SA1の西側約5mに位置する。北SA3周辺は尾根先端部に位置するため、IV層～VII層の堆積が薄く、さらに水田造成の削平を受けているため一部VIII層の灰白色粘質土が露出している。住居は長軸5.56m、短軸5.0mの方形プランを基調とし、東壁に張り出しを、南壁が鍵状の広がりを持ち、それぞれベッド状遺構を呈している。主軸、N-10°-W、面積は21.11m²。東壁の張り出しは、幅約2.2m、長さ約0.9m、床面からの高さ約15cm、広さ1.34m²。南壁は中央部付近から約30cm南側に鍵状に広がり、拡張部分に一部ベッド状遺構(面積0.61m²)が設けられている。床面までの深さは、傾斜地に作られていることから北側で0.62m、南側で0.28mを測る。主柱穴は4本で、南側の2柱穴間に長軸0.74m、短軸0.48m、深さ約0.08mの不整形の土坑を検出した。土坑内からは少量の炭化物が出土するが、焼土等は確認できなかった。

遺物(第7図25～26)

住居内出土の遺物は非常に少ない。

25は直口壺の口縁部で、口縁部が長く外方に開く。内外面ともハケメの後横ナデ調整が行われる。26は複合口縁壺の頸部で外面はハケメ調整、内面はナデ。28は布留系甕の胴部片で全体に風化が激しいが、外面は細かなハケメ、外面がヘラケズリ。石器としては磨石(18)が1点出土している(第12図)。そのほか床面から有茎の鉄鏝が1点出土しているが、整理の段階で行方不明となった。

SC1 (第8図)

SA2の東5mに位置し、一部木の根に攪乱されているが、V層上面の遺構検出面で甕が出土したため、周囲を精査して確認した。遺構は長軸0.71m、短軸0.45m、深さ0.31mの不整形をなす。甕は遺構の短軸方向に倒して置かれていたと推定されるが、床面からは10cmほど浮いている。

41は長胴の甕でほぼ完形に復元できた。頸部は稜をもたずなめらかに立ち上がり、口縁部は外方に開く。底部は丸底を呈す。内外面ともていねいなナデ調整だが、胴部下半には粗いケズリ状のナデがみられる。外面胴部上半にはススが、また内面胴部下半には炭化物が付着している。

遺構外出土の遺物

土師器(第7図27～40)

27は壺の頸部、内面の稜は鋭い。内外面ともナデ調整。29～31は口縁部が外傾する複合口縁壺の口縁部である。29・30は口縁部は短く外方に伸びる。内外面とも横ナデ調整。胎土には金(黒)雲母を少量含む。31は29・30に比べ口縁部が長く伸び大型となる。頸部と口縁部との粘土の接合面が観察できる。口縁部は横ナデ、頸部はハケメの後横ナデ。胴部外面は横ナデ、内面は風化気味だがナデと推定される。32は甕の口縁部で外面に「×」状の線刻が描かれる。33は外面にタタキが施された壺の頸部で、頸部屈曲部に突帯が付けられていた可能性がある。34も外面に横方向のタタキをもつ長胴の壺の胴部である。内面はていねいなナデ調整。35は甕の脚台部で、内面は欠損して厚み・調整は不明である。36は甕あるいは壺の底部で平底を呈す。底部付近は粗いナデ調整、内面は風化が著しく

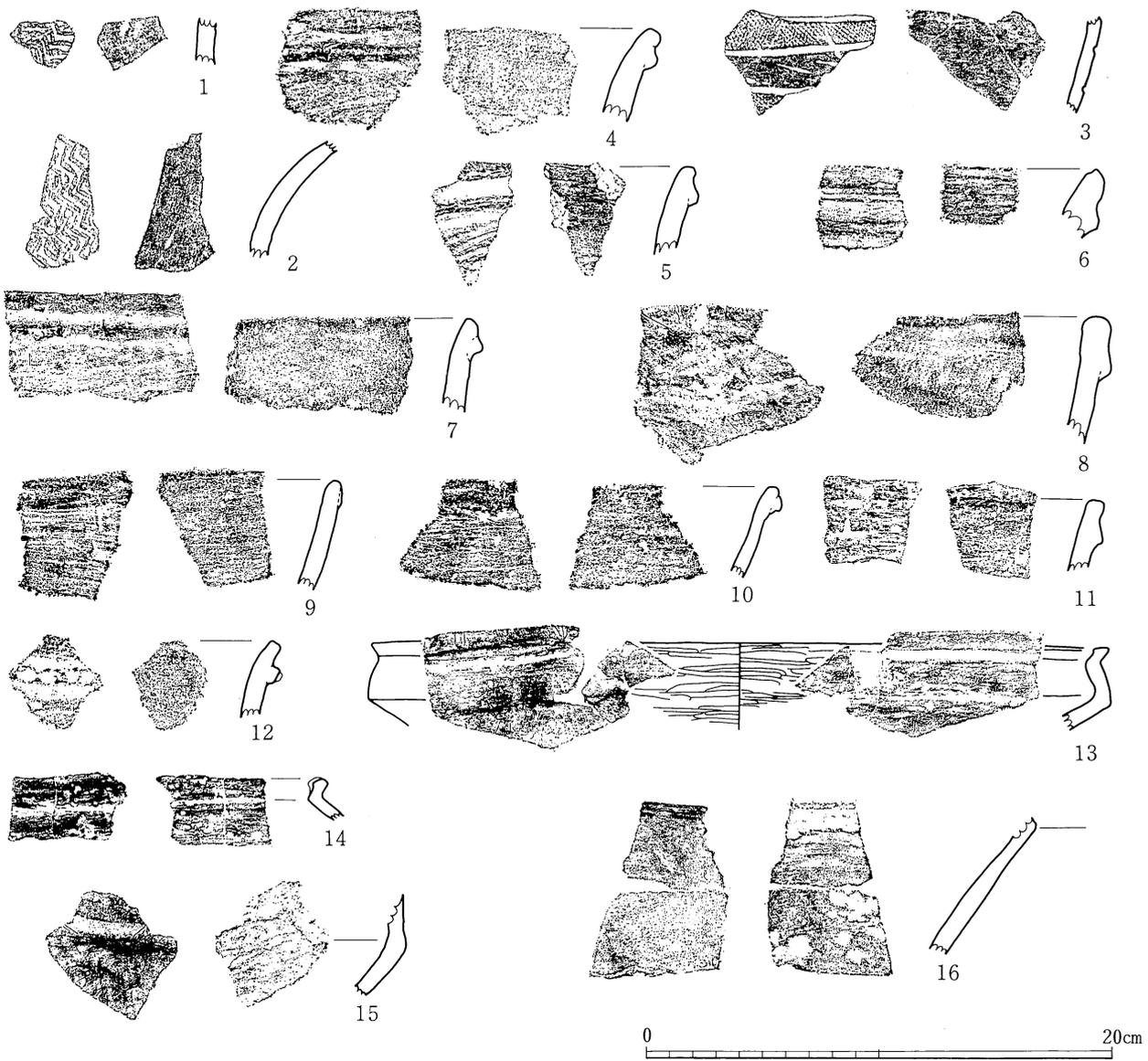
調整は不明。37～40は布留系の甕である。37は口径が13.1 cmと小さいが口縁端部はていねいに仕上げられている。39・40は胴部片でタタキ? (粗いハケメの可能性もある) の後ハケメ調整が行われる。

縄文土器 (第9図)

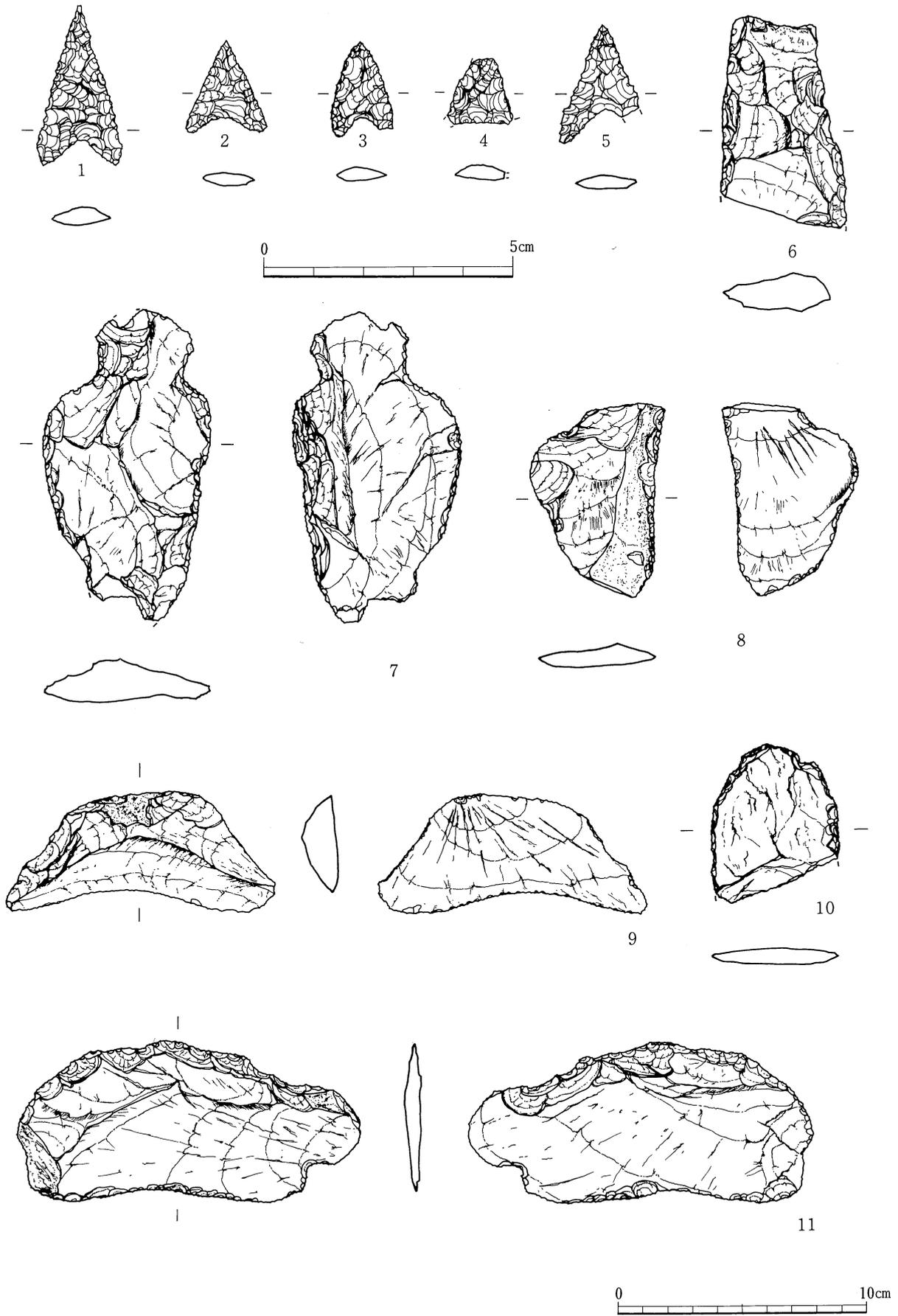
1・2は山形押型文土器の胴部片で、大きい山形文が全体に施文される。1は表土、2はSA2埋土中より出土した。3は磨消縄文の胴部片でSA1の埋土中より出土。4～10は口縁部外面に刻目の無い断面三角形の突帯が一条めぐる深鉢形土器の口縁部である。突帯は明確な三角ではなく丸味をもち、突帯の貼り付けは粗雑である。10の突帯は口縁部直下に付けられる。調整は、4・6はナデ調整、それ以外は貝殻条痕文となる。11・12は刻目が施された粗製の深鉢形土器の口縁部である。11は外傾し、不明瞭な刻目が施される。内外面ともナデ調整。12は口縁部直下に刻目突帯がめぐる。刻目は棒状の工具によって施文され、内外面ともナデ調整。13・14は精製磨研の浅鉢で同一個体の可能性もある。内面に段を有し、頸部は短く屈曲する。14は口縁部が波状を呈す。15・16は精製の深鉢の胴部片である。

石器 (第10図)

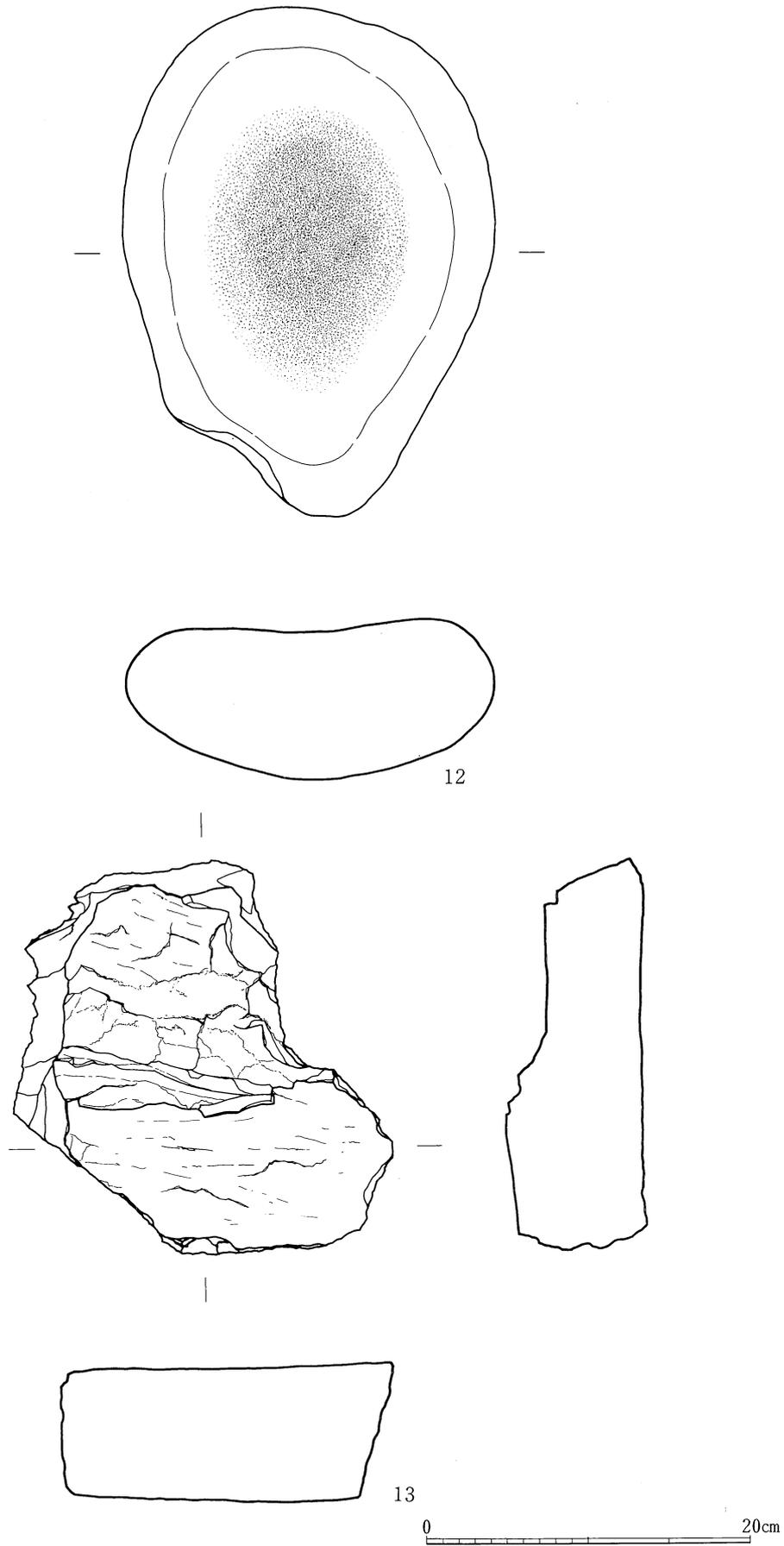
1～5は石鏃ですべて凹基式である。凹基が深いもの(5)やわずかに凹むもの(4)がある。3～5は姫島産黒曜石製。6は打製石斧で刃部は欠損している。10は偏平打製石斧で厚みが無く非常に薄い。7～9・11はスクレーパーあるいは横刃形の石器である。剥片の長軸部分を加工し、直線あるいは内湾気味に刃部を作り出している。7・11は挟りが入りツマミ状を呈す。9は横長の剥片を利用している。12は砂岩製の石皿である。円磔を利用し、片面に凹みが見られる。13は第IV層から出土したチャートの原石で、節理面を全面に残す。石器製作の素材として持込まれたものと考えられる(第11図)。22～23は砥石である。22は全面使用されており、数条の溝が縦方向に走っている。22は小型で現存長約6.8 cm、幅約3.2 cmを測る。24磨石で全面に磨痕が認められる。



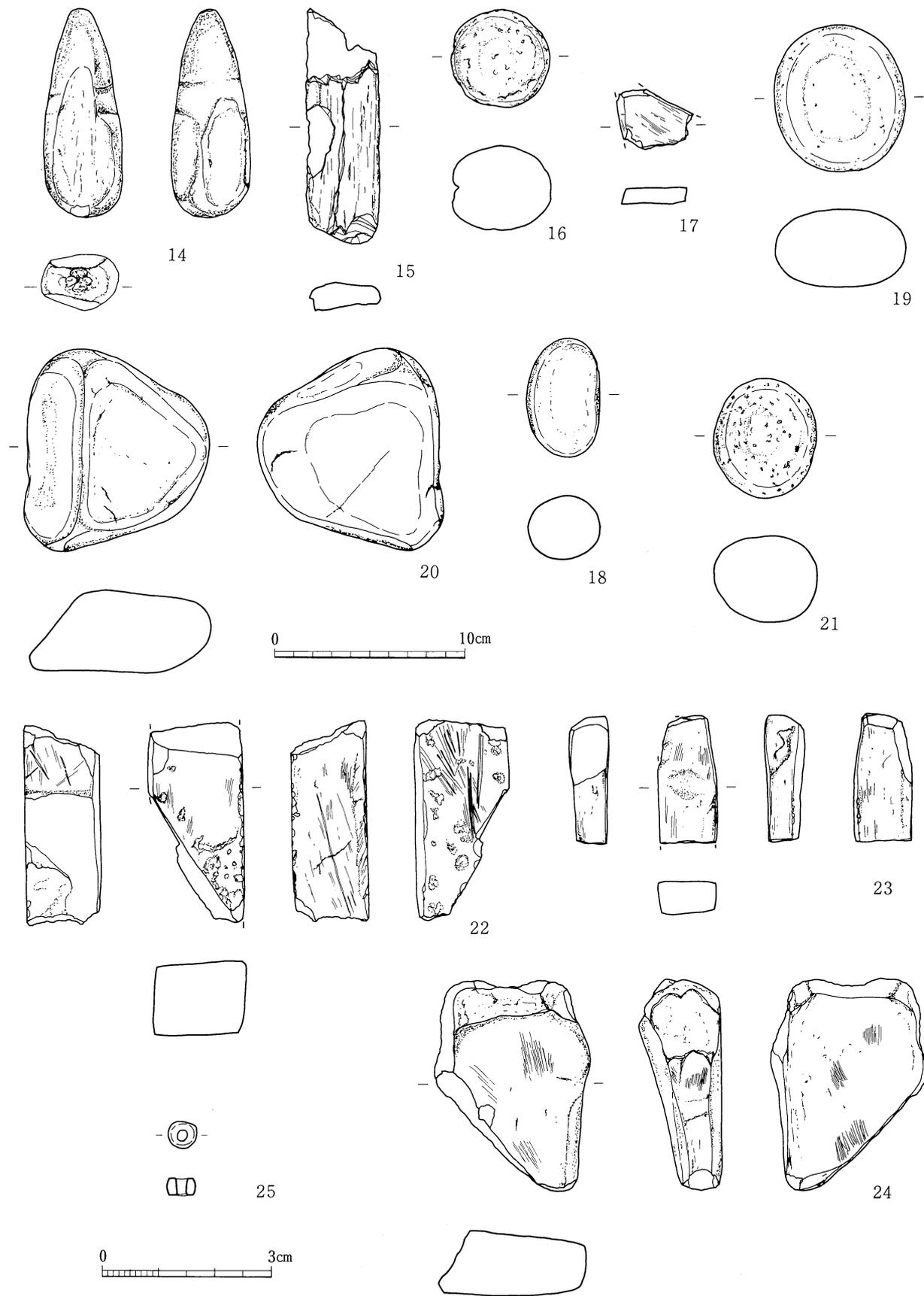
第9图 出土土器实测图(3)



第10图 出土石器实测图(1)



第11図 出土石器実測図(2)



第12图 出土石器实测图(3)

第5節 まとめ

今回の調査の出土遺物としては、古墳時代の土師器、鉄鏃、ガラス小玉のほか縄文土器などが出土しているが、ここでは出土土器及び住居跡について若干のべてまとめに替えたい。

遺物の出土量は少ないが甕は、頸部があまりくびれず、底部が丸底をなし、1号土坑出土の41は、1号住居跡の1より頸部の状況や胴部の張りなどからやや時期が下がるものと考えられる。壺は7のような小型丸底埴の系譜のものや丸底をなすもの(8)、長胴で大型のものがある。高坏は1点しか出土していないが、口径が18cm程度と小型で、坏部は浅く、屈曲が明瞭で口縁部が外方に開く。そのほか、外来系要素を有する土器として布留式系甕や二重口縁壺などが出土している。布留式系甕は、C地区全体で少なくとも8個体分の遺物が確認できた。これは県内の同時期の遺跡と比較し極めて多いといえる。口縁部は直線的に開くものや端部がさらに外反するものがあり、口縁端部は丸く仕上げられ胴部は球形をなす。器壁は14や16の胴部中央が一部3mm強と薄くなるものもみられるが、大半は5～8mmと厚手である。外面はタテあるいはナナメ方向の細かなハケ調整、一部その後、ナデ。内面は口縁部横ナデ、頸部指オサエ、胴部ヘラケズリ、胴部下半及び底部は指オサエ。外面にはススが、内面下半部には炭化物が付着している。色調はほとんどが黄褐色系で、灰白色の粒子を含み、砂粒を多く含む在地系の土器とは大きく違っている。外傾する口縁を有する甕(29・30)や大型の二重口縁壺(31)は、同時期と推定される県内の遺跡で散見され、瀬戸内から山陰の影響が想定されるがその系譜や時期についてははっきりせず、今後の検討課題である。

これらの遺物は、出土量が少なく住居床面より浮いて出土しているため住居の時期決定にはならないが、甕・壺の丸底化、小型器種の消失、高坏や布留式系甕の特徴などから、甕の形態差やタタキの有無など地域差はあるものの新富町八幡上遺跡3号住居⁽¹⁾から同上藪遺跡F地区のI期⁽²⁾にかけての時期、古墳時代前半(布留新段階)に相当する。

また、今回注目すべき布留式系甕の出土遺跡としては、宮の前第2遺跡B地区2号住居跡(高千穂町)⁽³⁾、枝遺跡(門川町)⁽⁴⁾、猿野遺跡(宮崎市)⁽⁵⁾、熊野原遺跡C地区(宮崎市)⁽⁶⁾、天神河内遺跡(田野町)⁽⁷⁾などあるが、出土量は少なく、土器組成においても、一部球形胴やタタキ技法、底部の丸底化など外来系要素は認められるものの、あくまで在地系のものが主体を占めている。それらを搬入品とするには、畿内あるいは北部九州の器形や調整、器壁の厚さなど違いが見られ、布留系土器の県内での受容・展開についての今後の課題としておきたい⁽⁸⁾。

次に、検出された住居跡は、すべて方形を基調とした4本柱で、南側に炭化物や焼土を含む浅い土坑を有する、この時期通有の形態を呈し、日常の生活遺構であったと考えられる。ただ、面積は1号住居跡が約38.5m²、2号住居跡が約15m²、3号住居跡が約21m²を測り、さらに住居が一部拡張されたり、ガラス玉を出土するなど住居間に格差が認められる。このように今回調査されたC地区の住居跡群は、古墳時代前半の一時期に営まれた最小単位の集落と想定される。

高千穂地域では、高千穂バイパス関連や広域農道のほか温泉開発などの事業により縄文時代～古墳時代の様相がここ数年間の調査で次第に明らかになっている。調査地も台地の上ばかりではなく、比較的急斜面においても調査の手が入り遺跡の存在が知られるようになった。しかし、生活の基盤である生業については、A地区の古墳時代初頭の住居から磨製石鏃や磨石、磨製石斧、石包丁、鉄鏃など出土し、狩猟・採集や、ヒエやアワなどを栽培する畑作や稲作などが行われていたであろう⁽⁹⁾と考えられ、実際、

布留式系甕の内面に炭化物（焦げ）が付着していることからも何等かの調理が行われたことが分かるものの、それらに関わるような遺構・遺物については不明な点が多く、発掘調査技術も含め今後の調査の課題であろう。

註

- (1) 近藤協「八幡上遺跡」『新富町文化財調査報告書 第13集』新富町教育委員会 1986
- (2) 谷口武範ほか「上藪遺跡F地区・溜水第2遺跡」『新富町文化財調査報告書 第18集』新富町教育委員会 1995
- (3) 長津宗重ほか「吾平原第2遺跡・宮ノ平遺跡・城ノ平遺跡」宮崎県教育委員会 1993
- (4) 平成 年、県教委によって調査。
- (5) 鳥枝誠『猿野遺跡・萩崎第2遺跡』宮崎市教育委員会 1996
- (6) 面高哲郎ほか「熊野原遺跡C地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集』宮崎県教育委員会 1985
- (7) 菅付和樹・谷口武範『天神河内第1遺跡』宮崎県教育委員会 1991
- (8) 註3文献においても指摘されている。
- (9)

参考文献

- 小柳和宏「土器の編年（古式土師器を中心に）」『楠野・大分県文化財調査報告書 第63輯』大分県教育委員会 1983
- 寺沢 薫「畿内古式土師器の編年と2・3の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所 1986
- 坂本嘉弘ほか『高松遺跡』犬飼町教育委員会 1988
- 玉永光洋「大溝出土土器群の時期幅について」『安国寺遺跡 大分県・国東町文化財調査報告書 第54集』国東町教育委員会 1989
- 米田敏幸「土師器の編年 近畿」『古墳時代の研究 6』雄山閣 1991
- 吉本正典「宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察—須恵器出現以前の資料を中心に」『宮崎考古第14号』宮崎考古会 1995

第1表 神殿遺跡出土土器観察表

遺物 番号	器形 部位	出土 位置	調 整		文様および法量	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
1	甕 口縁~底部	SA1	丁寧なナデ	ナデ 指おさえ	(口径23.9cm)(器高39.1cm) 胴部外面に線刻	にぶい赤褐(5YR5/4) にぶい黄褐(10YR6/4) にぶい黄褐(10YR5/3)	明赤褐(5YR5/6) にぶい黄褐(10YR5/4) にぶい褐(7.5YR5/3)	3~5mmの灰白・茶・褐・黒褐色粒、 2mm以下の灰白・茶・褐色砂粒	スス附着
2	甕 口 縁	SA1	横ナデ	横ナデ後指おさえ	(口径22.7cm) 外面に線刻	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	5mm以下の灰白色粒、 3mm以下の褐・茶褐色砂粒	3と同一個体
3	甕 頸 部	SA1	横ナデ	横ナデ後指おさえ	外面に線刻	にぶい赤褐 (5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	5mm以下の灰白・褐・茶褐色粒	
4	甕 口 縁	SA1	横ナデ	横ナデ後指おさえ	外面に鋸歯状の線刻	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (5YR6/4)	6mm以下の暗赤褐色粒、4mm以下の褐色、3mm 以下の灰白・茶褐色、2mm以下の黒褐色砂粒	スス附着
5	壺 胴 部	SA1	右下りのタタキ	ナデ		にぶい黄褐 (10YR5/3)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	1mm以下の透明・黒色光沢粒	
6	壺 頸 部	SA1	口縁部横ナデ 胴部ヘラミガキ	横ナデ 指おさえ		にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	2mm以下の黄橙・褐色砂粒、 1mm以下の透明・黒色光沢粒	スス附着
7	壺 口縁~底部	SA1	工具による調整の 後丁寧な横ナデ	丁寧なナデ	(口径8.9cm)	黄褐(2.5Y5/3) にぶい褐(7.5YR5/4)	灰黄褐(10YR4/2) にぶい褐(7.5YR5/4)	2mm以下の灰白色砂粒、 0.5mm以下の透明・黒色光沢粒	黒変
8	壺 頸部~底部	SA1	ナデ 風化ぎみ	ナデ		にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	3mm以下の灰・赤褐・黒色砂粒、 微細な透明光沢粒	スス附着
9	高坏 坏部~脚部	SA1	ヘラミガキ 横ナデの後ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ 脚部ナデ	(口径18.1cm)	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (5YR6/4)	1.5mm以下の浅黄・褐・黒褐色砂粒、 0.5mm以下の透明光沢粒	
10	甕 胴 部	SA1	ハケメ	ヘラケズリ		にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (10YR6/4)	2mm以下の灰白・淡黄色、1mm以下の褐灰・ 黒色砂粒、透明光沢粒、柱状の黒色光沢粒	布留系 スス附着
11	甕 胴 部	SA1	ハケメ	ヘラケズリ		にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい黄褐(10YR5/3)	2.5mm以下の灰白・淡黄・褐灰色、1mm以下の 黒色砂粒、透明光沢粒、柱状の黒色光沢粒	布留系 スス附着
12	甕 口 縁	SA2	ナデ	ナデ	内面に数条の線刻	黒褐 (10YR3/2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	3mm以下の乳白色砂粒、 2mm以下の透明・黒色光沢粒	スス附着
13	甕 頸 部	SA2	ナデ ハケメ	ナデ ヘラケズリ		にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	2mm以下の黄橙・灰褐色 砂粒、黒色光沢粒	布留系 スス附着
14	甕 口縁~頸部	SA2	横ナデ	横ナデの後指おさえ	(口径14.4cm) 外面に線刻 内面に3条の線刻	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mm以下の灰白・褐色砂粒、 1.5mm以下の透明・黒色光沢粒	布留系
15	甕 口縁~底部	SA2	口縁部横ナデ 胴部ハケメ	頸部指おさえ 胴部ヘラケズリ 底部指おさえ	(口径17.7cm) 器高	橙(7.5YR6/6) 明黄褐(10YR6/4)	明黄褐(10YR6/6) 褐灰(10YR4/1)	5mm以下の灰白・褐・黒色粒、 2mm以下の黒色光沢粒	布留系 スス附着
16	甕 完 形	SA2	口縁部横ナデ 胴部ハケメ	口縁部指おさえ の後横ナデ	口径(15.6cm) 器高22cm	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	4mm以下の白・灰白色砂粒	布留系
17	壺 頸 部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい		にぶい橙 (7.5YR6/4)	灰白(2.5Y7/1)	3mm以下の淡黄・灰白・褐色砂粒	17~23同一個体
18	壺 胴 部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい		橙(7.5YR6/6) にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR7/6) にぶい黄橙(10YR7/4)	5mm以下の乳白・淡黄・灰・ 褐色砂粒	
19	壺 胴 部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙 (7.5YR6/4)		3mm以下の淡黄・灰・褐色砂粒	
20	壺 胴 部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙 (7.5YR6/4)		5mm以下の淡黄・灰・褐色砂粒	
21	壺 胴 部	SA2	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙 (7.5YR6/4)		3mm以下の淡黄・灰色砂粒	
22	壺 胴 部	SA1	ヘラミガキ	風化著しい	外面に線刻	にぶい橙 (7.5YR6/4)		4mm以下の淡黄・灰色砂粒	
23	壺 口 縁	SA2	横ナデ	横ナデ		灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	4mm以下の乳白色粒、 1mm以下の透明・黒色光沢粒	スス附着
24	壺 頸部~肩部	SA2	ヘラミガキ	指おさえの後ナデ		橙(7.5YR7/6) にぶい黄褐(10YR5/3)	橙(7.5YR6/6)	4mm以下の灰白・灰褐・黄褐・茶褐色砂粒、 1mm以下の黒色光沢粒	スス附着
25	壺 口縁~頸部	SA3	ハケメの後横ナデ	ハケメの後ナデ	(口径14.8cm)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい橙(7.5YR6/4)	3mm以下の白・褐色砂粒、 0.5mm以下の透明光沢粒	スス附着
26	複合口縁壺 口 縁	SA3	ハケメ	ナデ		橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	3mm以下の黄白・褐・赤褐・黒褐 色砂粒、0.5mm以下の透明光沢粒	
27	壺 頸 部	b-IV層	ナデ	ナデ		浅黄橙 (10YR8/4)	褐灰(10YR6/1) 黄橙(10YR8/6)	2mm以下の乳白・褐色砂 粒透明光沢粒	
28	甕 胴 部	SA3	ハケメ	ケズリ		浅黄橙(10YR8/4) にぶい黄褐(10YR5/3)	浅黄橙(10YR8/3) にぶい黄橙(10YR7/3)	3mm以下の灰白・黄白・黄灰色砂粒、 1mm以下の透明・黒色光沢粒	布留系 スス附着
29	壺 口 縁	b-III層	丁寧な横ナデ	指おさえの後横ナデ	(口径12.5cm)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の乳白・灰・褐・黒色砂粒、 微細な透明・黒色光沢粒	スス附着
30	壺 口 縁	c-IV層	横ナデ	横ナデ		黒褐(2.5Y3/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の灰白色砂粒、透明・ 黒色光沢粒	スス附着

第2表 神殿遺跡出土土器観察表

遺物 番号	器形 部位	出土 位置	調 整		文様および法量	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
31	壺 口縁~頸部	d-Ⅲ層	口縁部横ナデ 頸部横ナデの後ハケメ	横ナデ 指おさえ	(口径17.6cm)	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	3mm以下の白色砂粒、 2mm以下の透明・黒色光沢粒	黒変
32	甕 口 縁	d-Ⅱ層	横ナデ	指おさえ後横ナデ	「メ」印の沈線	赤褐(5YR4/6)	赤褐(5YR4/6)	4mm以下の茶褐色粒、 2mm以下の褐色砂粒	
33	甕 頸 部	b-Ⅱ層	タタキ	ナデ	頸部に突帯	にぶい黄褐 (10YR5/4)	灰黄褐 (10YR4/2)	2mm以下の白色砂粒、透明 黒色光沢粒	
34	甕 胴 部	b-Ⅱ層	タタキの後一部ナデ	ナデ		黄褐(2.5Y5/4) 黒褐(2.5Y3/1)	黄褐(2.5Y5/4) 黒褐(2.5Y3/1)	3mm以下の褐色砂粒、 1.5mm以下の透明・黒色光沢粒	黒変
35	甕 底部脚台	b-Ⅳ層	ナデ 風化ざみ	ナデ 風化ざみ		にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	4mm以下の乳白・白色砂粒、 3mm以下の透明・黒色光沢粒	
36	壺 底部~胴部	d-Ⅳ層	丁寧なナデ	ナデ 風化著しい	(底径4.0cm)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙(5YR6/6)	3mm以下の白色砂粒、15mm以下 の乳白・茶褐・黒色砂粒	
37	甕 口 縁	b,d-Ⅳ層	横ナデ	横ナデ	(口径13.1cm)	暗灰黄(2.5Y5/2) にぶい黄褐(10YR5/3)	明赤褐(5YR5/6) にぶい褐(7.5YR5/4)	2mm以下の灰白・黄橙・赤褐 色砂粒、透明・黒色光沢粒	布留系
38	甕 口縁~頸部	b-Ⅳ層	横ナデ	指おさえた後ナデ 頸部指おさえ		にぶい橙(7.5Y6/4) 黄灰(2.5Y4/1)	にぶい橙(7.5Y6/4)	1mm以下の灰褐・赤褐・赤色 砂粒、透明・黒色光沢粒	布留系 スス付着
39	甕 胴 部	b-Ⅱ層	タタキ?	ヘラケズリー部ナデ		灰黄褐 (10YR4/2)	黒褐(7.5YR2/2)	1mm以下の灰黄色砂粒、透明 黒色光沢粒	布留系 スス付着
40	甕 胴 部	b-Ⅱ層	タタキの後ハケメ	ヘラケズリー部ナデ		灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	1mm以下の灰白・灰・褐灰色砂 粒、柱状の黒色光沢粒	布留系 内外面スス付着
41	甕 ほぼ完形	S C 2	ナデ	指おさえた後ナデ		にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	5mm以下の乳白・灰白・褐色砂粒、2mm以下 の黒色光沢粒、0.5mm以下の透明光沢粒	外面胴部上半部にス ス付着及び内面胴部 下半部に炭化物付着

第3表 神殿遺跡縄文土器観察表

遺物 番号	器形 部位	出土 位置	調 整		文様および法量	色 調		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
1	深 鉢 部	b-Ⅱ層	ナデ	ナデ	外面に山形押型文	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	微細な透明光沢粒	
2	深 鉢 部	S A 2	ナデ	ナデ	外面に山形押型文	灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の透明光沢粒	
3	深 鉢 部	S A 1 埋土中	ナデ	ミガキ	外面に磨消縄文	明黄褐(10YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	6mmの黒色粒、3mm以下の灰白・ 褐灰色砂粒、微細な透明光沢粒	
4	深 口 鉢 縁	b-Ⅳ層	ナデ	指押えの後ナデ	外面に突帯	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	4mm以下の淡黄・灰色砂粒、 2mm以下の透明・黒色光沢粒	
5	深 口 鉢 縁	b-Ⅱ層	貝殻条痕	横ナデ	外面に突帯	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	7mm以下の灰色粒、3mm以下の 淡黄・灰色砂粒、黒色光沢粒	
6	深 口 鉢 縁	b-Ⅳ層	横ナデ	横ナデ	外面に突帯	灰黄褐(10YR4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	1mm以下の乳白色砂粒、 透明・黒色光沢粒	スス付着
7	深 口 鉢 縁	b-Ⅲ層	貝殻条痕	指押えの後ナデ	外面に突帯	にぶい黄橙(10YR9/4) にぶい黄褐(10YR4/3)	にぶい黄橙(10YR6/4) にぶい黄褐(10YR5/3)	5~8mmの褐色粒、2mm以下の淡黄・ 褐色砂粒、1mm以下の黒色光沢粒	
8	深 口 鉢 縁	b-Ⅱ層	丁寧なナデ	丁寧なナデ	外面に突帯	灰黄褐(10YR4/2) 暗灰(N3/)	にぶい褐(7.5YR5/4) 暗灰(N3/)	9mmの灰色粒、3mm以下の淡黄・ 灰・茶色砂粒、透明・黒色光沢粒	
9	深 口 鉢 縁	b-Ⅴ層	貝殻条痕	貝殻条痕	口縁部直下にわずかな突帯	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	3mm以下の白色砂粒、透 明黒色光沢粒	
10	深 口 鉢 縁	b-Ⅳ層	貝殻条痕	貝殻条痕	外面に突帯	にぶい黄(2.5Y6/4) にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	3mm以下の淡黄・灰色砂 粒、透明・黒色光沢粒	
11	深 口 鉢 縁	S A 1	貝殻条痕	ナデ	外面に刻目突帯	オリーブ黒(7.5Y3/2)	オリーブ褐(2.5Y4/6)	3mm以下の灰白色砂粒・ 透明光沢粒	
12	深 口 鉢 縁	b-Ⅳ層	ナデ	ナデ	外面に刻目突帯	にぶい黄褐 (10YR4/3)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	3mm以下の淡黄・橙色砂粒、 透明・黒色光沢粒	
13	浅 口 鉢 縁	Ⅳ層 b-Ⅳ層	ミガキ	ミガキ	内面に段を有す	暗褐(10YR3/3)	黒褐(10YR3/2)	微細な淡黄色砂粒	精製磨研
14	浅 口 鉢 縁	S A 1 b-Ⅲ層	ミガキ	ミガキ	口縁部波状 内面に段を有す	黒(5Y2/1)	オリーブ褐(5Y3/2)	微細な透明光沢粒	精製磨研
15	深 鉢 部	a-Ⅳ層	ミガキ 丁寧なナデ	ミガキ		にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	1mm以下の褐色砂粒、透明・ 黒色光沢粒	スス付着 精製磨研
16	深 鉢 部	S A 3	ミガキ 風化著しい	ミガキ		黒褐(10YR3/1)	黒褐(10YR3/1)	0.5mm以下の黄白・褐色砂 粒、透明光沢粒	精製磨研

第4表 神殿遺跡出土石器計測表

実測図 番号	器 種	出 土 位 置	石 材	現存長 (cm)	現存幅 (cm)	現存厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
1	石 鏃	b-IV層	チャート	3.20	1.70	0.36	1.5	
2	石 鏃	1号住居埋土	チャート	1.83	1.59	0.26	0.5	
3	石 鏃	a-V層	黒曜石	1.95	1.2	0.27	0.5	姫島産
4	石 鏃	d-III層	黒曜石	1.30	1.30	0.31	0.6	姫島産 先端部および脚欠損
5	石 鏃	c d段IV-2層一括	黒曜石	2.40	1.60	0.32	0.7	基部欠損・姫島産
6	打製石斧	a-III層	流紋岩	8.60	5.05	1.55	7.4	刃部欠損
7	横刃形石器	表土中	流紋岩	12.55	6.70	1.75	120.0	つまみあり
8	スクレイパー	c-IV層	流紋岩	7.80	5.45	0.95	38.0	
9	スクレイパー	c-IV層	流紋岩	4.85	10.75	1.40	53.7	
10	偏平打製石斧	b-IV層	粘板岩	6.45	5.20	0.65	29.4	刃部欠損
11	横刃形石器	b-IV層	流紋岩	6.50	13.80	0.70	81.2	
12	石 皿	a-IV層	砂岩	31.60	22.75	9.90	11,500	
13	チャート原石	d-IV層	チャート	24.55	23.20	8.7	7,000	
14	敲 石	1号住居埋土	砂岩	11.10	4.10	3.0	183.2	
15	砥 石	2号住居埋土	緑色片岩	12.45	3.95	1.60	89.7	欠損
16	磨 石	1号住居埋土	花崗岩	5.15	5.25	4.50	157.5	
17	砥 石	1号住居埋土	流紋岩	3.20	4.30	0.80	4.6	欠損
18	磨 石	3号住居埋土	輝石安山岩	6.25	3.85	3.40	124.7	
19	磨 石	b-II層	閃緑岩	7.80	6.90	4.10	345.5	
20	砥 石	d-III層	砂岩	10.70	9.75	4.40	675.3	
21	磨 石	a-IV層	凝灰岩	6.30	5.50	4.6	219.4	
22	砥 石	c-III層	砂岩	10.60	5.0	3.95	299.5	欠損
23	砥 石	d-III層	砂岩	6.75	3.15	1.75	72.8	欠損
24	砥 石	a-IV層	砂岩	11.20	8.25	3.50	466.8	欠損
25	小 玉	1号住居埋土	緑色ガラス	0.5	0.5	0.3	0.1	



調査区遠景
(北西より)



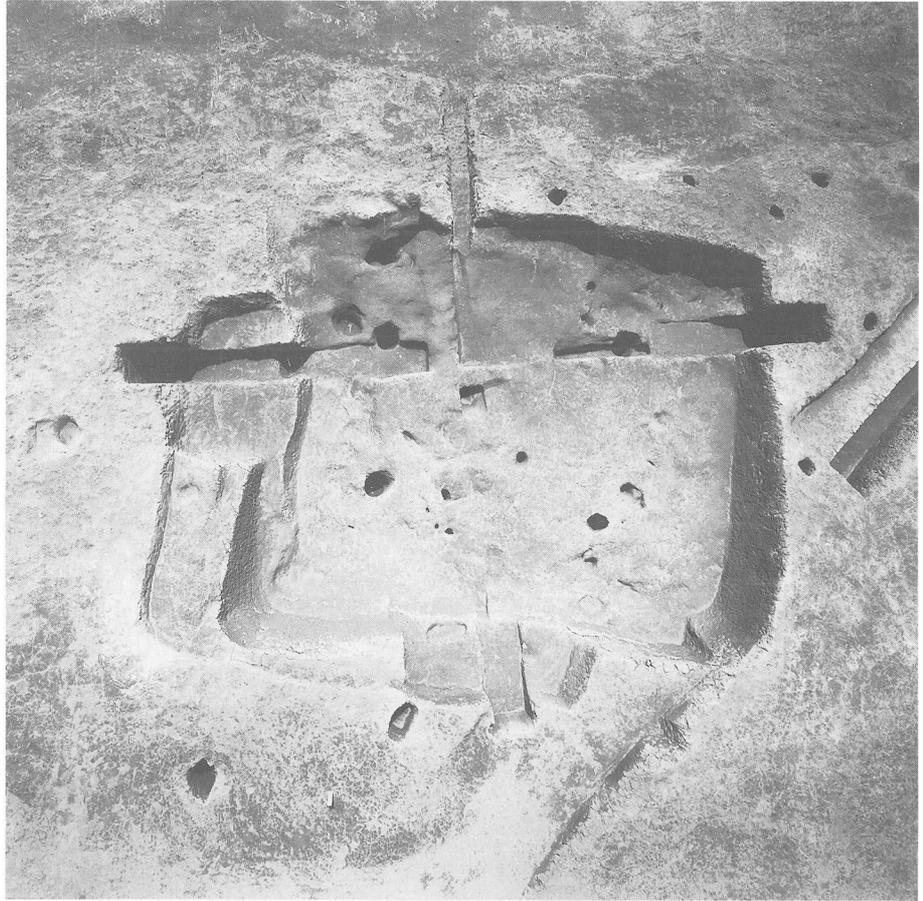
調査区遠景
(北より)



調査区遠景
(西より)



遺構検出状況



SA1
検出状況

SA1 検出状況 (南より)

